

宜に水をさした。田舎の婢の赤い頬が白い湯氣の中にそれと見えた。

ふと義朝は指して、

『あの杉の森は寺ぢやな?』

『さうでな——』

『あの寺で、昨夜の節季の鐘は撞いたのぢやな?』

『さうでな——』

婢は豪い源氏の大将といふのに一も二もなく押されて了つて、碌々に口もきけないといふやうに——否、こゝらあたりの田舎言葉を何う打ち出して好いかわからないといふやうに、同じ言葉をつゞけざまに言つてそして小さくなつて了つた。

『古い寺ぢやな?』

『さうでな——』

『いつ頃から出来た寺ぢやか、おぬしは知らぬか?』

『よう存じませぬでな——』

愈々小さくなつて了うばかりなので、義朝はその問ひをやめて、再びじつとその杉の森の梢の上遙に徐かに輪をゑがいて舞つてゐる鳶を見詰めた。

婢は手水の湯の加減を見て了ふと、そのまゝ急いで廊下を向うの方へと行つた。

そこに鎌田がやつて来た。かれは今朝は割合に早く目覺めて、今か今かと義朝の起きるのを待つてゐたのであつた。

『お目覺で御座つたか?』

『お、今朝はゆつくり眠つた。もはや遅いのぢやらうな?』

『いや、まだ、それほどでも御座りませぬが……』鎌田もあたりを見廻すやうにして、『それでも今日は好い元日で御座るな?』

『本當ぢや。』

義朝は婢の汲んで置いた手水盥で顔を洗つたが、手帛で手を拭き終りながら、

『さう言へば、その身は知つてゐるぢやらうな? あれは何といふ寺ぢやな?』

『あの杉森の中の寺で御座るか?』

『さうぢや。』

『御存じありませぬか、あれが大坊と申して、知多では名高い大寺で御座る……』

『あ、あれが大坊か? あの寺が——?』さう言へば、義朝もかねてからその名を聞いてゐないではなかつた。弘法大師の一時留錫した寺で、今から百年前には、勅願寺にまでされたことのある由緒のあ



る寺であつた。

『たしか、彌陀三尊の安置されてある寺ぢやな？』

『さやうで御座る……』

義朝は左の手を額のところを持つて行つて、じつと伏し拜むやうな形をした。その胸には千波姫や朝長や頼朝の面影が浮んで來てゐた。

暫らくしてから、

『あとで詣で、見ても宜しう御座る？』

『さうぢやな。』

かう義朝は言つたが、言葉を續いで、『それにしても何うするな？』

『東國へ行くことについてで御座るか？』

『さうぢや。』

『まア、しかしゆるりとしませ。此處なら、別に心を置かねばならぬやうなことは御座りませぬに。』

『それはさうぢやが、東國へは一刻も早う行つて、一刻も早く京へ上る手立をせねばならぬで………  
……？ 考へれば考へるほど、かうしてじつとしてはゐられぬでな。』

『それはこの身とて殿と少しも變りは御座らねど、折角此處にまるつたので御座れば、まづ一日二日は、ゆるりとお勞れをやすめませ！』

『それは忝ないが、その身もあることゆゑ、心は置かねが、何故かかうしてゐるといふことに心が咎めていかぬ。一刻も早う東國に行く方が好ましいぢや。』

『それは御無理は御座りませねど、まづ一日二日は御休みなさりませ！ 随分辛き目を見たので御座るゆゑ——』

『物の具は借りられるな？』

『昨夜、その旨申して置きました……。馬もいくらでもお役に立てるとのこと御座つたが、舟で三河にお渡りになるとすれば、却て邪魔になりはせぬかと申して居ました……。』

『熱田は何うしても通つては行けぬかな？』

鎌田は考へて、『何うもむづかしいだらうと存じます？ 何に致せ、このあたりでも、京の合戦の話は大抵知れ渡つてをりますでな。そんなにまで知れわたつたかと思つて御座るゆゑ——熱田はちと無理かと存じますか？』

『さやうかな。』

義朝は深く考へるやうな顔の表情をして、『熱田に行くのが無理だとすると、一層はやく此處を立つ



て、海をわたつて了ふ方が好いと思ふが——?』

『それはよう心得てをりまするほどに——まア一日二日ゆるりとなさりませ? 何も彼も一時傍にお置きになつたといふやうにして、のんきになさりませ! 此處は心置くことは少しも御座りませぬゆる——』

『成るだけ早う東國に下りたいな——』

『それはわかつてをりまするが、此處まで參れば、もはや案ずることは何ひとつ御座りませぬ。むしろ此處でもう少し様子をきく方が、その方が却て安全で御座りまする……』

そこに庄司忠致は直垂姿で恐る恐る向うから近寄つて來た。

『お! 庄司か? 好い元日ぢやな……』

かう義朝に言葉を懸けられて、庄司は一層腰を低くして、

『田舎家で御座りまして、さぞ大殿には御休みづらうあらせられたこと、存じまする。夜のものは御座りませぬ、とても京のやうなことは致したいにも致しやうがないので御座りまする……』

何處か卑しいわろかしい表情をその顔に示しながら、庄司は手を合せて揉むやうにして頭を下けた。

『いや、それどころではないぢや……』

『もつと何か致せば宜しいので御座りますが、何に致せ、節季や元日やで、いつもと違つて田舎は忙しい時で御座りまするで、禮を失ふやうなことのみに仕つて、何ともおわびの致しやうも御座りませぬ……』  
 『ぢろん』と義朝の顔を見つゝ、また頭を下けて、『しかし、もはや正月にもなりましたれば、これからは何かお構ひ申すことも出来るかと存じてをります。それは何うせ、田舎のことで御座りまするゆゑ、碌なことは出来ないのはわかり切つてをりますれど……』

『いや、そのやうに案じて貰うては却て困る……。かうして大勢世話になるすらすまないと思つてをるでな?』

『何う仕りました……?』

傍から鎌田が、義朝が一刻も早く東國に下りたいと言つたことを話し出すと、庄司は飛んでもないといふやうにそれを大きく手で押へて、『それは大殿の身になられては、さう仰せられるのも理とは存じますが、折角かうした田舎家にも御出下され、お目にもかかれて下されたのに、もはやお立の考へとは——? それはちとお恨みに存じまする。丁度正月でもあり、京でのお疲勞も御座りませうほどに、田舎にはまた田舎相應に、見目のよい女子などもないでは御座りませぬほどに……』かう言ひかけて庄司は大きく笑つて見せた。

『いや、それどころではない……』



ふと庄司は氣が附いたやうに、

『さう申せば、この身としたことが、かうした端近なところで、風の寒いにも氣がつかずに、かうした長話を致しまして……。さ、さ、さ、何うぞ此方へと御越し下されませ！』

『さア、殿！』

鎌田にも誘はれて、義朝も始めて氣が附いたといふやうに、その長い廊下を通つて、今度は昨夜とは違つた、今朝になつてから新に掃除させたらしい客間の方へと伴れられて行つた。そこには縁の紋様の見事な疊が二三枚も重ねられてあつて、武將の坐るのに適當した圓座と脇かけが客人の來るのを待つてゐるやうに用意されてあつた。室も炭火で暖かくあたゝめられてゐた。

『さア、大殿！』

かう言つて庄司は叮嚀に義朝をそこに坐らせた。

やがて婢達が種々なものをそこに運んで來た。

五六

庄司の饗應振りほ心を盡したものであつた。高杯には山海の肴が盛られ、美しく着飾つた童や女の童達が酒盞や饒子を運んで來た。

『何卒寛やかにしませ！ 心置くべきものとしては更に御座りませぬ——』庄司は何遍となくかう言つては酒を勧めた。

庄司の妻も衣服をあらためて出て來てゐた。景致も其處に伺候した。小金と照壽が着飾つた姿をそこにあらはした時には、義朝はもはやかなり酔つてゐた。

『お！ 見それた！ そこにゐるは鎌田の妻ぢやな？』

『左様に御座ります……』

庄司の妻は小聲で言つた。小金もそれにつれて黙つて頭を下けた。

『こちらに來よ。久し振りぢやつたな！ 去年、いや、もうその先つ年になるかや、京で逢つたのは？』

『先の年の秋で御座りました——』小金は面はゆげにかう答へて、『大殿には、いつも健かにおはして、これほど目出たいことは御座りませぬ。』

『もうすこし此方に來よ。』

小金は義朝の酔うて居るのを知つてゐたけれど、さう言はれるので止むを得ずに二三尺ほどその傍へと躡り寄つた。

『そちにゐるのは？』義朝は今度は照壽の方に目をとめた。

『家の嫁で御座ります……』



庄司の妻の引合せのまゝに照壽は叮嚀に頭を下けた。

『景致の妻か？ 好い嫁御ぢやな……。そなたも此方に寄れ——』義朝は既に尠からず酒に酔つたといふ風で、すぐ鎌田の妻の方に向いて、『小金とか言つたな？ 今度はそなたの背にえらう世話になつたぞな。鎌田がをらずば、この身は何うなつてをつたか分らぬぢや——』

『恐れ入りまする——』

小金はまた頭を下けた。

『しかしな、この身も禮は述べるが、そなたにも禮を言つて貰はねばならぬことがあるぢや。なア兵衛。』そこに座を占めてゐる鎌田の方を向いて、『おぬしに此處まで伴れられて來たのも、皆なそのためぢやらうが？ なア、さうぢやらうが？ 小金とかいふたな。その禮は、こゝまで、兵衛を伴うて來てやつた禮は、十分言うて貰はねばならぬぞや——』

一座は皆な笑つた。

『しかし、それも理ぢや。』酔つた義朝は猶ほその言葉を留めようとはしなかつた。『東國へ行きたうなうなつたもそれも理ぢや、なう兵衛！』

鎌田も酔うて心持よさゝうに、盃を盃盤に載せて義朝の方へとやつた。小金が寄つて行つて酌をした。

『鎌田、おぬしの東國に行きたうなうなつたのも無理はない……。この身がひとり行くことにしよう

かなう？』

『殿！ そのやうなことを仰せらるゝものでは御座りませぬ——』

『でもな、かういふ若い美しい女房を置いて、東國へは參られまいな……。何アに、構ひはせぬによつて、この身ひとり東國へ行くであらう……。』

『殿！ お酔ひになりましたな？』

『この酒にはしびれ薬でも入つてをりはせぬか？ えらう酔うた！』義朝は半ば戯れのやうに、身を床几に寄せかけるやうにして言つた。

庄司が立つて行くのを見て、

『庄司！ もう少し此處にをれ？ 此處に來て始めて人心地がついたといふものぢや……。何アに、平家などはおそれはせぬが……。東國から上つて來れば、あの清盛の狸などは一撃ぢやが……。それは手間もひまも入らぬが——』首をぐたりとさせて、『一緒にやるものがわるかつた——あゝいふ日本一の不覺人と事を共にした。それが今度の敗北の基ぢや——』

『殿！』

鎌田は半ば倒れかゝる義朝を支へるやうにした。



五七

その時子息の景致は裏の小さな室へと呼ばれて行つた。景致は不思議な気がした。これまでかれはさうして父に呼ばれたことはなかつた。何んなことでも父は居間で話した。そこで話してはわるいやうなことでも居間で話した。それなのに今日は何うしてさうした奥の室などにこの身を呼ぶのか？ 景致はさう思ひながら長い廊下を傳つて行つた。

そこには裏庭があつて、細い篠竹の夕暮の風に戦いでる氣勢が微かにした。日はまだすつかり暮れきつてはるす、西の小窓には、餘照が微かに残つてゐたけれども、それでも室の隅には薄暮の空氣が遍ねく行きわたつてゐた。室に入つて行つた景致の眼には、父親がわるく生真面目な顔をして、刀をその傍に、手爐を膝の上に置いて、じつとして坐つてゐるのが映つた。景致はやがてそれと相對するやうにして坐つた。刀を取つてその傍に置いた。

狡猾らしい、卑しい陰險な笑ひがやがて父の顔からほころんで來た。

『……………』

『……………？』

景致はその近くにその身を蹂り寄せて行くべく餘儀なくされた。

『これは大事ぢやによつてな？ おぬしにも誓うて貰はねば話せぬぢや。』

『何う？』

『是が非でも同意することを誓うて貰はねば、親子たりとも話せぬぢや。』庄司は考へて、『その代り、このことが成就すれば、この身もおぬしも立身出世は望むがまゝぢや。一國の司にもなれるし、京に行つて何んなに立派な身分にもなれるのぢや——』

『……………？』

『何うぢや、誓うて同意するか？』

『親子で御座るほどに、誓ひまでも御座るまじ。』

『いや、親子でも誓はぬうちには話せぬぢや。』司矢八幡、誓つて同意するといふことを言はぬ中は——？』

『さらば誓ひます……』景致は刀を額のところを持つて行つて口の中で默禱した。

『たしかに同意するぢやな。』

『父上、疑ひ深い……』

『それではたしかぢやな。父を助けてこのことを成就させるな？』

『論なう御座る？』

庄司忠致は鋭くその目を輝かしたが、キツと思ひ切つたやうに、子息の方へと二三段身をすり寄せて、



そのまゝ、その耳のあたりに口を持つて行つて何か二言三語囁いた。

その企計の何事であるかを知つた時には、子息の景致も流石にはつとせずにはゐられなかつた。かれも暗い心持になつた。急には答へも出来なかつた。

『何うぢや——』

『わかり申した。』

『これを成就させれば、大したことぢやといふことも、今はおぬしにもわかつたらう。』景致の顔をじつと見詰めるやうにして、『それを京に持つて行けば、如何なる恩賞も望むがまゝぢや。國の司にも論なうなれる……。唯、相手が名だたる武將ぢやで、容易なことでは、望みを達することは出来ぬと思ふぢや。それに、鎌田奴がをる！ あれを味方につけることが一番好いにはきまつてはをるが、逆もそれは出来ぬと思ふぢや。だから容易にこの話を打出す譯には行かぬ——』

『それは仰せまでも御座らぬ。鎌田はともその企計に同意するものでは御座らぬ——』

『それに、ついて來てゐるものが二人をる。あれも手剛くないことはない。おぬしには好き思案がなにか？』

初めて耳にした時には、多少の不同意を覺えたけれども、今では景致もその企計に對して一種の衝動と共鳴とを感ぜずにはゐられなくなつてゐた。かれは膝を進めた。

景致は父親の耳に口を當て、二言三言囁いた。庄司は頻りに點頭いて見せたが、『それがおぬしに出来るかな？』

『それしきのこと出来いでか？』

『それが出来れば、それに越したことはないが——？』庄司は考へて、『本當はそんな殺生をしたくはないのぢやが、邪魔さへなければ、鎌田はそのまゝにして置いても好いのぢやが——？』

『父上、それは駄目で御座る。』景致は強く否定して、『何うしても鎌田は一番先に片して了はなければ駄目で御座る……。この企計を黙つて見てゐるやうなものでは御座らぬ？』

『それはさうぢやな。』

『あれを片して了はない中は何うすることも出来ませぬ？』

『しかし、おぬしひとりでやれるかな？』

景致は酒を飲まして、酩酊させて、室から外へ出て來ようとするところを、扉のかけに隠れてゐて一刀に斬つて捨て、了へば何の難かしいこともないと言つた。『やれるもやれぬも御座らぬ。さうきめてかればわけは御座らぬ。』

『しかし、もう少し好い考へは出ぬものかな？ 鎌田はソツとして置いても好いのぢやで——小金のこともあるでな。』



『父上、そのやうなことを言つてゐては、とてもこの事は成就いたしませぬ。やる上はそんな女々しい心は捨て、了はねばなりません。』

『それもさうぢやがな……。あれを味方に入れる手段はないものかな？』

『それはとても難かしく御座る。あの男は源氏無二の家來で、とてもさうした心になることは御座りませぬ。もしものことをかれに打明けでもすれば、それこそ此方が危うなるので御座らう？』

『それもさうぢやな。止むを得ぬな……。』

『何うも爲方が御座りませぬ。さうするより他に何うすることも出来ませぬ。』

『で、まづさうするとして、それから先ぢやが——？』

庄司は更に身をその近くに寄せて、景致の耳に口を當てた。その話は長くつゞいた。景致は何遍となく點頭いて見せた。

『それは好い企計で御座るが、それをやるものが御座るか？』

『橋は何うぢや？』

『あれなら、すぐれた力量が御座るには御座るな？』

『それに、彌七兵衛に濱田、この三人にやつて貰へば、いくら大剛の武將でも、湯殿のことではあり、武器は帶してをらぬぢやで、思うより容易く成就すると思ふが——』

『湯殿は好い考へで御座るな。』

景致は言つた。

庄司はまた小聲で話しつゞけた。氣が附くと、西の小窓の餘照がいつか消えて、あたりは次第に暗くなりつゝあつた。

『それにしても、それをやる時ぢやが——それは何ういふ風にやるが好いかな？ 鎌田を先に片して

それからやる方が順序ぢやとは思ふが、それを何ういふ風にやつたら好いか？』

『一緒といふわけにもまゐりませぬな？』

かう言つて二人はまたこそく低聲で話した。いざとなつては、それからそれへといろくゝなことが出て來るらしく、その話は容易に盡きようとしなかつた。いつか室は暗くなつて、外も静かにぼんやりと暮れて行つた。大坊の入相の鐘が一つ一つ静かにあたりに響いて行つた。

五八

庄司の住宅をぐるりと取巻いた築土からずつと此方へ出て來ると、路は一つは丘陵の上に、ひとつは寺へとうねくと曲つてついでに行つてゐるが、寺の此方は水田で、冬は取残されたひつじの上に朝霜が白く置いて、海こそ見えないが、濱に打寄る波の音がすさまじく地を撼かしてきこえて來た。



里川に石橋がかゝつて、そこに朝毎に張る氷が、日影を絶えず受けながら、時には晝過ぎまで残つてゐることなどもあつたが、否、春になれば、里の童達がそこで根芹を摘んだり小魚を網で掬つたりなどしてゐるが、しかもそこから少し此方に來たところに、小さな池があつて、蒲だの芦だの、藻だの生えてゐるのを誰も目には留めなかつた。

それにしてもそれは何うしてそこに出來たものであらうか。元は海が丘陵の下まで入江を成して入つて來てゐたので、それが陸地になる時に、そこだけ地盤が低いので、引残されて池になつたのであらうか。それともまたさうした地形とは何の關係もなしに、唯昔の人達が田や畠の用水のために、わざとそこにさうした池を掘つたのであらうか。土地の古老などに聞いて見ても、それは昔からあるといふだけで、かれ等が童であつた時分にも矢張今と同じやうに蘆が茂つたり藻が浮んだりしてゐたといふだけで、いつから出來たといふことは竟に竟にわからなかつた。池の畔には篠竹の藪があつて、それがすつと林から丘へと續いた。

庄司の住宅から行くと、いつも先づその池に突當つて、右は奥田道、左は海岸道となつてゐたので、誰もその池の傍を通つて行かないものはなかつた。

春は藪に交つて梅の花が白く咲き、池の畔に繪具をこぼしたやうな青草が萌え、おたま杓子が岸のところに眞つ黒になつて動いてゐたり、また春から夏にかけては蛙が好い聲で鳴いたり、白い藻の花がボツ／＼と小さな點でもうつたやうに咲いてゐたりしたが、しかも中でも、一番この小さい池の存在をはつきりとあたりに示すのは、秋から冬にかけての靜かなさびしい感じであらねばならなかつた。そこには秋雨がザン／＼降つた。またそこには午後の日影がさびしい色を映した。碧い空がそのまゝ澄んだ池の水面にびたりと映つてゐることがあるかと思ふと、時にはまた秋の末の色のある雲が池の半を染めでもするやうに赤くその影を浸してゐることなどもあつた。草原の中には露が霜となるまで、いろ／＼の蟲の音がした。

初冬になると、あたりは一層さびしかつた。吹き立つ風が丘の林を鳴らす頃には、芦の枯枝も縦横に水に折れ伏して、池も半ばはそれを埋められ、唯路に寄つたところに纒かに錆びた池の水を認めるばかりになつた。落葉が一杯にあたりに散つた。かと思ふと、ある朝は薄い雪が白くその池のあたりを粧つた。

『何うもあの池の近所にはわるい狐か狸がゐると見える？ 此の間も、村の婆があそこでばかされて、その持つてゐた魚を取られた！』こんなことを言ふものがあるかと思ふと、また時には一夜中小さな提灯が其あたりを往つたり來たりしてゐるのを見たものがあるなどと不思議さうに話した。『何うも、夜、あそこを通るのはあまり好い心持はせぬな——』長く土地に住んでゐるものでも、誰も皆なこんなことを言つた。



止月の二日の夕暮には、義朝も矢張その池の畔の路をすつと向うへと歩いて行つたのであつた。かれは數日後に自分の首がそこで洗はれやうなどは夢にも知らなかつた。否かれはそこにそんな池があるとすらも思はなかつた。勿論、その時は薄暮の空氣の中に既に半その池が埋められてあつたにはあつたけれども……。

その日は義朝は鎌田と金王丸とを伴れて、庄司の宅から出て、田の畔のやうな細い路を通つて杉樹のこんもりと茂つた大御堂寺の方へと行つた。かれ等は寺の裏門から入つた。

かれ等の眼には、やがて田舎にはめづらしく大きい寺の本堂が映つた。棟の高い瓦葺に鬼瓦の見事なのが載せられてあるのが映つた。太い圓柱がある間隔を置いて竝んで立られてあるのが、格子になつてゐる扉が半ば開けられて、その突當りに本尊の阿彌陀三尊が端然として安置されてあるのが、その前に香煙の微かに靡いてゐるのが、その奥の方で僧の讀經してゐるのが映つた。かれ等はそこに行つて皆手を合せて禮拜した。

『これが行基菩薩のつくられた阿彌陀三尊ぢやな。』

義朝はかうは言つたが、しかも別にそれに深く心を留めたといふのではなく、そのまゝ本堂のほの暗い空氣の中を一めぐりして、やがて靜かに此方へと出て來た。鐘樓の前に立つた時には、『これぢやな。こゝで撞いたのぢやな？』昨夜の鐘は？』と言つて、わざとくその鐘の吊られてあるその下のところま

でのぼつて行つた。義朝の顔の半面に午前の日影が明るく照つた。

かれ等はやがて本堂の傍から、坊舎のいくつとなく連つてゐる方へと歩いて行つた。そこには相輪塔があつたり鼓樓があつたりした。

『大きな寺ぢやな？ 田舎には過ぎものぢやな？』

『昔はこんなに大きくはなかつたといふことで御座る……。それが、今から百年程前に白河の院が御信仰なされて、道場になされてから、それからすつと大きくなつたといふことで御座る……。今は坊舎が十四も御座るで——』

『ほ、そんなにあるか？』

それからかれ等はその多い坊舎の別當をしてゐる大坊の方へと行つた。あたりは綺麗になつてゐるところとく、薮は上げられてあつたけれども、人のゐるらしい氣勢は何處にもなかつた。讀經の音も何處からもきこえては來てゐなかつた。

義朝は不思議な氣がした。あの騒がしい三條殿夜討の時からまだ一月とは經つてゐないのに、かうしたところにかうしてさまよつてゐるとは？ 丸で別な運命の下にかうして徜徉してゐようとは？ しかも義朝はそれを押へた。かれは黙して靜かに歩いた。

金王丸は常磐や三人の幼い兒達のことを念頭に浮べながら歩いてゐるが、それについては、一言も義



朝には話さなかつた。(大和の龍門に行けば、いかな平家でもその所在を探すことは出来ないだらうが、それにつけても何うしてゐらるゝことか？ あの三人の幼い兒を抱いて、さぞ困つてゐらるゝことであらう) こんなことを繰返しながら、かれは義朝と鎌田との竝んで行くあとから徐かについて行つた。

鎌田も今日は多く口を開かなかつた。何處となく滅入つたやうな風で、いつものやうに元氣ではなかつた。かれ等は何方かと言へば佗しげに、無口で、大坊から引返して來た。

『この土地は京に比べては、餘程暖かぢやな？』

『さやうで御座るな。梅などもはやそのやうに膨らみましたで——』丁度そこに通りすがりのところに日影に向つた梅の枝のあるのを鎌田は指して、『もう十日もすれば、この梅なども咲きはじめますでな。』

『海の近い故ぢやな……』

『しかし、此處は知多のうちでは寒いところで御座るぞ！ 東浦にまゐれば、もつとぐつと暖かで御座る。何に致せ、この西浦は伊吹おろしの寒う吹くところで御座るほどに——。今日のやうに静かな時は暖かで御座れど、風の吹く日には、冬は漁にも出られぬやうなところで御座るでな。』

『でも、京よりは暖かぢや。京はそこ冷えがするでな。』

義朝はかう言つたが、すぐ話を變へて『それにしても、もう早う立たねばならぬな。もう正月も二日

になるぢや。』

『さやうで御座るな。』

『明日は立てぬかな？』

『まづゆるりとなさりませ！ 三日四日はかうして御座りませ！ 東浦の船の便もきかしてあるといふことで御座るが、何に致せ、正月ぢやで、舟人たちも皆な家で休んでゐますで、七草でも過ぎねば、行かうといふ者が御座りませぬ。』

『七草迄ゐるのでは大事ぢや。』

『いや、それまで待たずとも好いでは御座らうが、まア、ゆるりとなさりませ！』鎌田の調子にはいつもと違つて、何處か素氣ない、皮肉な、投げだしたやうなところのあるのを義朝は見た。かれはそのまま、黙つて歩いた。

寺の境内をあちこちと歩いてゐたかれ等は、やがて山門の方へと出て行つた。わざ／＼來て見たほどそれほど大して心を惹くものもないといふやうに、詰らなさうにしてかれ等は歩いた。山門の向うには、松の竝んで生えてゐる濱が見えて、波の音が地を撼かすやうにきこえて來てゐた。

向うの丘陵の上に赤ちやけた路がうね／＼と曲つてつゝいてゐて、そこを村の人達が五六人ぞろ／＼と通つて行くのに眼をとめた義朝は、



『あれが東浦に行く路かな?』

『さやうで御座る……』

『東浦までは、此處からいくらもないぢやらうな?』

義朝はじつとそつちを見た。そこには路に傍つて、その赤ちやけた崖崩れのやうになつてゐるところに傍つて、大きな松の樹が一本高く立つてゐるのが見えた。

やがて路はその小さな錆びた池——數日後にはその首の洗はれる、枯れた蘆荻の縦横に折れ伏した、草藪の深くその縁に生ひ茂つた、底に沈んで生えてゐる藻の中までわびしく日影のさし透つた池の側へとかゝつて行つた。その眼にはたしかにその池が、その草藪が、その折れ伏した枯芦が、その藻が、その藻に日影のさし込んだのがはつきりと映つたに相違なかつたが、しかもそれはかれの注意を惹くに足りなかつた。かれ等は黙つてその池の側を通つて行つた。

## 五九

その夜は鎌田の姿は竟にそこに見えなかつたけれども、いろ／＼な壺やら行器やら高杯やらが一面に臺盤の上に並べられて、此處等にはあまり見かけない女達が三人も四人も入つて来て酌をした。庄司も度々やつて来た。かれもいくらかは酔つてゐるらしく、『まア大殿! 一献きこしめされ! まだ少しも酔うては御出でにならぬでは御座らぬか。今日は婿がねの歸國の披露をやりをるで、此方の方はお留守になつて相すまぬ次第で——』こんなことを言つて近寄つて銚子を取つた。

『大殿! 何うで御座るな? 田舎で御座るで、何うせ、お氣に召したのも御座るまいが——』

庄司は快けに笑つた。

義朝にはその意味がすぐ飲み込めた。かれも笑つた。かれにはさつきから目についた女がひとりあつた。それは田舎くさくはあつたけれども、その豊かな頬のあたりに何處か常盤を思ひ出させるやうなところがあるので、それを呼び近づけては、何遍となく酌をさせてゐた。

『それでも、田舎で、ようこれだけ集まつたな。中々別品ぢや。誰も彼も皆な別品ぢや。』最早既にかなり酔つてゐる義朝は、丁度そこにあるその女の手を取つて、それを自分の方に引寄せらるやうにした。

『この女子は何といふぢや? 眼が好いな?』

『お氣に召ましたか?』

『この女子だけが好いといふのではないが。どれも皆な別品ぢやが——』

『まア、一献お重ねあれ——』

さう言つては、何か事ありけに庄司は慌て、立つて向うへと行つた。あとには女だけが義朝の周囲を



取巻いた。女はそこらに流行る地唄のやうなものを唄つた。その節は下卑てるたけれども、催馬樂や郢曲のやうな上品さをそれに望むことは出来なかつたけれども、それでも興ありけに義朝は手拍子を打つたりして一緒に笑ひ興じた。後には女達は立つて舞ひつれた。

それは不思議な舞踊であつた。義朝の眼には、女の右の手の掌の大きく開かれたのと片足をやゝ高く持ち上げられたのが映つた。手を各自にたぐり込むやうにしたのが映つた。揃へて腰を振るやうにしたのが映つた。そしてその間を田舎訛りの入つた唄の調子が綴つた。義朝はそれにつれて手拍子を取つた。

かれはかなり酔つてゐた。何も彼も遠くへ、遠くへ行つて了つたやうな気がした。(どうだつて好い！なるやうにしかない！)手拍子を打ちながらかれはこんなことを思つた。ふと、鎌田のことが頭に浮かんだ。(まだ忙しくつて此方にはこれれないと見える？)しかし、さうした考へは長くは續いてゐなかつた。

玄光も金丸も、遠い向うの室で、庄司の家來達を相手に酒を飲んでゐるので、誰もやつて来るものはなかつたけれども、しかも誰かもし此處に来て見てゐたならば、随分不思議な光景をそこに發見したであらう。女達の數は次第にふえて行つて、それからそれへとその舞踊が續いて行つたが、一時は全く酒に酔つて赤く濁つた義朝の顔がその女達の中に埋れ盡されたかのやうに見えた。

そこに庄司がまたやつて來た。

『鎌田は？』

何より先に義朝は訊いた。

『婿はえらう酔うて、とてももうどうにもならんで御座る——』

『あれは、そのやうに酒はいけぬ方ぢやがな？』

『いや、えらい皆な酒をすゝめられましてな……。まア、好いでは御座らぬか。今日はめでたい正月ぢや。唄ふぢや、舞ふぢや——』後には庄司も女達と一緒に立つて舞うた。義朝も女達に引寄せられて舞うて歩いた。

## 六〇

『何と云うても、源氏は源氏ぢや。東國に行けば、平家などは一人だつてあるものではないからな！』かうした聲がその奥の一室にきこえた頃は、鎌田は、まださう深くは酔つてはゐなかつたが、親類や庄司の家來達が頻りに盃を勧めるので、いつもに似合はずつひ飲み過ぎて後には苦しさに身を凭らせたりなどしたのを一座の人々は見た。もはや誰も夥しく酔つてゐた。中には酔つた振して實は少しも酔つてゐないものなども雜つてはゐるが、しかも一室は酒に亂れて女と手をつらねて踊るものがあれば一方



には聞くに堪へないやうなざれ言を互ひに言ひ合つて戯れてゐるものもあつたりして、笑つたり喚いたりする氣勢が結び燈臺の灯のチラ／＼する中にそれとなく手に取るやうにきこえた。

『おい！ 鎌田！ 貴様は？』

かう罵る聲がふと耳に入つて、鎌田は柱に凭らせて眠つてゐた身をがばと起した。

かれは大きく眼を開いてあたりを見廻した。

『おい、眼がさめたか、鎌田！』

そこには庄司の従兄に當つてゐる平右衛門尉宗光といふのが夥しく酔つて坐つてゐるのをかれは見ただ。それは何方かと言へば源氏よりも平家に好意を持つてゐるといふやうな男で、さつきも頻りにその話をしてゐたが——これから平家の世の中だから、源氏方になるにしても、餘程考へてやらなければいけないと言ふやうなことを言つてゐたが、それがやつて来て盃を呉れろと言ふのであつた。鎌田は厄介な奴が来たとは思つたが、さうかと言つて、相手にならぬわけにも行かぬので盃を取つて、それをさして、傍にあつた銚子から酒を波々と注いでやつた。

『鎌田、おぬしは忠義ぢや。おぬしのやうな忠義ものは御座るまい——』

宗光は盃を口に持つて行かうとしたが、夥しく酔つてゐるので、その半分以上を指貫の上に滴した。

『平衛門尉どの、えらう酔うて御座るな？』

『何と？ 酔うてゐると……？ いや、酔うてはをらぬ。かう見えても酔うては居らぬぞ！ 鎌田、

今日はわざ／＼遠くからやつて參つた。おぬしの歸國の披露の宴ぢや言ふでな……。この身は、おぬしとは意見は違うてはをるが、それでも、おぬしが忠義を源氏のためにつくしたのには感心ぢや。京の合戦の話でもせぬか？』

『平右衛門尉どの、今宵は酔うて御座る……。今はお話ししても、ようおわかりにはなるまい。明日にもお話致すで御座らう？』

『何と？ 酔うてゐると……？ 酔うては居らぬ？ くら、鎌田——』

ふとこの時、鎌田の胸には、義朝のことが上つて來た。何うしてゐるらるか？ 自分にかまけてあの時から行つても見なかつたが、もはやお休みになられたか。それともまだ女達を相手にして起きてゐるか。それをきいて見たいにも、あたりには誰もゐなかつた。庄司も景致もゐなかつた。

『くら、鎌田！ この身は少しも酔うてをらぬ？』

宗光はまた盃をかれにつきつけた。

鎌田はいつまでもそんなものゝ相手になつては居られぬと言ふやうに、そのまゝそこに置いてあつた兩刀を取つて立上つた。

『鎌田！ くら、何處へ行く？』



宗光は顔を振上げるやうにしたが、夥しく酔つてゐたので、そのまゝぐつたりと倒れて了つた。

鎌田は振り返りもしなかつた。さつさと室を廊下の方へと歩いて行つた。別に何事もあつたのではなかつたけれども、かれには何となく義朝のことが心配になつたのであつた。

廊下の角を曲らうとした時、かれは思ひがけない強い或打撃を受けた。かれははつとした。かれは薄暗いかけに二三人の男が指貫をたくし上げて太刀を振り翳してゐるのを見た。

そのひとはたしかに景致であつた。それはその烏帽子でわかつた。その大きな鼻と尖つた顎とでわかつた。最初の太刀は、かれが曲らうとする、その眞額を目蒐けて鋭く打込んで来たものであつたが、それを右に避けたので、かれは左の肩先をしたゝかに切られた。

『何者ぢや!』

それでも鎌田はかう一喝した。しかも、かれにはその佩刀を抜くひますらなかつた。その柄にかれが手をかけたよりも早く、二の太刀の切先が、切るといふよりもむしろ突くといふやうにかれの顎のところに切つた。それは景致であつた。血がサツとあたりに迸つた。

鎌田は止むを得ず仰向き加減になつた。軀もいくらか反つて、一足二足たぢぢとあとに退つた。三の太刀が續いてかれの眞額を横なぐりに斬つた。

戦場に臨んでは名だたる武士であり、力量にかけても體の小さいのに似合はずすぐれて強い勇者では

あつたけれども、しかも思ひもかけないかうした暗討に逢つては、とても何うすることも出来なかつた。業物の太刀も、すぐれた腕も何の役にも立たなかつた。

『卑怯者!』

かれはかう叫んだゝけで、そのまゝ、鏗と廊下に倒れた。

かれの頭には、さういふ運命になつて行つた事情がはつきりとわかつて通つて行つた。一體これは何を意味してゐたか。今夜の酒宴は何を意味してゐたか。それを考へた時には、かれは血に塗れて最早何うすることも出来なくなつてゐる身であるにも拘らず、努力して身を起さうとした。身を起さずにはゐられないやうな氣がした。これはその身の上のことではない、殿の身の上のことだ——そのためかういふ悪心が起つたのだ。かう思つた時には、かれは一層身をもがいた。

しかしぐさと咽喉に向つて刺された一刀——動脈の血管が破れて、長蛇のやうに血潮が廊下に流れた時には、さうしたかれの心も次第に弱く弱くなつて行つてゐた。

『殿!』かう言つた聲が微かにそこから洩れただけであつた。

そこに横つた鎌田の屍の前にかれ等の一人が蹲踞つてその顔を寄せたのは、暫らく経つてからであつた。

『あ、もはや呼吸は絶えて御座る! もろいもので御座るな。』



『ほんに死をつたか？』

『若殿の手柄で御座るな。あの二度目の切先で、流石のかれも何うすることも出来なくなつた！』

『もろいものぢや。』

こんなことを言ひながら、他の二人もその傍に寄つた。

景致は急に思ひついたやうに、あたりを見廻して、『かうしてはをられぬ。早く、早く、早く片附けねばならぬ。この事は明日まで誰にも知られてはならぬのぢやでな。それ橘、筵を持つて参れ！』

暫らく経つた後には、もはやそこらは綺麗になつてゐた。かれ等は筵に載せてその屍を持ち去つたあとを、更に桶に水を汲んで来て、頻にその血の痕を箒で洗つた。幸にそこは厨の方への通り道でなかつた。誰もそれを知つてゐるものはなかつた。

## 六一

その翌朝は義朝はおそく目覺めた。かれは既に朝日が築土から庭にかけて一面に眩ゆくさしわたつてゐるのを見た。最早巳の刻に近かつた。

かれは帳臺の置いてある室から中庭に面した室へと出て來た。そこには昨夜の女が既に綺麗に扮装を終つて、髪の毛を鮮かにあたりに見せて、湯氣の白く騰つた手水盥を此方に捧げて持つて來るのを見

た。女は昨夜と同じく常に莞爾した顔を此方へと見せた。義朝が顔を洗ひ終つた時には、女は廊下に膝をついて、叮嚀に新しい白い手帛をかれに渡した。

『早く起きたな？ 一つおぬしが起きたか、すこしも知らぢやつた！』

『ようお休んであらせられましたほどにな——』

かう笑ひながらかれは言つた。義朝は昨夜常磐に逢つたやうな心持で、その豊かな、毬のやうな肌に觸れたことを思ひ起した。晝間見ては、いかに價値づけようとしても、田舎女のけばくしさと土臭さを取除くことは出来なかつたけれども、それでも一夜を常磐だと思つて過したことを考へた時には、何處か可愛く捨難いやうな氣もしないではなかつた。かれは存外打寛いだ氣分で、その臺盤の前に据ゑられた圓座の上に跣座をかいた。

廊下に足音がしたと思ふと、庄司忠致がやがてそこにその烏帽子姿をあらはした。

『お、庄司か——』

義朝も流石にいくらかきまりがわるいといふやうにして居住ひを直した。庄司は莞爾した顔をして入つて來た。

『まア、こちらへ——そのやうに叮嚀にされては却て困る——』

『何う仕りまして、折角お出下されましたのに——常ならば、とてもお出で下される處でないこの田



舎の茅屋にお越し下されましたのに、何彼と自分にかまけてお構ひも致しませず、何とも申譯は御座りませぬ……』

庄司は何遍も叮嚀に辭儀を繰返した。

『それで何うしやつた？ 昨夜は恙なう濟んだかな？』

『難有う存じまする——』

『鎌田は何うしやつた？』

『喜んでをりまする。昨夜も此方にまるる暇もなく、今朝も據なき用事が御座つて、大殿にその旨申上げてからと申して居りましたが、急用では御座りまするし、ぢきに戻つても参りまするによつて、そのまゝ参るから、よう申上げて置いて呉れとの頼みで御座りました——』

『何處かに行つたのか？』

『一里ほど先きのところに、伯父に當るものが御座りまして、それが頑固で、難しいことを申して、婿が來ぬ間は、披露の宴にも行かれぬなど、申して昨夜もたうとう來て呉れませぬによつて、一度挨拶をして参すると申して、今朝早う立つて参りました——』

『あゝさうか。それでいつ頃戻つて参るぢや——』

『午の刻までには遅くも戻つて参る筈で御座りまする……』かう言つたが、庄司はぢろりと義朝の顔

を窺むやうに見て、『それに、やうく風呂の支度も致して御座りますれば、お加減の宜しい時分に御知らせを致しまするほどに、何とぞゆるりとお寛ぎ遊ばして、風呂にでも召されて、疲勞をお休めなされませ！ 田舎で御座れば、他には何もお構ひ申すことも出来ませぬに——』

『さうか？ 今日は湯が立つたか。それは難有いな。久し振りぢや。美濃でも、忙しう立つて参つたによつて、風呂どころではなかつた——』

庄司は何か急に思ひ出しでもしたやうに、そのまゝ、叮嚀に辭儀をして身を起した。

『一家の主と申すものは、何うも忙しいもので御座るで……』こんなことを言ひながら、庄司はそゝくさと廊下を向うへと歩いて行つた。

## 六二

その時から既にひと時は経つた。女達は二人も三人もやつて來て、朝餉のすんだあとの器具を運んで行つた。好い天氣で、午前の日影は麗らかに築土から向うに連つてゐる麥の畑の浅い緑を照してゐた。昨夜に引かへて、梢を動かす風もなく、唯、大坊の杉森の上に小さな鼠色の雲が靡いてゐるばかりであつた。巳の刻を報じた寺の鐘は、さつき朝餉の箸を置いた時に靜かにあたりに響いてきこえた。女達の出て行つたあとは室の内はひっそりとした。



《伯父の許へと言つたが、鎌田は何うしたぢやらう？ 午の刻までに歸つて来るにしても、何とかその旨言つて行きさうなものぢやのに——》こんなことを義朝は繰返した。いつの時にも一緒にゐないことのなかつたゞけ義朝はさびしい氣がした。一種の心細さをさへ感じてゐた。

義朝にはまたさまざまのことが思ひ出されて來てゐた。不思議にも鎌倉の龜ヶ谷にゐた時分のことが思ひ出さるゝと同時に、狩獵や、くらべ馬や、常に伴につれ歩いた猪俣や、その猪俣と二人で箱根の山の中で大きな蛇を斬つた時の愉快さや、つゞいて美濃の青柳の庄から始めて父の爲義に伴れられて京に上つたことや、京の賑かさに眼を睜つたことや、父に伴はれて初めて内裏の大庭に伺候した事や、否そればかりではなかつた。それからそれへと世間を、争鬭に満たされた世間を、嫉妬と陥穽とに満たされた世間を、権力と権力が搏ち、心と心が戦ひ合ふ世間を経て來たことをかれは繰返した。そこにもこゝにもかれがゐる。烏帽子直垂のかれがゐる。馬の鞍に跨つて兜を着けてゐるかれがゐる。白河殿の夜討の火を見て喜んで鐙を鳴してゐるかれがゐる。烏羽法皇のまだるました頃御説を賜はつて勇み喜んで六條の邸へと戻つて行つたかれがゐる。さうかと思ふと、いつとなく女色に深く溺れて行つたかれがゐる。常盤を自分のものにした時のかれの喜びがそこにある。そのためには父親をも一族をも捨て、も構はないと思つたほどの憧憬がそこにある。《あの保元の時に、もう少し落附いてゐればよかつた——》今思つても効ない事ぢやが、戦ふならあのあとですぐ平家と戦へばよかつた。あの時一步を譲つたのがわ

## 六三

るかかつた。勅説であらうが何であらうが、父親のために、一族のために平家と戦へば好かつた……。この身は戦ふつもりぢやつた、あの常盤が留めさへしなかつたなら——》かれは深く考へ込んだ。義朝は傍の肱掛に半分身を寄せかけ、右の手を頬に當て、じつと一ところを強く見詰めた。

『湯が出來ましたさうで御座ります。』かうそこに女が來て知らせた。

その女に義朝は言つた。

『伴のものを此處まで呼んで呉れぬか？』

『承りました』

女はそのまゝ出て行つたが、暫らくすると、そこに金王丸がその姿をあらはした。

『お召して御座るか？』

『湯が出來たと言うので、これから入らうと思ふのぢやが——そちはそこまで一緒に行つて呉れぬか？』

『承りました。』

金王丸は會釋してそのまゝ、義朝の後に廻つた。佩刀をばかれが持つた。

慌たゞしけな足音がしてそこに庄司が入つて來た。



『あちらに、すべて用意は致させて御座りますほどに——何も此處にお置きになつて然るべく存する。佩刀も何も——』

『いや、難有う——。お蔭で、久し振で湯に入れる！ さぞ好い心持がするで御座らう？ これも皆なおぬしの厚意ぢや。』義朝はふと思ひ附いたやうに、『それで、鎌田はまだ戻りませぬか？』

『まだ戻りませぬが？』

『……………』義朝は何か言はうとしたが、しかし言はずに、そのまゝ黙つて立つて庄司のあとについて行つた。で、暫しが間廊下を裏の方へと傳つて行くと、そこに外に下りるための階段があつて、木履が三つ竝べて置かれてあるのをかれ等は眼にした。

『これを召しませ！』

かう庄司は言つたが、いくらかその聲は震へるやうにきこえた。かれは佩刀を持つてあとからついて來た金丸丸の大きな體を見上げた。

『あちらは狭う御座りまするほどに、佩刀はこゝにお置きになる方が好くは御座りませぬか？』

『いや……………』

かう軽く言つた義朝は木履を穿いて下へ下りた。

金丸丸もあとから續いた。

築土の傍のやうなところを通つたり、茶や大根の葉の霜に萎れた傍の畑を通つたりして、次第に奥へと入つて行つたが、やがてそこに白壁の土蔵があつて、その向うに、長い廊下傳ひに新しい湯殿らしいものゝ出來てゐるのをかれ等は見た。それは家の中からも、厨を通れば、そこに出て來られるやうになつてゐるらしかつた。庄司はまた氣遣はしさうに佩刀を持つてあとからついて行く金丸丸を振返つた。

しかも庄司はその湯殿までは一緒について行かなかつた。

『向うには湯番がをりまするほどに、それでは此處で——。また何か用事が御座りましたら、遠慮なうお呼び下され——』

かう言つて庄司は叮嚀に頭を下けた。

『や、いろく世話になつたな——』

『では、御ゆるりと——』

庄司は此方へと引返して來たが、十間ほどしてまた氣遣はしけに振返つて見た。午の刻に近い日影は鮮かにあたりを照して、大根畑に添つた道に烏帽子と太刀との動いて行くのが手に取るやうに見えた。道の向うには葉の全く落ちた榛の林があつて、赤ちやけた丘陵のその上に靡いてゐるのが澄んだ午後空の中にくつきりと際立つて見えてゐた。

庄司にはその金丸丸とその持つた佩刀とが頻に氣になつたが、しかも何うすることも出來なかつた。



二たびかれが振返つた時には、明るい日影を帯びた義朝の烏帽子姿が、既にその新しい湯殿へと近づいて行つてゐるのを眼にした。

以前からそこに湯殿があつたのであらうけれど、あらかた新しくされて、道に臨んだ入口から入つて行つた時には、木材のほびが心地よく義朝の鼻を衝いた。それに、廊下の両方に高窓があつて、そこから自由に光線が入つて來てゐるので、湯殿の中は概して明るく、新しく張り詰めた流しの向うには、湯氣の白く颯つてゐる浴槽がそれとはつきり覗かれた。

そこに出て來た湯番は、四十五六の、いかにも卑賤な生れらしい、眼のしよぼしよぼした猫背の男であつたが、わく／＼したやうに會釋して、くしやくしやと田舎訛で何か二言三語言つた。好い天氣だとか何とか言つたのであらうが、義朝にも金王丸にもそれははつきりとはわからなかつた。

『あゝこれは好い湯殿ぢやな。』

こんなことを言ひながら、義朝はそのまゝその入口から上へと上つた。そこも新しい板敷になつてゐて、特別に持ち出したらしい縁を取つた蓑蔭が三枚ほど敷かれてあつた。新しい手帛などもそこに置かれてあつた。

『こゝは陰氣でなうて好いな。』

『左様で御座ります……』

金王丸はそこに佩刀を置いて、直垂や指貫をぬがせるために此方へとあがつて來た。かれは義朝の後に廻つて帯を解いてやつた。

『鷺栖は何うしやつた？』

『向うにをりまする——』

『酒を飲んでゐるのか？』

『——』金王丸はきまりわるさうに下を向いた。

『昨夜も飲んだのぢやな？』

『つい、こゝの家來衆に勧められたもので！』

『それでは、鷺栖はまだ二日酔でこれぢやな！』

義朝は笑ひながら手を首に當て、見せた。

『いゝえ、もう起きましたで御座らう？ さつき起して參りましたで——』

『では、鎌田にも逢はぢやつたな？』

『兵衛どものには、昨夜もおん目にかゝりませぬでした。何でも、奥の方で内輪の酒宴があつたとか申して——』

帯を解き、指貫を脱ぎ、それから直垂を取ると、肌の色の白い、腹の大きい、手足の巖丈な裸體がく



つきりとその明るい光線の中に浮び出した。やがて、袴下を慌て、脱いだと思ふと、「お、寒い、寒い！」と言つてそのまゝ湯殿へと入つて行つた。

かれはいきなり突當りの浴槽の前へと行つた。此方で金丸丸が脱いだ直垂や指貫を片寄せつゝ見てゐると、湯氣の白く颯つてゐる中に義朝の裸姿がそれと見えて、手帛で湯をかい出して體をしめしてゐるやうであつたが、沸き過ぎてゐたらしく、やがて湯番の男がせつせと水を二桶も三桶もそこに運んで來る氣勢がした。

金丸丸はじつとそこに蹲踞んでゐた。昨夜の地酒のわる酔ひがまだ體に残つてゐて、何となく頭がぼんやりしてゐた。かれの眼には、半ば明けた窓を通して、赤ちやけた丘陵の上に松が二三本ひよろひよると竝んで立つてゐるのが映つた。此時今まで見かけない揉烏帽子のひとりの男がその傍をすうと掠めて通つて行つた。

『おい！ 澁谷！』

かう湯の中から義朝の呼ぶ聲がした。

金丸丸はそのまゝ立つて行つた。義朝は一度暖たまつた身を浴槽から出して、流しに蹲踞つて、手帛で右の腕のあたりを洗つてゐるが、「背中をひとつ洗つて呉れぬか？」かうかれは金丸丸を顧みるやうにして言つた。

『そ、ちも飲み過ぎたな？』

背中を流させながら義朝は言つた。

金丸丸はきまりがわるいといふやうに、黙つて顔を赧くした。

『あまり飲んではいかな、本心を失ふでな——』

『つい、勧められましたもので……』

『此處の家來が大勢行つてゐるか？』

『三四人で御座りました』

『女子もゐるか？』

『………』

『うむ？』

『二人三人をりまして御座る……』

『驚栖は……？』言ひかけてよした義朝は、はつきりとそれを口に出しては言はなかつたけれども、その女子の一人と驚栖が寝たのだらう？ といふやうな質問をその態度で示した。

『女子はもどりをりました……』

『そんなことはあるまい……』



さうは言つたものゝ、義朝は深くそれを追及しようとはしなかつた。金王丸は暫し黙つて背中から右の腕のあたりを頻りに洗つた。

桶から水の落ちる音がちよろちよろとあたりに微かに響いてきこえた。

『でも、湯に入るのは久し振りぢや。好い心持ちや……』

金王丸に向つて言ふとなしに義朝は言つた。

やがて金王丸は湯を小桶で一杯汲んで、ザツとその洗つたあとにかけて、

『お體が冷えるといけませぬで——』

『さうぢやな——』

そのまゝ、義朝は湯氣の白く颯つた浴槽の中へと身を沈めた。

金王丸はそのまゝ、元のところへと来て、指貫や直垂などを小疊みにしたりなどしてゐるが、ふと氣が附いたのは、そこに湯上りの浴衣も何も來てゐないといふことであつた。

『何うしたんだらう？ まさかに持つて來ない筈はあるまい。忘れたのか？ それともこれから持つて來るのか？ それともまた何處かに置いてあるのか？』

かう思つてあたりを見廻したが、そこらにそれらしいものゝ置いてあるやうなところもなかつた。浴衣が持つて來てあるとすれば、黒塗のみだれ箱か何かにに入れてなければならなかつた。

金王丸はそこらをあちこちと探すやうにしてゐるが、今にも湯から義朝があがつて來さうなので、さうしてゐられずに、さつきそこに出てる湯の番の爺でも呼ぶつもりで、そのまゝ、わら杵をつゝかけて戸外へと出て見た。

『おい、誰ぞ？』

あたりには誰もゐなかつた。

『おい、こら誰かるぬか？』

金王丸はいくらか聲を高くして重ねて呼んだ。矢張答へがなかつた。

困つたなかれは思つた。忘れたのかも知れぬが、何といふ不注意だらう？ 何といふ粗忽だらう？ それに、さつきそこに湯番の爺もゐたのに——何處に行つたのだらう？ 金王丸はこんなことを思ひながら、つひうかくと畑道を七八間向うに行つた。

『おい、こら、誰ぞゐぬか？』

かれは猶ほ聲高く叫んだ。

矢張何の答へもなかつた。かれは困つて母家近くまで行つたが、その時かれは一種の胸騒ぎを感じた。何か背後の方で人の叫ぶやうな氣勢を耳にしたやうな氣がした。かれは急いで元の方へと引返して來た。



かれは思ひもかけず、その午前の日影のさし込んでる浴槽の中に白い赤いものゝ重なり合つてゐるのを眼にした。何か太い腕や白い足の混乱して動いてゐるのを眼にした。

## 六四

何が起つたか初めはつきりわからなかつた。けれども金王丸は急いで畑に添つた道を此方へと引返した。突如としてその何事であるかを知つた。そのまゝ湯殿の中に躍り込んだ。

ほんの僅の時間であつたのに、義朝の白い肌からは紅なす血汐が流れて、その胸は既に首と離れ離れになつてゐるのであつた。それにしても何といふ瞬間であつたであらう。金王丸が向うに出て行つてその歩いて行く後姿がくつきりと午の刻近い明るい冬の日影に見えてゐたのに、だしぬけに何處から來たかと思はれる太つた大きい男が、むすとはかりに背後から義朝に組みついたのであつた。はつとした義朝は忽ち事の何であるかを知つた。しかも流石に名だゝる勇將のこととて、驚くには驚いても決して慌てはしなかつた。かれはその選ばれたこの地方の剛力である橘の七五郎をそのまゝ取つて引寄せてそれを一も二もなく押伏せた。そこにまた他の二人があらはれた。かれ等は組みつくとそのまゝ手にした短刀で義朝の脇の下を深く刺した。血がすさまじく迸つた。

『卑怯者！』

義朝は叫んだ。つゝいて『金王丸！ 金王丸！』と叫んだ。しかしそれもほんのわづかの間であつた。

二箇所の急所にかれは忽ち下からはね返された。心は矢たけにはやつても、身に一絲をつけてゐないかれは何うすることも出来なかつた。『卑怯者！』もう一度かうかれは繰返して言つてぐたりとなつた。常磐のことも、延壽のこともちよつとその胸を矢のやうに掠めて通つて行つたには行つたけれども、そのつぎの瞬間には魂魄が既に永久に天に歸して、胴と首と離れ離れになる時には、もはや意識は全くなかつた。

そこに金王丸は躍り込んで來たのである。かれは何も言はずにそのまゝ壁に立てかけて置いた金ごしらへの佩刀を取つて、抜く手も見せず、そこに立つてゐる一人の肩先から深く鋭く切り込んで行つた。その男はアツと言つて後に倒れた。もう一人の男とその太つた橘の七五郎とは、それを見て、義朝の屍を捨て、慌て、此方へと向つて來たが、憤怒に燃えた金王丸の鋭い切先は、先へ進んで來た男の刀をカラリと打落したばかりではなく、忽ちその眞向を瓜のやうに二つに割つた。血がさつと迸つた。

橘の七五郎はしかしあたりいきこえた剛の者と言はれるだけあつて、容易にそれに負けてはゐなかつた。大刀を振翳して金王丸へと斬つて懸つた。かれ等はいつか湯殿から此方の方へと出て來て刃を合せた。



最早この時にはその報知が母屋へと傳はつて行つたらしく、家來といふ家來は、その垣の角、かしの家の隅といふやうに、あちこちから顔を出して、頻りに此方の様子を窺つてゐたが、しかも鋭い金丸の切先に恐れを抱いたもの、如く、橘が既に危く——現に一ところ手創を負うてその太刀風もいたく鈍つて來てゐるのを見てゐながら、しかも誰れも出て救はうとはしなかつた。その家來の一人、二人は、とてもこれは太刀打ではかなはぬと見て、卑怯にも遠矢にかけるために弓を取りに再び母屋に入つて行つたりなどした。

橘は金丸の太刀を受けかねて、たゞごとく二三歩あとによろめいたが、眞向を割られてあつと言ふと同時に、迸つた血がその眼に入つたらしく、そのまゝ、鏗と後に倒れた。金丸は君の仇！ 思ひ知れとばかりにグサとその胸を刺した。

しかもかれが血刀を提げて、ほつとしてあたりを見廻した時には、庄司の家來達は弓やら槍やらを持ち出して大勢そこに集まつて遠巻きにしてゐた。

## 六五

湯殿の中に身首とところを異にしてゐる殿のことも氣に懸つたけれども、既にさういふ風に多勢の家來達の遠巻きにされては、とても落附いてそこにあるわけには行かなかつた。兎に角かれは切抜けなければ

ならないと思つた。何うしても一方を切破つて、こゝを逃れ出なければ、誰がこの反忠の不義の眞相を京に報告するものがあらうと思つた。金丸は太刀を提げて寄つて來てゐる家來達の中へ切つて入つた。それは何のことはない、群がる羊の中に一匹の虎の咆哮して入つて行くのに酷肖してゐた。人達はそれを見て皆走つて逃げた。橘の七五郎すらあのやうに他愛なく殺された刀の冴えには、誰もわれと名告り出て向つて來るものもなかつた。弓弦の音がして、をりをり遠矢は飛んでは來たけれども、それも多くはへろ／＼矢で、受けて切つて落すのに、何の手間ひまも入らなかつた。

金丸はいつか築土から裏門の方へと出て來てゐた。ふと見るとそこに驚栖がゐる。大勢の家來達にその周圍を圍まれて、奮戦突撃してはゐるけれども、兎角受太刀にならうとしてゐる。いきなりそこに突入して行つた。一人の肩先を、他のひとりの眞向をかれは斬つた。『玄光どのしつかりなされ！ 金丸が此處にゐる。殿の仇を打たずには——』かう叫んで縦横無盡に切つて切つて切りまくつた。

暫らくした後には、そのあたりには誰も寄つて來るものはなかつた。

『大殿は？』

玄光は訊いた。

『無念ながら、殿は御最期あらせられた……』

『何處で？』



『お湯殿で……』

『さては仕組んだことぢや。無念ぢやな。鎌田どのも既にこの世にはをらぬ筈ぢや——』

『何に？ 鎌田どのが——』

『さつき、家來のものがさう申し居つた。鎌田殿ももう首になられた。その身は覺悟せい！ と言つて切つてかゝつた——』

『それは事實か？』

『鎌田どのは、たうに、昨夜首になられたといふことぢや。ちやんと仕組んだ業ぢや。不義不忠のしれ者ぢや。その娘の婿までも邪魔になると殺したとは何といふことぢや——』

『それは本當か？』

『何で偽りを申さう。この身があそこにをると、いきなり家來の二人が刀を抜いて斬つてかゝつてさう申した。殿も、そなたも向うの湯殿で、もはや仕とめられてをると申して、卑怯にも大勢して切つてかゝつた——』

『さういふ不義不忠のものは生かしては置けぬ。』

ふと氣が附くと、その向うに厩があつて、馬が不思議にも二頭までそこに繋がれてあるのをかれ等は眼にした。ござんなれ！ 神佛のめぐみ！ かうかれ等は思つた。二人はいきなり鞍も何も置いてない

その裸馬を引出して勢好くそれに跨つた。

徒歩ですら、容易に仕留めることの出来なかつたのに、さういふ風に馬に乗られては、そこらに大勢かたまつて集まつてゐる手の者ども、何うすることも出来なかつた。かれ等はそこからも此處からも弦の音を立て、遠矢を放つた。

『卑怯者！ 不忠者！』かれ等はかう叫びつゝ、あるものは馬蹄にかけ、あるものは太刀で仕留めながら、今度は却てその群集の中へと此方から突入して行つた。

『長田父子！ 不忠卑怯なる長田父子を出せ！』かう叫んで阿修羅大王のやうに二人はそこらをかき散らした。

二人は庄司父子を捜し出して、主君の仇を報じたいと思つたけれども、とてもそれは出来さうにも思はれなかつたので、その邸から次第に村の街道の方へと出て行くやうな形になつた。

長田の家來ばかりではなく、村の者達も段々そこらに集まつて來た。中には氣を負つて棒などを持つて出て來たものもあつたけれども、武器を携へてゐる家來達すら遠巻きにしてゐるのを見て唯わい／＼喚くだけで、誰もその二人に近寄つて行くものはなかつた。否、村の者たちには、事の何であるかすらまだ本當によくわかつてゐなかつた。あるものは庄司どのが殺されたのだと言つた。またあるものは昨夜から今朝にかけて、武豊の平家がやつて來て、一擧に源氏の大将をはじめ、庄司父子をも縛め捕つて



行つたのだなどと言つた。あたりは唯、わい／＼騒ぐばかりであつた。

庄司はじめは邸の中に落附いてゐたけれども、橘の七五郎すら金王丸に手もなく殺されたといふ話を耳にして、急に怖氣がついて、裏口のしのびの木戸をそつとあけて、畑道づたひにすつと向うの丘のかげの方へと身を躲して了つた。

二人は多勢に取巻かれながら、しかも割合に多くの抵抗を感ぜずに、唯、をり／＼飛んで来る遠矢を切つて落したぐらゐで、徐かにあの池の畔から里川の橋のあたりまで行つた。突然、右の方の疎らな林の中から長い槍を持つておめき叫んで向つて来るものが五六人あつた。金王丸は先に進んで来た奴を馬で蹴散らし、つゝいて縫つて来たものを眞向から瓜のやうに割つた。血がサツと迸つて、その男は後に倒れた。

鷲栖の方に向つたものも三四人は見かけた。『逃すな！ 逃すのは耻辱ぢや。』かう言つて向うから馬を走らせて来て指圖してゐるのはそれはたしかに子息の景致であつた。あとから武器を持つて家來達が大勢續いて近寄つて来た。

せめて子息の景致だけでも……と金王丸は思つたけれども、多勢に無勢、鬼神でない以上は、とてもさうした事は望まれなかつた。それにこのまゝこの身が討死しては、誰がこのことを京に知らせよう。今となつては、もはや致し方がない。こゝにて討死するは易けれども、それよりも殿の殺害されたあり

さまを、長田親子の不忠不義を京に傳へる事が一層この身に取つての肝要のつとめではないか。死にまざる義務ではないか。近寄つて来る大勢の人達を相手に、或は蹴散らし或は切り靡け或は追散らし、現にその橋の袂では、寄つて来た大男を二人まで梨子割にして、血汐が橋の板を染めたほどであつたが、暫らく経つた後には、かれは鷲栖をあとに——むしろ追手を鷲栖にまかせて、次第に馬を村落の方へと落して行つた。

暫く此方に來たところで、再び鷲栖と一緒になつた金王丸は、

『此處で死ぬのは犬死ぢや。兎に角、京にこのことを傳へねばならぬ！』

『それが好い、それが好い！』かう鷲栖は言つて、『兎に角、こゝはこの身にお任せなされ！ この身が引き受けた！ これを眞直に北へ北へとさへ行けば熱田ぢやほどに、あとを案じずにとく行かれよ。』

『では、鷲栖どの！ 頼む。』

かう言つたまゝ、金王丸は一散に馬を走らせた。海近い高原には一直線に／＼いた路に午の刻過ぎの日影が照つて、馬の蹄に捲き起された砂塵の黄く遠く颯つて行つてゐるのが長い間見えてゐた。



通盛の妻



## 通盛の妻

—

越前三位通盛の北の方の乳母の柏が清閑寺のほとりに微かに住みなしてゐる老母の引留めるのを心強く振拂つて、急いで網代車に乗つて此方に出かけて來た時には、もはや六波羅のところどころには火は起つて、その黒烟がもくもくと斜に河原の方へと靡きわたつてゐた。柏は氣が氣でなかつた。果して追ひつくことが出来るか。無事に北の方の一行にめぐり遭ふことが出来るか。それすら覺束ないのに、街の人々は皆な荷擔して立つて、今にも木曾の郎等の楯六郎親忠の軍兵が叡山から都に亂入して來るといふ噂が洪水でもあるかのやうにあたりには漲り渡つた。牛飼の男すら、慌て切つて頻りに牛の背に鞭を當てた。

『七條から西へ！』

柏は中から聲を懸けた。牛車は驀地に走つた。



今こそあたりは白け切つてゐるけれども、ひと時ほど前には、そこらは、檳榔毛の車や、糸毛車や、侍の乗つた馬や、胡籥にさゝれた鷹羽の矢や、鉞形の兜や、蒭黄匂ひの鎧や、紫地の錦の直垂や、網代車の中にほのかに透して見える女房達などで一杯になつて、今のぼり出した朝日の爽かな光線が、繪巻か何ぞのやうにあざやかにその上を照した。軍兵はあとからあとへと續き、赤いしるしの大旗や小旗が間斷なしに動いて行つた。そこに行幸の御輿が來た。神璽、寶劍、内侍所、印、鎰、時の簡札、御同乗はおん母建禮門院、つゞいて時忠の卿、内藏頭信基、讃岐中將時實、さういふ人達が甲冑弓箭を帶して供奉した。しかし誰の顔にも夥たゞしい不安の色の漲り渡つてゐないものはなかつた。これが常の行幸であつたならば——何事もないめでたい行幸であつたならば、兩側に居並ぶ人達も靜かに、行列も秩序正しく、警蹕の聲もあたりに嚴かに聞えて行つたであらうけれども、今はそれどころではなく、御輿のあたりがやゝ嚴めしく秩序立てられてあるばかりで、あとは誰が先きに出ようが、誰が後に退らうが、そんなことをやかましく注意してゐるものは誰もなかつた。公卿も、殿上人も、武家も、侍もすべて混雜と一緒になつて、黄い埃塵に包まれながら動いて行つた。

それでも七條大宮に來て、今まで何のことなしに供奉に加つて來てゐた攝政内大臣基通の車が暫し列から離れたか何うかしたかと思つてゐると、いきなり大宮通を飛ぶがごとくに走つてのぼつて行つて了つた時には、誰もあれよあれよと言はずにはゐられなかつた。しかも落目になつたかれ等の中には、そ

れに對して矢一筋酬るよとする侍すらもなかつた。かれ等は唯ぼんやりとそれを見詰めるばかりであつた。法皇ですら——あれほど平家とは切つても切ることも出来ない關係にあつた法皇ですら、一緒に伴れて落ちられることを恐れて、逸早く昨夜身を躲して了はれたのであるから、攝政殿の落ちられることもそれも不思議はないといふやうに誰にも思へた。頼もしからぬ運命がひとかれ等の胸を襲つた。しかし何うすることも出来なかつた。今になつて、何うしてかういふ風に行衛定めぬ運命に身を任せたか、何うして六波羅で兎も角もなつて了はなかつたか、戰つて討死するならば、それも結局は潔よいことであつたのに——それすら出来ずにかうした慘めな行幸をしなければならぬとは、何たる事か。しかしいくら悔んで見たところで、今はもはや何うすることも出来なかつた。動き出した以上は、何處までも行けるところまで行かなければならなかつた。黄い埃塵に包まれた長い行列は、暫しは停つたが、また動き出して、今度は朱雀大路を眞直に南へ南へと動いて行つた。

## 二

朱雀大路の羅生門は全く荒廢してゐたけれども、それでもその朝京の人達は多勢その上にのぼつて、その記憶すべき光景を眺めてゐた。そこからは南も北も、七條の通も、朱雀大路も、はつきり手に取るやうに見えた。北には京の市街が魚鱗のやうに屋根を並べて、大宮から少し右に寄つたところに火の手



が一つあがつてゐた。否、六波羅方面にも黒煙が二ヶ所も三ヶ所も颯つて、その大きな殿舎の焼け落ちる音がすさまじく手に取るやうにきこえてゐた。そしてその此方に加茂川の水が白く爽かに一筋の布を引いたやうに流れてゐた。大比叡はまたいつもと違つてくつきり晴れて、そこに充滿した源氏——時を隔てず京に亂入する源氏の軍兵がそれとはつきり想像された。何うなる世の中かと誰にも思はれた。幼い主上がおん母に抱かれて御輿に召されたさまもはつきりと想像されれば、落ちて行く平家の赤い旗や、赤いしるしや、馬や、胡籬や、先へ先へ出ようとする糸毛車や、網代車などの列が、長蛇のやうに七條から朱雀大路へ、羅生門へ、更に南に鳥羽へとつゞいて行つてゐるのをはつきりと眼にすることが出来た。やがてこんな會話がそこにある人達の口から出た。

『入道殿が都うつしをせられたことがおぢやつたな。あれがこの前兆だな!』

『ほんにな……』

『しかし、入道殿はかういふことがあるとは知らざつたらうな?』

『さうぢやな……。それにしても、平家は何故合戦をせぬのぢや? 一合戦もせずにかうして敵に後を見せるといふことは卑怯では御座らぬか?』

『さやうで御座るな。いくら弱うても、ひといくさぐらゐる——』

かう言つたが、その時傍にゐたひとりの白髯の翁は急にそれを遮つて、『いや、京で合戦されては困る

ぢや。それでないやうに、——合戦で京が焼けては、やつと此頃もとのやうになりかゝつた町が散々ぢやによつてな……。それで合戦がないやうに計つたぢや』

『そんなことあるかな?』

『さうぢやけな。院がその身をおかくしになつたのも、さうするのための手立のひとつぢやさうな』

『さうかな』

『それはさうぢやな……。合戦があられては困るな……』初めの揉烏帽子の男もさう言つて、『何と言うても、このやうに世間が騒がしうては、何うにもならんな。平家でも源氏でも好いほどに早う何方かにきまつて貰はねば爲方がござらぬぢやな!』

『ほんにぢや——』

『それにしても、源氏は何うしたらうな……。まだ叡山から下りて來たやうにも見えぬが——』

『いや、あそこに白い旗が見えるでは御座らぬか……』

『いや、あれは旗ではござるまい。雲で御座らう……』

こんな話が盡きずに出てるた。その頃には、朝日は既に高くのぼつて、右に流れてゐる桂川がところどころ金色のやうに光つて見えてゐるたが、一行は黄い塵埃に包まれながら、長蛇のやうにうねうねと鳥羽の城南離宮の方へと動いて行つてゐた。御輿のあたりは、中でもことに混雜して、赤い旗や、馬や、



牛車で一杯になつてゐるのがそれとはつきりと指さゝれて見えた。

『昨日の榮華は夢ぢやな。驕るもの久しからずといふが、今日といふ今日ははじめて目のあたりそれを見た!』さつきの翁は、さもさも慨嘆したやうに白髯を抜きながら言つた。

しかし、あたりにゐる人たちは誰もその相手にはならなかつた。翁は尙ほもひとり言のやうに續けた。『保元も、平治もわしは見て來た。清盛入道は運の好い男だつたが、あまり我意を振舞ひすぎた。今は神も佛も平家を見捨てたぢや』

じつと南の方を眺めてゐた揉烏帽子の雑色はだしぬけに叫んだ。

『不思議ぢや、不思議ぢや!』

『何うしたな?』

『平家の軍兵が戻りをる!』

『何んと?』

『それ見やれ! 此方に大勢馬が驅けて來る! いや、此方へは來ずに、深草路を六波羅へとかけをる!』

『ほ! これは!』

『平家の中にも名を惜む武士があると見えるな?』

『誰の手ぢや』

『さ! ちよつとわからぬな!』

尠くともその路を、赤ちやけた埃の多い路を、二三百騎戻つてかけて行くのがはつきりそれと指された。否、暫く経つた後には、それは名を惜む平家の兵どころではなく、矢張、法皇や攝政殿と同じく裏返つて逃げ戻つた池大納言頼盛の手のものであるといふことがそこにある人達の耳にもきこえて來た。六波羅の火の手は一層熾んになつて、今は美をつくし善をつくしたその殿舎も邸宅も全くその烟の中に包まれて了ふのが見えた。それと同時に、御輿は既に遠く向うに行つて了つたらしく、一行の殿軍をなした本三位中將重衡の赤い旗じるしが纒かにそこに残つてゐるばかりになつた。

三

丁度その頃、乳母の柏を載せた網代車は、羅生門を出て城南離宮への道をガタガタと急いで走らせて行つてゐた。

牛飼の男は頻りに鞭を牛の背に當てた。

柏は唯車に乗つてゐるばかりであつたけれども、それでもいろいろな噂がその耳に入つて來た。

『何んと?』



『池の大納言どのが裏返られたさうで御座る——』

『何んと？ あの大納言どのが？』柏に取つてはそれは大きな驚愕であらねばならなかつた。

牛飼のは男は走りながら言つた。

『人の心と申すものは、あさましいもので御座るな？』

『しかしそれはまことか？ 非事ではござらぬか？』

『まこともまことも……。そら、そこを五騎、六騎通るで御座らう。赤いしるしを破つたり赤い小旗を捨てたりした兵どもが——それが皆な大納言どのの手で御座る——』

柏は黙つたまゝあとの言葉を出さなかつた。柏は決してそんなことは思はないけれども——あの北の方のためなら、西の海はおろか、奈落の底までも俱について行くことを辭みはしなかつたであらうけれども、この落日の時に際して何うなつて行くかわからない餘り頼もしくない運命に面して、さういふ風に裏返りをするのも決して無理とは思へなかつた。かの女は別れて來た老いた母のことを頭に浮べた。表から裏からいろ／＼説いて——その身はさう深く平家の恩に感じなければならぬ理由はないと言つて、泣いて母は留めたけれども、しかしかの女はそれを振拂つて心強く車に乗つて來たことをくり返した。かの女はいくらか後髪が引かれるやうな氣がした。これで一言車を返へすことを牛飼の男に命じさへすれば、さうした頼もしくない運命に従はなくつても好いと思つた。けれども、しかし柏はさう思

つただけで、すぐそれを力強く打消した。越前三位の北の方の顔がはつきりとその眼の前に浮んで來た。

柏は昨夜の慌しい光景を頭の中に繰返した。越前三位が陣から戻つて來たのは、それはもはや亥の刻に近かつた。久し振りの歸陣、もはや二月も逢はれなかつた妹と背であるゆゑに、さぞ喜悅に溢れたであらうと思つたのに、室の中では、思ひもかけず北の方の歎げける聲がして、つゞいて三位のいつにも似ず強く北の方を叱りなだめる氣勢がした。否、そればかりではなかつた。三位の殿は服をもかへず、すぐまた慌たゞしけに出て行かれて了つた。やがて柏は事の何であるかを知つた。北の方の泣かれたのは、殿が一生の別れをすると言はれたため、そのために泣いたのであるといふことである。しかし北の方は今は思ひさだめて居られた。何處までも奈落までも殿について行くと言つて涙の中に深い決心を見せてゐた。あの姿の美しかつたこと！ あの心の頼もしかつたこと！ それでこそ思ひ思はれた妹背の名に背かぬと言はれやう！ 『この身も……この身も……何處までも——』乳母の柏はその場でさぐかう決心して了つたことをくり返した。柏は世にも美しいやさしい北の方をそのまゝひとり遠くにやるなどとは何うしても思へなかつた。何處までも行末を見とゞけずには置けなかつた。それにしても昨夜からこの曉にかけての慌たゞしさは！ 取るものも取敢ずに、何も彼もそこに捨てたままに、誰も彼も出發の準備をした。否、大臣、公卿の人達なればこそ妻子を具し眷屬をも引連れて行くことが出來たけれども、次さまの人々には、とてもそのやうなことは望まれなかつた。いかに戀しい妻子でも、皆な



打捨てて、弓箭を執つて、そこに引き据ゑられた馬に跨つて行かなければならなかつた。柏は一かたづけあたりを片附けたあとで、清閑寺の母許にちよつと暇乞をして來ると言つて出かけて來たが、何の彼のと手間取つて、たうとうかうまで遅れて了つたことを再び繰返した。北の方はさぞ不安におぼされてゐるゝでがな御座らう。この柏も他の人達のやうに、たうとう裏返つたと思召してがなるらせられるで御座らう。それにつけても、一時も早うあとを追ひ奉らねば——」こんなことを思つてゐる中にも、網代車はいつか一條の長い路を走つて、城南離宮の南門を眼の前に見るあたりまでやつて來た。

『行幸はもはやずつと先へ延びさせられましたか？』

をりをり車から顔を出して、そこらを歩いてゐる雑卒や雑色などに訊ねて見たけれども、しかもはつきりしたことは容易にわからなかつた。あるものはついそこにあると言つた。またあるものはもはや川近くまで行き延びられたであらうと言つた。その向うに、さう大して遠く離れないところに、侍や兵どもの馬が暑い黄い埃塵に包まれて動いて行つてゐるけれども、それも誰の手の者やはつきりとはわからなかつた。否、城南離宮に近くにつれて、雑踏は更に一層の雑踏を加へて行つた。路のあたりには牛車が澤山に集つて、それが行つたり留つたりしてゐた。夫のあとを追つて來た妻もあれば、子の行方を慕つて來た母もあつた。とても逢ふことが出來ないと言つて、網代車の中で手帛を眼に當て、泣いてゐるものもあれば、猶ほその願ひを捨てずに、埃塵と暑い日影と雑踏との中を一散に向うに走り抜けようとするものなどもあつた。何處を見渡しても、落ちて行くものの慌たゞしさとあさましさとが名残なくあたりに満ちた。

城南離宮は先づ年から荒れ果てゝ、あと守る人のみそこに住んでゐたけれども、それでもその彩色した棟や、破風や、長押が、それとはつきりと緑の樹の中に見えて、長い長い朱塗の欄干がそれとはつきり指さゝれた。柏はその身は見るには至らなかつたけれども、そこに、その池に、白河法皇が曾て龍頭鷓首の舟を浮べて、詩歌管絃の御遊を試みられた時の物語を老母から聞かされて、よく知つてゐるので、何とも言はれないなつかしさと悲しさとまたかうしたものをすべて東國の兵に渡して了はなければならぬ情なさをひしと感じた。

ふと一條の路がその傍にあるのを見て、牛飼の男はいきなり車をそつちの方へとやらうとした。

『何處へ行く？ そちらは方角が違ひはせぬか？』

柏は車の中からかう聲をかけた。と、牛飼の男は、『とてもあの大道は通れませぬので……こつちを行く方が好いと思ひます。少し遠いには遠う御座るが、川の土手づたひに行けば、却つて静かで好いで御座らう……。とても、あの雑踏の中は通れぬで——』かう言ふと共に、その網代車は城南離宮の築土に添つて、ずつと桂川の土手の方へと向つて進んだ。そこにも騎馬の侍や糸毛車が通つてゐたにはゐたけれども、それでも、その大通りに比べては静かなものであつた。路はその離宮の築土をぐるりと廻つ



て、次第に桂川の土手の上へと出て行つた。

いくらか地盤が高くなつてゐるので、振返る度に、あとにして来たなつかしい京のさまが——大比叡と鞍馬と愛宕とに取巻かれて、時には高い塔を、また時には大きな伽藍を、また魚鱗のやうに屋をつらねた市街を見せてゐる京のさまが、すさまじい黒烟をとどころに靡かせながら一目にそれを打渡して眺められた。

ふと柏の眼は、一列に竝んで赤旗を持つて土手の上を走せて来る騎馬の群の上に留つた。妙くともそれも平家の人達であらねばならなかつた。

『問うて見よ』

牛飼の男は路傍に車を置いたまゝ、恐る恐るその騎馬の群に近寄つて行つたが、暫くして戻つて来て、『それは修理太夫どのの御嫡子が仁和寺の御室御所に暇をつけさせられたために後れさせ給うた一列で御座る——』

『しからば皇后宮亮どのの御一行でがな御座らう？』

『さやうで御座る』

『然らばこゝに、殿の御着なさるゝのを待ちて、伴うて行つて賜はるが宜しい。』

柏に取つてはそれは此上もない好いことであつた。柏はそこに網代車から下りて、皇后宮亮經政の近

寄つて来るのを待つた。馬上でそれを見出した經政は、

『お！ そなたは、越前三位どのの柏ではないか？』

『殿！』

『そちは後れたのか？』

『さやうに御座ります……。越前三位どののは？』

『皆と一緒にあらう……。』さう言つたが、ちよつと馬をとめて、

『そちもともに行くのか？』

『老母に別れかねてをりまする中に、かくおそくなりました……。何卒おんともどもに——』

『この身も同じぢや。別れを惜んでおそうなつた。仁和寺の大納言の法師がついそこまで見送りに来て賜うたほどに——別れ辛うてな！』

『ことほりて御座りまする！』かう言つた柏は袖に眼を當てずにはゐられなかつた。經政の眼にも涙が滲んだ。かれ等は黙つてとどころに火の手の高く颯つてゐる京の町の方を眺めた。

## 四

多勢の軍馬の間を縫うやうにしてたどつて行くのも、柏に取つては並大抵のことではなかつた。それ



は經政の一行はつとめて一緒に伴れて行つて呉れるやうにはして呉れたけれども、しかも何ぞと言つては、馬と兵との間に挟つて、先へ出て行くことも何うすることも出来ないやうなことが度々起つた。ある土手の上に来た時には、此方から行く軍兵と向うから来る軍兵とが一緒になつたために、赤い小旗と赤いしるしとが互ひに雜り合つて、それをやり過して了ふまでは立往生をしたまま何うすることも出来なかつた。柏は氣が氣でなかつた。果して北の方の一行に無事にめぐり合ふことが出来るか何うか、それすら疑問になり出して來た。

かの女は少しでも軍兵の途切れた間を覘つては、先へ先へと出るやうにとつとめたが——辛うじて經政の一行を見失はない程度にだけはそのあとを追つて行つたけれど、しかも川の岸に来た時には、はたと困却して了つた。柏自身にすら何うしたら好いか思案に餘るやうな光景がその前にあらはれ出した。それは暑い盛りの早天續きの今日此頃であるから、水は比較的少く、ところどころに洲をつくつて流れてゐるばかりであるので、徒渉するにわけはないが、否、現に下流に見えてゐる橋は他所に、馬も車も皆な石原を平氣で徒渉して行つてゐるのではあつたが、網代車ではそれを越して行くことは何うしても出来さうには思はれなかつた。しかし牛飼の男はそんなことには頓着せず、頻りに鞭を牛に當てたので、川の半ばまでやつて來て、そこで深い凹みにはまり込んで、あとへも先へも一步も動けなくなつて了つた。しかもその時には經政の一行は、既に遠くに行つて、呼ばうにも呼ばず、さうかと言つて此のまゝ、此

處に留つてゐるわけにも行かず、柏は車の内で頻りにもだえあせつたが、折好くそこに通り懸つたのは本三位中將の手の者で、別に柏を知つてゐるといふわけではなかつたけれども、『網代車がひとつ川の中で動けないで困つてをるぞ！誰が乗つてゐるのか知らぬが、手傳つて向うへわたしてやれ！』と命令したので、雜卒が皆なで揃つてやつて來て、わけなく向うの土手の上まで押し上げて行つて呉れた。そればかりではなかつた。一層好運であつたことは、經政の手の者が主人の命令を受けたとかで、心配して、三四人そこまで戻つて來て呉れたので、それからは何の故障もなしに、大原野を右に、長岡の方へと眞直にその一行を追つて行くことが出来るやうになつた。

柏は到るところで種々なことを耳にした。ある者は御輿はもはや山崎の向うまで行つたであらうと言つた。またある者は川尻の軍兵が戻つて來て、このまゝ京を捨て、了ふのはいかにも残念だといふので、山崎を扼して今日一合戦ある筈だなどとも言つた。それにつけても女や老人は足手纏になるので、皆な舟に乗せることになつて、そのため淀のあたりには舟が一杯に集められてゐると言つた。しかし本當のことは何が何だかわからなかつた。柏の乗つた網代車は黄い埃塵の漲る街道をガタガタと動いて行つた。振返ると、大比叡から鞍馬、鞍馬から愛宕にかけて、白い羊の毛のやうな雲が大きくひろく横はつて、その下にところどころに火の手の颯つた京の町の混雜と連つてゐるのが高い丘添ひの道にかゝる度にそれと手にとるやうにはつきりと眺められた。



## 五

山崎の翠微が眼の前にそれと見えるあたりまで来て、柏ははじめて御輿が關戸の院に暫しがほど据ゑさせられてあるといふことをはつきりと聞いた。かの女はほつと呼吸を吐いた。北の方に逢ふ時がやつとやつて来たと思つた。

長くつゞいた街道には軍兵や馬や弓や胡籬が一杯に満ちて、赤い大旗が行くにもあらず、留るにもあらず、あるものは宿驛の一角に、あるものは路傍の林の隅に、またあるものはずつと遠く向うの山の裾のあたりに靡いて、混雑と不整と不安とがそれとなくあたりに張り渡つた。しかも大勢の軍兵共は、そこらにだらしなく集つたり散つたり休んだりしてゐて、林の中の涼しい蔭には鹿毛だの黒桃毛だの馬の何頭となく繋がれてゐるのがそれと繪卷か何ぞのやうに見透かされてゐた。直垂姿で慌て、向うから走つて出て来る殿上人などをも見かけた。

關戸の院といふのは、宇多天皇がその昔都を守護するために、京の四面に關を置かれたそのひとつで、その廢された後は、そのあとに今の寺が建てられ、たまさかに殿上人などがやつて来ては、月を眺めたり萩をめでたりする名所のひとつとして——京の郊外の歌枕のひとつとして遍ねく世に知られてゐるところであつたが、今日はいつもの静けさに似合はぬ雑踏と混雑と不整とがあたりを領して、その庭から門にかけて、赤い總のついた美しい馬だの、檳榔毛車だの、糸毛車だの、女車だのが、秩序もなく慌たゞしげに乗捨てられたまゝになつてゐて、深い緑樹の蔭から巳の下刻に近い日影がチラチラと美しくあたりを照してゐた。

柏はその乗つて来た網代車を街道から少し入つた林に添つたところで乗り捨て、そのまゝ、急いで——一刻も早く越前三位の北の方に逢はうと思つて、その寺院の山門の中に入つて行くと、そこに庭から新三位中將資盛が直垂姿で、蒔繪の太刀を佩いだ應揚な態度で靜かに出て来るのにひよつくり出會した。

柏を見て、

『お！ そなたは——？』

『新三位の中將どの？』

柏はさう言つただけで、涙が胸に一杯に漲つ来た。

『越前三位の北の方は？』

『そなたは俱々に参つたのではないのか？』

『後れてひとりあとを追つて参りましたので御座います……』

『お？ さやうか？ 後れたのか。それでは越前三位の北の方もさぞよろこぶでがな御座らう……？』

同族でも池大納言のやうに裏返るものすらあるのに、一乳母の身で平生の恩義を忘れずにあとを追つて



來るとは——さうは言はぬまでも、感慨深さうに資盛は言葉をとめて、『越前三位の北の方は、その奥にをらるゝで御座らう……?』

『忝なう……』

かう會釋して柏はそのまゝその庭へと入つて行つた。しかしかの女はすぐ引返した。

かの女の眼には、かしこいと言つて好いか、悲しいと言つて好いか、情けないと言つて好いかかわらないやうなひとつの光景が映つた。かの女は先づ國母の慌たゞしい中にも美しく粧はれてそこに坐つてゐるゝ御姿を眼にした。曾ては傍にも近づくことの出来なかつた御姿を。また高貴の人達が端近う立つたり坐つたりして居らるゝのを。二位の尼がかしこくも幼ない帝を抱いて坐つてゐるゝのを眼にした。そしてその此方には、宗盛父子を始め、公卿、殿下人の方々が一面にずらりと竝んで坐つて居るのを眼にした。柏は慌てゝ引返した。

かの女は今度は庭から外へと出て、他の入り口をあちこちとさがした。しかし何處も彼處も慌たゞしく混雜してゐて、通りすがるものはいくらもあつても、そこらに彷徨してゐるとひとりの乳母の相手になつて呉れるものなどは何處にもなかつた。ふとそこに出て來たのは、かねて知つてゐる信西の娘で國母のもとに常に奉仕してゐる阿波内侍の姿であつた。平生ならば、矢張席を同じうすることの出来ないほどそれほど位置の卑いこの身ではあつたけれど、今の際であるのと内侍は平生身柄を誇らない性であ

るのをよく知つてゐるので、急いでその傍に寄つて行くと、『お、柏！ 小宰相どのがさつきから待ち居つた！』

と向うから氣易けに聲をかけた。

『忝なう——』

『つい今も小宰相どのは、そこらに居つたが——』阿波内侍はあたりを振返つて、『さつきも、そなたが來ぬが、何うしをつたかとおして待たれて居つたが——それにしても、いつつきやつたか。今着きやつたのか?』

『さうで御座ります……』

『ひとりで参つたのか?』

『さやうで御座ります……』

『よう参つたな！ 一度出て参つたものですら、裏返つて京にもどつて行かれるのに……』

『池大納言どののことで御座るか?』

『いや、それもさうぢやが、ついさつきまで、小松殿の公達がお越しにならぬので何うなされたことかと皆案じ申した。』

『しかし今は、もはやおつきになられたので御座りまするか?』



『淀の六田河原で、やつと追ひつかれた——それにしても三位中將どのは、心強うも北の方を京にとめられたさうで御座るな?』

『京へ?』

柏も驚かすにはゐられなかつた。

その時——向うから效々しい端折姿で、髪をも短かく束ねて、急いで此方に近寄つて来た女の氣勢がしたが、それがそのあとを追つて来た越前三位の北の方であるのを知つた時には、その傍に阿波内侍のゐるのを忘れて、柏はいきなりその傍に身を寄せて行つた。二人は眼と眼とを見合せた。

『……………』

『……………』

よう戻つて来て呉れたとも、またやうやう此處まで追ひ付いて来ましたとも言はなかつたけれども——否、互に一言も言はなかつたけれども、二人の手は手に、顔は顔に、眼からは一杯に涙が漲つてほろほろと落ちた。

『柏!』

かう北の方の言つたのはそれから猶ほ暫く経つてからのことであつた。氣が附くと、阿波内侍の姿はもはやいつかそこにはゐなかつた。

『それでもよう来てたもうたな! 母者がよう出して呉れた!』

さう言ふ北の方の言葉も涙に凝へられ勝ちであつた。

『さぞ、母者は別れを惜しんだであらうな?』

『そのやうなことは仰せられては下さるな……。いくら母が別れを惜しみ申したればとて、お供をせずには居られませぬこの身であるほどに——』

『柏! そちの芳心は忘れぬぞ!』

北の方は衣の袖を眼に當て、『この身達は何うなつて了ふやらわからぬのに——。誰とてゆく末頼もしう思ふものはこの中にはひとりとてもないのに——』

『そのやうなことを仰せらるゝな……。却つて悲しうなりまするほどに——』かう言つたが、急に柏は思附いたといふやうに、『それにしても、此處に暫し留つて合戦にても致さるゝにや——』

『そのやうなことはあるまじ』

『しかし途中にては専らさういふ噂で御座りましたれど?』

『そのやうなことはあるまじ……』北の方はそのことについて何か言はうとしたが、それは言はずに『まア、此方に來やれ!』

かう言つて北の方は柏をそのまゝ奥の方へと伴れて行つた。柏はそこでいろいろな人達、かねて平生



知り合つてゐる人達、しかも生きて俱にかういふ眼に逢はうとは夢にも思はなかつた人達に逢つた。資盛の北の方も有盛や教盛の北の方も皆なそこゐた。しかもいづれも多くは眼を大きく見開いてあたりを振りかへつて見でもするやうに、または悪夢におそはれて一刻も早くそのさめるのを待ちでもするかのやうに、慌てふためいてまごまごしてゐるのを柏は見た。それに乳母の身であとを追つて来たといふことも皆なを驚かさずには置かなかつた。

『まア、よくもどつておじやつた!』とか、『越前三位の北の方は好い乳母を持たれた』とか、『この方の侍女はひとりだつて戻つて来るものはないのに』とかいふ言葉が一しきりにそのあたりに満ちた。否、そればかりではなかつた。人の心といふものはかういふ時にわかるものだといふことがまたしても繰返してそこに持ち出されて来た。

それにしても、三位中將どのは、何うして北の方や幼きものを京に残して来られたのか? あの北の方は越前三位の北の方と竝んで、多い平家の北の方の中でもことに美しいのできこえてゐたのに……。それは今は子を多く持たれて以前のやうなことはなくなつたけれども、それでも猶ほ光り輝く美しい女性のひりであつたのに、何故に、三位中將は心強くもそれをあとに残して来られたのか? 何故越前三位と同じく、離れぬ鴛鴦のやうにひとつに俱しては来なかつたか。さつきその話——幼きものが慕ひついて何うしても離れないので、そのために退京することがおそくなつたといふ話が互にその間に取交さ

れた時には、誰も涙をさそはずには置かなかつたが、またしてもその話が盡きずに其處に繰返されて語られたのであつた。それにしても何といふ不運がかれ等平家の上を見舞つて来たことだらう? これがあの榮華の酬ひか。上御一人をもないがしろにして威權を振つたその酬ひか。否、平家とて、決してさう我意を振舞つたばかりではなかつた。帝のためにも民のためにも盡した。院にも深い縁を結ばれてゐた。それであるのに——否、さつき、この關戸の院に御輿を据ゑた時、そこから淀の川瀬を隔て、すぐ近くに見わたさるゝ古城址のやうな形をした男山八幡を仰いで、平大納言時忠の卿が『南無歸命頂禮、八幡大菩薩、願はくは君を始めまるらせて、我等をも今一度故郷に歸し入れ給へ』と遙かに拍手して祈念せられたことが更に繰返して此處で話し出された。

『それで、そなたの參つた時には、京にはもはや兵どもが入つて来て居つたか?』

北の方はかう言つて柏に訊いた。

『いまだそのやうな氣勢は露ござりませぬでした——』

『しかし、火の手は上り居つたらう?』

『火の手は三ヶ所、四ヶ所にも颯つてをりました。城南離宮から淀のあたりまでは軍兵で充たされて、とても通ることが出来ませぬので弟國道を通つて辛うじて此方へと出て參りました——』

『一合戦もせず、京を見捨てるとは、何といふ腑甲斐なきことやら——』中でも年を取つてゐる男



まさりの教盛の妻は、またしてもかう言つて、さも無念さうに切齒した。一座は白けたやうに皆な黙つて了つた。しかし何うする事も出来なかつた。

暫くしてから柏は越前三位の北の方を伴れて、そこから此方の方へと出て來た。

『殿は？』

柏は訊いた。

『京を立つてから、この身はまだよう逢はずにゐる——』

『何處にお出でになるやら、それも御存じありませんか？』

『さつき、淀から此方にまゐる時に、その手の者と近うなつて、馬上の御姿だけはちらと見るには見たけれども、ぢきに混雜した軍兵の中に見えずなつて——きつと今では河原から水無瀬宮の方へ參つてゐるであらう——さつき本三位中將が笑うてさう言うて居られたゆゑ……』

『さう申せば、本三位どのも北の方を京に残されたといふでは御座らぬか？』

『さう申してをられた……。何うしてあゝ男は心強いやら——』

『まことに——』乳母の柏はさう言つて北の方の顔をじつと眺めた。主従ではあるけれども、幼い時から幼くんで來てゐるので、腹を痛めた娘にもましてなつかしくも可愛ゆくも思ふのであつた。柏の頭には安元の春の頃、北の方がまだ十六ぐらゐるであられた頃のことをそれとなしに思ひ出されて來た。國

母の法勝寺の花見の御幸に、その頃まだ中宮亮であつた通盛の卿に初めて見染められて、それからかうした縁が結ばれて行つたことなども思ひ起されて來た。あの頃の美しかつたことは！ 國母に侍いた女房達の中にもこの北の方ほど光りあるものはついぞなかつた！ 否、國母のお指しがねで、つひにはその通盛の卿とつまと呼ばれ妻と呼ぶるゝ仲となつて、誰れからもその鴛鴦のつがひの美しさをめであられぬことはなかつたのに……。世が世ならば今も猶ほ光り輝いて、何ひとつ不自由なものとはなかつたのであらうのに、有爲變遷は世の習とは言ひながら、小松殿の亡くなられてから、福原の都うつし、入道どのの熱の病、つゞいてその死、それから掌を反すやうに世は變つて、三位中將が北國の礪波山に敗れたといふのはまだつい此間の菖蒲茸頃であつたと思ふに、忽にして源氏の勃興、三月の後にはもはやこのなつかしい都にも留ることは出来ずに一族かうして行方も知らずに落ちて行かねばならぬとは！ 深い思ひに捉へられた柏の頭にも、維盛卿の北の方や、重衡卿の北の方に比べて、子といふ足手まといのないために何處までもかうして一緒に落ちて行かれる北の方をせめてもの幸ひとは思つたけれども、しかもこれから何處に行くやら——何處の里に落着くやら、海の唯中にも浮ばなければならず、こごしい山の中にも隠れなければならぬと思ふと、かうして一族と運命を俱にして何處までも落ちて行くといふことも、決して頼りあることとは思はれなかつたけれども、しかも、柏に取つては、兎にも角にも北の方に追附いたといふことは、深い喜びであらねばならなかつた。かれ等は別に言葉を交はすこ



ともなしに、互ひに顔を見合せて、長く相對してゐた。その前の道を腹巻姿の侍や馬に乗つた武士などが間斷なしに通つて行つた。河岸には舟も澤山に集つて來てゐるらしかつた。

## 六

山崎の關戸の院にも平家の一族は長く留つてゐることは出来なかつた。京から敵は押寄せて來ないにしても、一刻もその川尻を向うに出て行つて了はなければ、河内の源氏がいつ後に廻つて、それを遮るかも知れないといふおそれがあつた。まごまごしてゐて後を遮ぎられては、それこそ何うにもならなかつた。一族は舟と車とにわかれて、兎に角此處から福原へと向ふことになつた。

出發しようとしてその仕度をしてゐると、そこに鎧直垂を着て金拵への太刀を佩いた越前三位通盛がひよつくり姿をあらはして、勢よく馬から下りて、その手綱を口取の雜卒へわたしたが、いかにも一方の大將らしい勇ましい態度で、そのまゝ此方へと近寄つて來た。

『殿！』

それを見ると、柏はかう言つていきなり傍へと歩み寄つた。

『お！ 柏！ そなたが來て賜つたか？ お！ それで安堵した！』通盛はいかにも嬉しさうに、『それにしてはいつ來てくれた？』

『もう少し前で御座いました』北の方は微笑を含んで夫の顔を打仰ぎながら、『この身も柏が來てくれたので、何れほど安堵いたしたかわかりませぬ——』

『それは好かつた。そなたが來てゐて呉れば、もはや少しも案ずることはない。この身はひとりで困つてをりはせぬかと思つて、それでわざわざ見に來たのぢやが——？』通盛はすぐ言葉をつゞけて、『それにしても、そなた達は何うしをる？ 舟で行くことにしたか？ 車で行くことにしたか？』

『何方が宜しう御座りませう。國母さまのあとをついて車で參らうと存じて居りましたなれど——』  
『いや、いや、女子や老いたものは舟で行く方が好い。舟で行け！ 舟で行け！』かう言つたが、もう少しゆつくり語り合ひたいと思つたが、その時御輿が既に動き出して、それに従つた高貴の人達が馬に、糸毛車に、或は網代車に乗り出したのを眼にして、さうしてはゐられないといふやうに通盛は慌たゞしく馬引寄せて乗つた。

『よいか、それでは舟で——』

通盛はかう言つて、會釋して、鞭を馬に當てた。走り出した馬のあとから口取の雜卒が空脛で走つた。

關戸の院から河岸まではいくらもなかつた。だからと少し下りて、一田圃向うに越すと、男山八幡の丘陵のしげみが高く眼の前に聳えて、その下には木津、桂の二つの流れを入れてから夥しく水量の増した淀川の流れが、大小無數の船舶を一面に浮べて、水面も見えぬぐらるに舳や船尾や屋形の幾流とも



なきしるしの小旗がヒラヒラと河風に一面に靡いてゐるのが、否、こつちからその河岸へと下りて行く一條の路には糸毛車や網代車や女達を護衛する侍の乗つた馬が一杯になつて、黄い埃塵がぱつと颯つて、その中を壺装束をした女達が先を争ふやうに、まごまごしてあとに取残されては大變だといふやうに急いで岸に赴いてゐるのが手に取るやうに見えた。それに、御輿が出發したといふ聲がそこにも此處にも傳はると同時に、林のかけに休んでゐた馬も、河岸の土手の下に噂踞んでゐた雑卒も、赤い大旗を持つた旗手も、何も彼も、すべて皆な一齊に動き出した。河岸でも、岸から走つて来る女達を辛うじて收容して、一隻一隻纜を解いて船は出發して行つた。誰も心を動かさないものはなかつた。また誰も涙を流さないものはなかつた。一度此處を出て行つて了つては——京の南の守護神として朝暮に仰がぬもののないこの男山八幡の丘陵のしけみをすら跡にしては、再びいつ此處に戻つて來ることが出来るであらうか。いつ再び此處に來てこの古城壁のやうな丘を仰ぐことが出来るであらうか。いづれもひたと塞がれた胸を抱いて溶々としてひろい海の中に落ちて行く大河の水と同じやうな運命を俱にしなければならぬことを悲しまずにはゐられなかつた。

越前三位の北の方の選んだ船は、多くそこに集つて來てゐた屋形船の中でも、ことに一番大きく、最後まで取残された女達を收容するためそこに留つて繋がれてあつたが、それもやがて數挺の艦を立てて、ギイギイ音をあとに残しながらその河岸を立つて來た。あとには黄い埃塵の颯つた一條の路ばかり

がさびしく残つた。

否、少し此方以來、男山八幡の丘のしけみの中にほの見えてゐる社の屋根を伏拜みつゝ、その眼を陸の方に移した時には、越前三位の北の方にしても柏にしても時の間に一族の運命のかくまで拙くあはれになつたことを嘆かすにはゐられなかつた。かれ等は河から半里とは隔たらない街道に、勇ましけもない軍兵に前後を護られながら、黄い埃塵に包まれるやうになつて、徐かに御輿の動いて行つてゐるのを見て、ひたとその胸の塞がるのを覺えた。

## 七

柏にも越前三位の北の方にも非常に長い歳月が經つたやうな思ひがした。それにしても何といふ光景の變遷であつたらう。また何と言ふ艱難な長い旅路であつたらう。かの女達はほつと呼吸を吐くひまもなしに、それからそれへと、海から陸へ陸から海へとやつて來たことを思ひかへした。艦權の音が波の音に雜つて今も絶えずその耳元にあるばかりではなく、或は眞赤な大きな夕日が島と島との間に落ち、または夜更けて月がさびしく御座船の上に浮び上り、時にはまた終夜風雨が降頻つて、眠るところか生きた空すらもないやうな光景がいくつとなく重なり合つて、はては何れが何れかわからないといふやうな慌たしい混雜の中を辛うじてかれ等は通つて來たことを思ひかへした。それでもよくも此處までや



つて来た。これも神のめぐみでなくて何であらう。此處までやつて来たことだけでも、神はまだ平家の上にあるといふことが證據立てられるやうな氣がした。

かの女達は福原の舊里を思ひ起した。入道相國のまだ生きてゐられる頃に本三位中將や三位中將の一族の人達と共に夫に伴れられてそこにやつて来たことはまだ昨日と思はれるのに、いつの間にかその新しい都は荒れて、鶯鴛の瓦も碎け、玉の石疊も草に埋れて、葎すら旨いた人の眼のやうにびたりと下されてゐるのは胸潰るゝ思ひがしたことを思ひ起した。しかもそこにすらかれ等は留まつてゐることは出来なかつた。大臣殿の悲しい言の葉に誰ひとり袖を濡らさぬものはなかつたけれども——誰ひとり人間として恩を忘るゝものはなかつたけれども、しかも何處までも、日本の外、高麗、新羅、百濟、契丹、雲の果、海の果までも、行幸の御供仕るよしを答へた時には、誰も頼りなきその運命のはかなさに涙を流さぬものはなかつたことを思ひ起した。否、そのあくる日の悲しかつたことは！ 敵の手にわたすのは無念だと言つて、金銀を鑲めたその御所に火を放つたので、その烟はすさまじく山の手に颯つて、兵庫の港に無數に用意されてあつた大きな御座船に帝をはじめ國母も二位尼も乗り移られた後までも、否、越前三位の北の方の乗つた船が須磨の沖近くを漕いで行く頃になつても、まだその黒烟は山際に靡いてゐるのを眼にしたことを思ひ起した。

『ほんに、あれを考へると、涙がすぐ出て来る——』

北の方はかう言つて眼を押へた。

柏は都にある時と比べて、北の方の姿の夥たゞしくやつたのを見遁すことが出来なかつた。無論、それはこの北の方ばかりではなかつた。誰も皆な佗しさに姿を繕ふひまなどはなかつたけれども、日頃美しかつただけに一層それがいぢらしく柏には見えた。夫の通盛は、その身の勤めなければならぬ役目のひまひまには度々やつて来て、何彼と世話を焼いて呉れたけれども、妻を京に残して来た本三位中將や三位中將に對して、何となく氣が置けるやうな形もあつて、さう自由に往つたり來たりすることも出来ないやうな位置にその身を置いてゐた。あれは何處であつたらうか、鞆の津をもとうにあとにして、周防の國に近づいた頃であつたらうか、風雨が夜一夜荒れて、船が離れ離れになつた時、通盛は北の方のことを案じて、何事をも捨て、自分の手のものに命じて、小船をあやつらせて、曉近く島かけに漂つてゐるその船の方へと漕寄せて行つた。柏はそれを見ると、『まア！ 殿が——』と言つて一番先きに頭を擡げた。しかも屋形になつた船の中にも雨はすさまじく吹込んで、身の置きどころもないまでにあたりはひたぬれに濡れそぼち、戸の隅の方に身を寄せて、小さくなつてゐる北の方の長い黒髪も、重ねた衣も何も彼もひた濡に佗しけにぬれてゐるのを通盛は目にした。かれはかうした慘めさを見せるほどならば、別れはつらくとも——身を切らるゝほど別れはつらくとも、かうして此處まで引き具して來るのではなかつた。三位中將や本三位中將のやうに京に残して來るのだつた。通盛はしかしそれを口に



出しては言はなかつた。かれはそのまゝ此方の船に乗移つて来て何彼と慰めた。

否、そればかりではなかつた。通盛に取つては、北の方の美しいかよい姿が、さういふ風に荒々しい自然と人情との中に曝されてゐるのを見てゐるのがたまらなくつらかつた。かれは妻を京に残して来た人達のつらさ以上のつらさをさへ感じた。眼の前には忘れたも居られやうが、雨に打たれ、風に吹かれ、月に照され、また時には軍馬の塵に塗れ、雑卒のあなどりに逢ふのを見るのは、若い夫の心には何とも言はれない悲しさであつた。ある時、かれは堪へかねて、たうとうそれを持ち出すと、北の方は軽く頭を振つてそれを否定した。何んなにつらくとも、何んなに惨めな眼に逢はうとも、また何んなに雑卒のあなどりに逢はうとも、兎に角かうしてあなたの近くになることが幸福だ！といふ意味の態度をかの女は示した。

しかしかれ等の通つて行つた旅路は京で想像したやうなものではなかつた。艱難が、辛勞が、苦痛が絶えずやつて来た。歌枕で知つた波の音とは似てもつかないやうなさまじい荒波が押寄せて来るかと思ふと、心から深い悲哀を誘はすに置かない月代が魂か何ぞのやうに頼りなく蒼白く御座船の上へと落ちかゝつた。何處まで行つても都のやうな賑かなところはなく、海布疋り干す漁村ばかりが連つて、たまさかに来る土地の豪族などと言つても、卑しい姿をしたもののみが佗しくかれ等の眼に觸れた。詩歌管絃の御遊、龍頭鶴首の船、厚く襲ねた打出衣、はなやかに花見へと出かけて行く糸毛車、はし鷹を手

に据ゑて狩に行く若い公達——さうした光景は今は一場の夢としてかれ等の上に残つてゐるばかりで、何處にもその面影をすら見出すことは出来なかつた。濱から濱へ、島から島へとその船路は進んで行つても、そのなつかしい都は遠くこそなれ、近くなるよすがもないと思へば、朝夕の涙はかれ等の袖を濡ほはさすには置かなかつた。

『この身などは何うなつても……それよりもおん上が、あのいたいたしい常にも病ひ勝なる后の宮が——』何ぞと言ふと北の方達はかう言つて涙を灑いだ。中でも教盛の北の方などは、餘りに大臣殿や三位中將の腑甲斐なさを罵つて、かうした運命に陥られたその身を慨くけれど、さりとしてそれを何うすることも出来なかつた。大小何隻となく連つた船は、或は朝霧の中を、或は薄暮に月の光を雜ぜた銀のやうな空氣の中を、または暗い海の上をさながら魔の船でもあるかのやうに靜かに滑つて行つた。

ある島蔭に碇を下した時、月が明るいので、おそくまで絃のところ北の方が立つてゐると、そこにそつと音もなく小舟を寄せて来たものがあつた。見ると、それは小松殿の三男左の中將清經であつた。

『誰かと思ふたら、左の中將どの……』

越前三位の北の方はかねて親しくしてゐる身のそのまゝ、かれをその舟の中に迎へ入れた。

清經は中將ではあるけれども、何方かと言へば雅びやかな公達で、横笛や朗吟にかけては他に及ぶものもないほど巧みであるのを誰も皆なよく知つてゐた。年はまだ若いので、北の方といふのはなかつた



けれども、そこにも此處にも忍びに通ふところはあつて、女達の中にもその名は高く知られてゐた。

『越前三位どのは？』

『御座船に催しにてもあることにや、未だに戻つて御座りませぬ』

『つい、さつきそこらに居られたが——』清経はかう言つて空を仰ぐやうにして、

『これを歌枕で見るのであつたら——？』

『まことに——』

『さうしたなら、この月も何んなに楽しく嬉しいであらうに——しかし、いかにしてもはや再びとは京に戻ることは出来ぬのか——』

『しかし、そのやうなことはあらぬとか言ふでは御座りませぬか。九州にまゐれば、味方に附くのも澤山御座るとか？』

『さうも言ふものもあれど、果してまことで御座るか何うか。一説では九州では却つて味方になるものは御座るまいとのことであるが——』

そこにまた小舟の櫂の氣勢がして通盛はやつて來た。

『お！ 清経どのか？』

『越前三位どのか？』

『好い月では御座らぬか？』

『されば今もあまりにさやかなのに、寝るのも惜しう、ついうかれ出て、此處までやつて參つたので御座るが——今も、北の方にも話したところで御座るが、これが歌枕で見た月ならば——都のつとに、これに越したものは無いで御座らうに……と申してゐたところで……』

『ほんに……』通盛は點頭いて見せたが、『しかしその事はいく度言つたとても甲斐はない。それよりも一度京にもどる手立をこそすべきでは御座らぬか。噂によれば、木曾が餘りに無禮を働くので、院も困り居らるゝといふ話でござるな。京もさういつまでも平穩ではあるまいとのこと……。それよりも清経どの、今宵は久し振で横笛をきかせては呉れぬか？』

悲しい一族の運命などにさういつまで拘らつてはゐられないといふ調子で通盛が言ふと、北の方も、その向うにゐる柏も、同じやうに頻りにそれを慫慂した。

幾度か勧められて、清経はやつと常に持つてゐる横笛を取出した。それにしても何といふ美しいまた悲しい場面のひとつであつたらう。月は冴えわたつて水の面に千々に碎け、島の影は黒くはつきりと波の上に連り、そこに一隻、かしこに一隻といふやうに船がゞりしてゐて、帝をはじめ國母を乗せた大きな船もその近くに指されてゐるのに、その嚙喰とした笛の音は、時には遠く故郷に離れて來た思ひを吹き、また時にはその悲哀に堪へかねた情を抒べ、微かな響は月にも人の心にも吹き入つて、潯陽江頭の



琵琶の音もこれには如くまじと思はれるばかりの巧みさ！ 始めはさうでもなかつたが、いつの間にか、船といふ船は皆なそれに引入れられて、あたりはしんとして、唯舷に寄せる波の音ばかりがその冴えた調子に雑つてきこえて来るばかりであつた。清経はわれとわれを忘れたもののやうにその身を舷に寄せて頻りにその横へた笛を吹いた。

その夜を始めにして、清経はよく越前三位の許へと遊びにやつて来たが、次第に北の方にも種々なことがわかつて来た。清経の戻つて行つたあとで、北の方は柏に『あの太納言頼正どの、三番目の姫をそちは知つてをるか？』などと訊いた。と、柏は柏で『存じてをりまするところか、北の方も御存じであらせらるゝ筈で御座るが、國母のところには二三度も参らせた筈で御座るが——さア、さやうで御座るな。美しい方で御座る。何と？ それが北の方に似てをらるゝと？ さア、さう申せば、似てゐることも申されませんか？』柏は笑つてあらためて北の方の顔を見て、『たしかにさう申せば、似てゐらるゝ。それはとても北の方の十六七の頃とは美しさは比べものにはならぬで御座らうが、眉のあたり、額のあたりはよう似て居らるゝ。それをあの左の中將どのがさう仰せらるゝで御座るか、まア、それは呆れた。その戀人であつた姫が北の方にそつくりぢやと言ふので、それで他人とは思へぬと言はるゝか？ 呆れたものだ？』柏は口には似合はず軽く笑つて見せた。

七月の二十五日に京を落ちた一行は、彼方に滞り此方に滞りして八月の月のなくなる頃、海が荒れて

艦權も取ることも出来ぬやうな目に度々逢つた後に、やつとの思ひで九州の土を踏むことが出来たのであつた。しかも田舎は牛車の類も少く、女房達ですら行賸のあるものはそれをつけ、ないものは、布の端を切つてかよはい白い脚にぐるぐると巻きつけたりして、馴れぬ山路を二日も三日も歩いて、やつとのことで、昔の太宰府の廳——今はそのあと何も彼もすたれて、唯土地の豪族の原田の惟直の邸宅のみになつてゐるところへと行つて、一時そこにその腰を据ゑることとなつた。

しかも、たとへ一時でも、兎に角そこにその地盤を得たといふことは、平家の一族に取つて何れほど力強いことであつたか知れなかつた。中でも女房達はことに喜ばしさうに見えた。『まア、やつとこゝまで——やつとこゝまで。』さうした聲がそこからも此處からも聞えた。かれ等は天満宮の周圍にある宮司の家と言はず、禰宜の家と言はず、小さな百姓の家と言はず、皆なそれを借りて一時の住居とした。帝は惟直の邸宅をそのまゝ、行宮にし、大臣殿をはじめ、時忠卿などはそこからさう遠く隔つてゐないところにもその百官の廳を置くことにした。

その周圍を低い山で圍まれてゐるやうな太宰府の土地をかれ等は第二の故郷としてなつかしんだ。かれ等は山のなびき、丘のたゞすまひにもすぐ京の面影を見出した。昔の人々のあとを見出した。荒れはてた昔の府の廳の礎のあたりに萩や薄に雑つて色の濃い桔梗の咲いてゐるのを見出した。謫せられて此處で薨去した北野の天神の邸あとを見出した。



通盛夫妻の住居は、天満宮の方からは離れて、むしろ野に近いところにあつた。さびしい三間の小さな百姓家であつたけれども、それでも戀にもえたあつい二つの心を住まはせるには十分であつた。女性に取つては何と言つても家といふものがなければ安らかなには生きて行けない。かの女は此處に来て、はじめて心強くも此處まで俱にやつて來たことの喜悅を味ふことが出來た。

それに、清經も此處に來てから一層繁くやつて來るやうになつた。通盛がゐるてもゐなくても、かれはそこに來て二時以上も遊んで行つた。次第に北の方にもその心がわかるやうになつた。

しかしそれは通盛にも柏にも言へなかつた。唯かの女ひとりでそれを心の底深く秘めて置かねばならなかつた。それならそれは戀だらうか。否、否、否……。これほど深く夫を思つてゐる心に何うして戀の種などが蒔かれやう。そんなものは蒔かうたつて蒔かれやう筈はないのである。否、蒔かれやう筈がないからこそ——それほどかれ等の仲は濃かであればこそ、一層それがかの女に取つて氣の毒にもあはれにも感じられたのである。一生逢へるか逢へないかわからない戀人の面影をわづかにかの女にもとめて、その戀のつらさをまぎらしてゐる若い公達のはかない心！ それを思ふと、何うのかうのと言ふのではないけれども、情なくばかり取扱つてはゐられないやうな心持が北の方にはし出して來た。

## 八

さうした里内裏とも木の丸殿とも言ひやうのないさびしい行宮を取巻いて、曉の星のやうに散點してゐる京の人達の生活は、あたりの人達の眼を睜らせるに十分であつた。かれ等は色の白い髪の高い美しい人達のそこからも此處からも出て來るのを見た。唐衣を幾枚も襲ねた高貴の人の乗つてゐる車のあとからぞろぞろ弓矢を持つた騎馬の侍のついて行くのを見た。繪の中からぬけ出してでも來たかと思はれるやうな美しい女達がやさしげな若い上品な公達とさも睦じさうに話しながらそこらをのんきさうに歩いてゐるのを見た。尠くともそこらあたりの丘も道も野も、色彩でも急に添へられたかのやうにさまざまの姿で美しく彩られて見えた。

ある日、北の方は清經と二人で長い間野の道を歩いて別れて戻つて來ると、柏は心配さうな顔の表情をして、じつとかの女の顔を眺めた。

『……………』

『……………』

しかも二人とも何一言口から出さなかつた。柏には北の方の心持が飲み込めると共に、北の方にも柏の心がよくわかつた。《そんな心配しなくつても好いのですよ。そんな私ではありませんから》かう北の方の表情は言つた。

丁度それは帝が宇佐への行幸の留守で通盛も宗盛についてそつちへと行つてゐる時であつた。それだ



け柏には一層それが心配になつたのであつた。十日に近い間、清經は一日としてそこにやつて来ないことはなく、来れば笛吹き琴鳴らして、それにも倦めば、草花を探がしに二人していつも野の方へと出かけて行つた。夜は夜で戌の刻近くまでそこで物語りしてゐることが多かつた。

さうかと言つて、柏が案ずるやうに、またはあとに残つた人達が噂に立てるやうに、二人の間には、さうした種類の言葉の一言も交はされたことがあるのではなかつた。お互ひにお互ひの心がわかつてゐるだけ、それだけ何方もそれに觸れようとはしなかつた。何うかすると、二人は長いこと黙つて相對して坐つてゐた。もはやその時には京の楽しい話も出ず、世の佗しく味氣ない話も出なかつた。京に残して来た戀人の話も出なかつた。深い深い溜息ばかりが清經の口から出た。

『これが世の中だといふことがやうやく此身にもわかつて參つた——』  
暫らく押し黙つたあとで清經はこんなことを言つた。

北の方も黙つてゐた。たゞ慰めるやうなことを言つても、それは何の効もないといふことをも、また世の常のなぐさめ言などで容易にまぎれさせられる孤獨ではないことをも、何も彼もかの女はよく知つてゐた。五年前に父の小松殿にわかれた時から、他の公達とは違つて、深く世の中の孤獨を身に染みて感じてゐる性得なので、かうした世の變遷に逢つては、慨きも大きく悲しみもまた深いのを北の方はよく飲み込んでゐた。沈黙はまた續いた。

暫くしてから、

『しかし、これだけは嬉しいと思ひます……。京にゐては、度々逢ふことは出来ても、とてもかうまで深くお話しをすることが出来なかつたのに、いくら艱難に逢つたにしても、かうしてお近づきになることが出来たのは嬉しいと思ひます——』

『しかし、さういふことをいくら繰返しても爲方ありません。京の戀人に逢へるといふわけなし……。さうかと申して……。』暫し言葉をとめて、『……もはや六日の參籠も終りになりたれば、宇佐よりの還幸もほごないこと、思ひます……。』

『……………』

かと思ふと、何の事もなしに樂しげに二人語り合つてゐることもないではなかつた。また時には北の方は琴を持ち出して、柱に凭りかゝつて口に當てゝゐる清經の横笛にその調子を合はせなどした。そこに靜かな秋の日の影がさし込んで、野分にみだれた薄の上に赤い羽をした蜻蛉などが亂れて飛んだ。宇佐に參籠に行つた人達はやがて戻つて来た。かれ等は何となく元氣がなかつた。かれ等は參籠の七日目の曉に、頼もしからぬ夢想のおん告げが大臣殿にあつたことを小聲で話した。然りともと思ふころも蟲の音も弱り果てたる秋の暮かな——武將に似合はず、さうした弱々しい歌で大臣がその神のおん告げに答へたことなどを話した。否、そればかりではなかつた。宇佐に行幸した結果として、かれ等は



今まではつきりと知らなかつた敵が澤山その方面にあることを知つた。その宇佐の宮のある豊後の國は刑部卿三位頼資の國で、その子の頼經が代官として下國してゐるが、京から既に沙汰が達してゐて、平家の一族に對する態度が著しく對抗的になつてゐるのをかれ等は知つた。『何うもそれが苦勞ぢや。さういふ多くの武士を味方にすれば何のことはないのであるけれども、それがさう容易くは行かぬらしいので。しかしそれが敵になるとすれば、原田の力などでは、とてもそれを防ぎとめることは出来ぬので、それが心配ぢや』戻つて來た通盛はかう言つて北の方や柏に話した。

通盛は續いてその宇佐の宮に行く途中のことなどを細かに話してきかせた。山と山との間を行くやうなさびしい路が多いといふことや、大きな峠があつてそこから海が見えたが、それを見た時には、誰も遠くも來たものだといふ氣がして、東を望んで暫しは立留つて涙に暮れぬものはなかつたといふことや、宇佐の宮が神々しくて、その前に行つた時にはおのづから頭が下つたといふことや、帝を抱いて廣前に立たれた國母の美しい姿を見た時には、誰もかうした艱難な不思議な運命に負はせられたことを思つて、袖を涙にぬらさぬものはなかつたといふことなどがそれからそれへと話されて行つた。北の方もそれと聞いた時には思はず袖で顔を掩つた。

しかも太宰府では、さういふ風に心配はしてゐたけれども、表面はさう大して不安らしくも見えなかつた。たとへ豊後の國の人達が敵方になるにしても、それが急に此處に押し寄せて來るとは思へなかつ

た。野は次第に秋長けて、色ある雲が夕の空に靡き、さびしい風がいち早くも研きすまされた後の月の光を吹いた。

十三日の夜は、行宮では公卿達が寄合うて、かたばかりの月見の宴をひらいたが、國母の周圍にも北の方や女房達が集つて夜更くるまでさびしく琴や笛をかき鳴らした。かうした田舎ではそれがせめてもの慰めであつた。誰も皆都を思ひ出さぬものはなかつた。去年の清涼殿の月見の事を思ひ出さぬものはなかつた。垣の外ではさうした悲哀を縫うやうにして蟲の聲が雨のやうに繁く聞えた。

## 九

『何と、盛信どの、北の方が？』

越前三位の北の方はかう言つて眼を睜はるやうにした。

『それも無理はない。あの北の方は昔から本三位中將どのといろいろと噂を立てられた人だから――』

『それで……』

『いや、別に事があつたわけではないが、さういふ噂を専らしてゐたので。』

『それで國盛どのはそれを知つてゐるのですか？』



『いや、知つてはるようが——。何うにもならぬな。何にしても、階級がぐつと違つてゐるぢやな……。何と言つても、此方の言ひ分は通らぬからな』  
かう言ふ通盛のあとについて、

『本當に、あの本三位の中將は色好みで……』かう言つて北の方は眉を蹙めるやうにした。

『さうぢやな』

『北の方を京に残して來られたのも、實はそのためだつたかも知れませんね……。一體、何うしてあの方がそのやうに我儘をなさるのでせう……。平家がかうなつたのも、半ばあの方が意氣地がないためでは御座いませぬか？』

通盛は慨嘆して、

『言ふな、言ふな……。さういふ人達が平家の中にて、本當に戦も何も出來ぬといふのが即ち平家の運命の拙ない證據ぢや。あの人にしても、三位中將にしても、または時忠の卿にしても、女子のことには眼はないが、他には何の爲事も出來ぬのぢや。時忠の卿なども随分聞きにくいことをしてゐるといふ話だ——』

『後の宮さまのところにある女房——』

『さうぢや、さうぢや』

さういふ夫の言葉を聞くにつけても、北の方は現にその身も眼にし、耳にしたりしてゐることをはつきりと眼の前に浮べずにはゐられなかつた。あの中の月の夜の宴などでも、表面はかなしく心細かつたけれども、そのかけでは何んなに見るに忍びないことが起つてゐたか知れなかつたのであつた。

『それはな、無理もないにはないが——かうしたところに落ちて來てゐる身ぢやで、以前のことを思へば、眞面目にしてゐる氣にはなれないのも尤ぢやと思ふが、しかし、平家のことを考へたら、そんなことはして居られぬ筈だ……。今日も知盛どのや行盛どのがさう言うて慨いて御座つた。第一、大臣が丸で何うにもならぬので——』

『本當に——』

『大臣とて、あゝいふ風ではなかつたのぢやが、幼い時には伶俐な方で、もとの入道殿にも望をおかれたものが——』通盛は深く考へるやうにして『これも皆かうなつて行く運命だらう——』

『……………』

北の方も黙つて了つた。

『それに、この太宰府とても落着いてゐられるか何うかわかりはせぬのだからな！』  
それを聞いた北の方は頭を擧げずにはゐられなかつた。

『それは本當で御座りますか？』



『いや、まだ本當のことはわからぬが、何うも緒方が思ふやうにならぬので——それも時忠の卿がもう少し骨を折つて、金を澤山にその方へつかはすやうにすれば好いのだが、何うもそれが出来ない。これから先きのこともある。先きに目當がなうて、金ばかり失うては、それこそ何のやうな眼に逢うかわからぬ。かう言うて少しでも金を出すまいとする。ところが、緒方は味方とは表面はなつて居つても、大蛇の血を引いたといふ、そら、そちも此間きいたであらうが、女が尋ねて行つた時はじめてその姿をあらはしたといふ、その大蛇の血を受けた五代目の男であれば、味方と申しても本當に味方であるやうやうやらわからぬ。何でも國司の鼻豊後の方からも金を取つてをるので、それで二心になつてゐる。ぢやで、今の場合では、先きに金を握らせる方が好いのぢやが、時忠の卿にはさういふ度胸がない——』

『それで今は?』

『まア、そのやうに案ぜずとも好い』北の方の顔色の變つて來てゐるのを見て、『まアさういふ話だといふだけだ。いざと言ふまではそち達は落着いてゐる方が好いのだ。後の宮だとして、まださういふことは御存じないのだに由つて——』

『だと申して——』

『まア、落着いてをれ。いくら痴者ばかりが多いと申しても、むざむざこゝを明渡すやうなこともあるまい——』

『……………』

二人は暫し黙つた。野には稻の黄熟した水田がひろびろと連つて、その向うの林の中に淺く色附いた柞の木が雜つてゐるのが指さされた。林に沿つた道には、後の宮の雜仕らしい女が二人三人徐かに歩いて行つた。

通盛は何か深い考へに落ちたといふやうにじつと空間を見詰めてゐるが、決心したといふやうに、

『それはさうと今日この身はひよんなことを聞いた!』

その聲はいつもと違つて凜としてあたりを響いた。北の方はじつと夫の顔を見詰めたが、急にその顔の緊張して來てゐるのを見落しはしなかつた。

『何う……?』

『そのやうなことはこの身は信ぜぬけれども……』通盛はその緊張した顔の表情を少しも變へずに、

『左の中將は今日も來たか?』

その一語で北の方にはすべていろいろなことがわかつたといふやうに、曇りかけた顔色を晴々させながら、『それが何うしたので御座りますか?』

『いや、この身はそんなことを信じはせぬが、さういふことをちよつと小耳に挾んだゆゑ……』

『何う?』



『この身が宇佐にまるつてゐる間、左の中將が度々此處に來たのを見たが、そなたと何か事でもあるやうにある人が申して居つたほどに——』

『誰がそのやうなことを申しました』北の方の顔には、通盛の顔色の次第に冷靜になつて行くのに引かへて、却つてわるく興奮して行く表情が歴々と指された。

『誰と申すこともないが！』

『本當に、誰がそのやうなことを申したか言つて下され……』

『三位中將も笑つてをられた——』

『おろかな——三位中將がそのやうなことを申されましたか？』北の方は思はず色を作したといふ風で、『この身は三位中將どのには、一度とてもわるい心持を持つたことは御座りませぬのに——。矢張あの方も富士川で水鳥の羽音に遁けてもどらるるやうな方で御座れば——』

『まア、そのやうに言はんでも好い。そなたさへさうした後暗いところさへないと申すならば——』北の方は口惜しいと言はぬばかりに、

『そのやうなことがあつたとお信じなさいましたのか？』

『いや、だからそのやうなことは信ぜぬがと申して居るのだ……』

『しかし、さう思はれたのは、少しでもくやしいと存じます。それは、左の中將どのはよく參られま

した。今日でもいつも來てをられます。しかし、そんなことが爪の垢ほどでも御座りましたでせうか？少しでもさうした跡方が御座りますれば、此身は何のやうな罰とても受けませう。柏にもきいて御覽なさりませ。神かけて、そのやうなことは御座りませぬ……』

『いや、あつたと申すのではない。それはそなたにそんなことのないのはわかつてゐる。しかし、皆にさう申されたのをかくして、この身ひとり心の中に持つて置くといふことも却つて水臭いことでもあり、つらいことでもある……』通盛は打解けたやうにして笑つて、『それで氣をわくしたなら、許して呉れ。……こんな田舎までついて來て賜うたそちに、さういふ疑ひを少しでも持つたのは、この身がわるかつた。それは詫びる——』

『いえ、さうでは御座りませぬ。この身もわるかつたかも知れませぬ。左の中將どのは前から存じて居りますし、御身も仲がおわるいといふではなし、それに、あの方はあゝいふ眞面目な方でさびしくしてゐらつしやいますゆゑ、それでおつきあひしただけで、そのやうなことは露ばかりもないので御座います……』北の方はかう言つて、急に悲しくなつたといふやうに——唯一人と憑む夫にさう言はれたのが悲しかつたばかりでなく、不幸な若い失戀者に一點の汚れもない雪のやうな潔白な心を自由に灑ぎかけることすら出來ないかといふことが堪らなく悲しくつらくなつたといふやうに、袖を顔に當て、よよとばかりに伏し沈んで泣いた。



通盛は慌て、それを扶け起すやうにして、

『もう好い……もうわかつた……この身がわるかつた……』

『いゝえ』

かう言つて北の方は頭を振つて猶ほ深く泣き沈むのであつた。

北の方はさびしい孤獨な清經を目の前に思ひ浮べた。京に置いて來た人に眉目が似てゐると言つて、それによつて微かにその哀愁を慰めようとしてゐるのに、それすら満たして上げることの出來ない身であることを思つた時、一層涙は溢れて流れた。

『もう好い、この身が詫びる……』

『いゝえ……この身もわるう御座いました……。しかし、決してそのやうなことはないので御座りますゆゑ、それはこの身を信じて下され。柏もよく存じて居りますから、柏にもきいて下され——』

北の方には後の宮のもとにとめてゐた時の方が今更に悲しくはつきりと思ひ出されて來るのであつた。かの女は法勝寺の行啓を思ひ出した。出し車がいくつとなく連つて續いて行つてゐた時のこと、山門に近く花が雲か雪かとばかりに咲亂れてゐたことを。麗かな春日が平家の公達の乗馬姿を照してゐたことを。鶯が好い聲で啼いてゐたことを。世の春は今だといふやうに平家の人達の時めいてゐた時のことを思ひ出した。後の宮にそれと言はれて顔を火のやうにはてらした時のことを思ひ出した。父

母をすら棄て、此處までやつて來た身は、他に頼む蔭とてもないのに、その唯一の頼みであり力である夫にすら疑はれてはと思つた時に、かの女は一層深い悲哀に沈まずにはゐられなかつた。

## 10

そんなことのおつたのを知らないので——否、通盛も北の方の貞淑なのを信じて強めて清經の出たり入つたりすることをとゞめもせず、世の人が何と言はうと氣にも留めないといふ風にしてゐたので、別に以前と變つたこともなしに、清經はよくその林に添つた小さやかな家へとやつて來た。琴や笛などをよく合せた。

ところが、ある日、いつものやうにそこに出かけて行くと、丁度通盛と北の方とは、二人つれ立つて府の址の方へあそびに行つたと言つて柏がひとりそこに留守を守つてゐるのを清經は眼にした。清經はいくらか失望したといふやうに、さりとてその跡を追うて出かけて行かうともせず、縁に腰をかけたまゝ、垣に近く咲いてゐる色ある菊をじつと眺めた。柏の眼にも此頃北の方に靡いて來てゐる清經の戀心の日に増して一層濃やかになつて來てゐるののはつきりと映つて見えた。

清經は歸つて行くでもなく、立上るでもなく、暫しはぼんやりと喪心したものゝやうにあたりを眺めてゐるが、急に、



『柏どの、このごろ何か變なことは御座りはせぬか？』

『え……？』

向うに行かうとした柏は振返つてかう訊き返した。

『通盛どのが何か變に思つてゐるやうなことは？』

『いゝえ』

柏は頭を振つた。

『何かこの身のことについて、小宰相どのに言つたやうなことは御座りはせぬか、何うか？』

『そのやうなことは？』

『御座つたらうが？』

じつと見詰められた顔を柏はわざとそのままにして、

『いゝえ』

『さやうかな？』清經はじつと一ところを見詰めてゐるが、『一體この身が此處にまゐるのがよろしくないので御座らうな？』

『そのやうなことは御座りませぬ』

『柏どの、本當のことを言つて賜れ、もし、いけないやうだつたら、いつでも來ぬやうにするほどに

……？』

『そのやうなことは御座りませぬと言つのに——』

柏はわざと強く笑ひかけるやうにして言つた。

『あたりで、いろいろなことを申すで、それが氣になつて、もしや小宰相どのに迷惑をかけてはと存じて……』

『そのやうな御心づかひは——』

清經はそのまゝ黙つて、縁の柱に頭をもたらせながら、眼を閉ぢて暫く無言であるが、

『通盛どのは仕合せぢや』

『……』

『小宰相どのも仕合せぢや……』ひとり語のやうに重ねて言つたが、『好いめをとぢやのう？ 柏どの。平家の人達は多いけれども、このめをとのやうに、仲の好いものは御座らぬのう……。さればこそ親をも置いて、此處まで夫について御座つたのぢや。火の中水の中でも離れずについて御座つたぢや。それから思ふと、本三位の中將でも、三位の中將でもさうまで深く北の方には思はれては御座らぬで……』

『あれは、しかし、お子達もおありなさるほどに——』

『さう申せば、かういふ話も御座る。本當に深く思ひ合つたものには、子供もないと……』



『そのやうなことは御座りませうまい』柏はいくらか笑ひかけた。

『いや、本當ぢや……。昔からさう申して居るぢやな……。子供といふものが出来れば、もはや膠のやうに二人ついてはをらぬといふで——』

『まア、あのやうなことを——』

柏はたうとう身を崩すやうにして笑つた。

しかし清經は眞面目で『本當にさうぢや……。それを思ふと……。』暫し考へに耽つてゐたが、悪魔のやうな不思議な笑ひを唇のあたりに漂はして、『このやうなことをいくら言つても詮ない。歸らうか?』かう言つて清經は身を起しかけた。

『まア、宜しいでは御座りませぬか? もう戻つて参りまするで——』

『いや——』

かう言つて歩き出さうとするところへ、向うの方から睦まじさうに通盛夫妻が竝んで話しながら戻つて來た。北の方の手には黄菊白菊が手折られて持たれてあつた。

『おや、もう歸つて御座つた!』

柏はそれを迎へに下に下りた。

清經は歸らうとした足を再び縁の柱のところへ戻したが、しかしその顔は面のやうに冷たく且つ動か

なかつた。睦まじさうに二人竝んで歩いて來るさまをかれはじつと見詰めた。

『ヤ、これは?』

『まア』

夫妻はかう言つて共に聲をかけた。北の方は一層親しげに、『もはや久しい前からお待ちでしたか?』

『いゝえ、それほどでも……』柏が傍から言つた。

『まア、お上りなさりませ!』

『まア、上り給へ』

夫妻はかう言つてかれを請じた。しかし清經はいつものやうに柔かな態度ではなかつた。深く引入れられるといふ形で、妬ましくもあれば羨しくもある、しかし今では何うも出来ないといふ態度で、じつと二人のさまを眺めた。清經の眼の前には、昨夜も、またその三日前の夜も、かれが夜深くこつそりとこの二人の戀の圓やかな小やかな家の周圍を何遍も何遍もぐるぐると廻つて歩いたことが浮んだ。何うしてさういふことをしたか。さういふ痴者のするやうな汚ない業をしたか。それは自分自身にもよくわからなかつたけれども、大きなある力に引きづられるやうにして、自分の家から此方へとひとり手にとつて來たことをかれはくり返した。

(しかしそれが何うなるものか? 痴者めが——)清經はかう自分で自分を強く罵つた。かれはもう



一度じつと陸じさうそこに竝んで坐つてゐる二人を見詰めた。

『何うかなすつた——?』

北の方は莞爾しながら言つた。

『別に——』

『でも、いつもと違つてゐるから、何うかなすつたかと思つて——』

『何處か違つてゐますか?』

『さういふ氣がしたのですけれども……』北の方も笑つた。通盛も笑つた。

清經は體が氷のやうに冷めたくなるのを感じたが、つとめてそれをまぎらすやうにして、『それにしても、府の跡へとやら——あの觀音寺の方へも行かれたのか?』

『あそこまで参りませぬでしたが、野は秋が更けて、靜かな好い心持が致しました——』

『北野の神の居られた邸跡の方へとお出では御座りませぬでしたか——』

『あそこまでは行かなんだ——遠いでな』かう今度は通盛が言つた。

夫の代りに妻が言ひ妻の代りに夫が言ふといふその睦じさが、鋭い針でも刺すやうに痛く清經の身を刺した。かれは戀の痴者の陥る境に益々深く陥つたやうなあさましきを感じた。道理のない横戀慕がかれの心を深く暗くせずには置かなかつた。つい此間までは、この身がやつてゐたのに、あの府の址あたりへも一緒に何遍となくそゞろ歩きをしたことがあるのに、否、あの府の礎の石の草に埋れてゐるのを一つ二つと數へて無邪氣に子供のやうに飛んで歩いたのに、そこに紫の濃やかな目もさめるやうな桔梗が咲いてゐたので、それを探つてかの女のかんざしに挿してやつたのに——、さう思つて來ると、清經はそこにさうしてじつとして坐つてはゐられないやうなつらさを感じた。かれは夫妻や柏の引留めるのを振拂つて、そのまゝ急いで此方へと出て來て了つた。

一一

『さう言へば、この頃、左の中將どのがよく深夜に見廻りに出らるゝといふ噂ぢやがまことか——』

夜の陣を張つてゐる雑兵の一人はかうもう一人の雑兵に言つた。

『まことぢやな……。此間も、そこらを彷徨うて居られたのを見たものがある——』

『萬一の時のことを思つて、さうして居らるゝのか?』

『さういふ話ぢや』

『一説には、さうではないといふことぢやが——? あの越前三位の北の方のもとに通はるゝといふことだが——』

『それは噂だけぢや。あの北の方にはあゝした立派な殿があらるゝのに。そのやうなことがあるわけ



がない。矢張、萬一の時のことを思つて、さうして夜深く廻らるゝに相違ない。何でも緒方の方から、廻しものが澤山入り込んでゐるといふことぢやで——』

『あ、さういへば、そこに、左の中將どのが？』小聲で誰かが言つたので、そこにある雑兵達は皆な小さくなつて聲をひそめた。陣のところにある篝火は小さく赤く燃えて、そこにある樹木やら百姓家やらを照した。

左中將清經は狩衣に太刀を佩いて、供もつれずに靜かにその闇の中を歩いて行つた。別に陣にゐるものに聲をかけるでもなく、そこらに集つてゐる雑兵共に目を呉れるでもなく、靜かな足取りで帝や國母の假りの行宮としてゐる屋敷の傍を通つて、次第に天滿宮の社の方へと歩いて行つた。

こゝから右に折れて行つたところには、假に拵へた小さな家屋や、藁葺の百姓家などが一面に連つて、京都から落ちて來た人達が纔かに雨露を凌ぐばかりにして住んでゐるのであるが、晝間だと、髪を束ね袴をつまみ上げた女房達や、おつくりがわるくはけてはだらになつてゐる顔をしてゐる雑仕や、かうした田舎では見る事も出來ないと思はれるほど氣高い上品な北の方などが慘めにそこらを歩いたりしてゐるのが見え、夜も宵の中だと、琴や笛を合せる音がしたり、男女の物語る氣勢がしたり、結び燈臺がところどころに明るく見えてゐるなりするのであつたが、今はさうした灯もすつかり消えて、起きて目覺めてゐるものは稀にしかないといふ亥の下刻——それでも夜空は晴れて、星は燦爛として、京で見た三

つ星の位置もそれと違はずに艮の方に當つて見えてゐるが、清經はそこをも通り越して、此間の夜もやつて行つたやうに、林に添つた道を靜かに靜かに歩いて行つた。しかもそこは百里を隔てた太宰府ではなしに、ともすればあの京の二條あたりのなつかしい築土でもあるやうに、いつものやうに、押せば戸が音もせず明いて、その向うにぼつかりと灯がひとつ浮き出して、更にその向うにその長い房々した黒髪の中に白い顔と小さな唇とがぼつかり浮んであらはれて來さうにすら思へた。

晝間來た小さな家屋の前でかれは立留つた。そこに垣がある。その垣の下には菊がある。その向うには縁がある。縁の柱がある。そこにかの女がある。京の女に似てゐるかの女がある。あのなつかしい眉！ あの戀しい目！ それもひとりで寝てゐるのではなしに……。ふとかれにはあることが浮んで來た。それは他ではない。晝間かれが言つた言葉であつた。子供が一人その間に出來れば、二人はもはや膠のやうに仲好くあり得ないといふことであつた。かれは堪らなく苦しくなつて來た。心の闇が闇の中に更に深く展げられて來たやうな氣がした。

夜風がそつと林を通つて行つた。

## 一一一

通盛の侍の見田時員が入つて來た。

通盛の妻



「殿！」

「何うした？」

『いろいろな風説が御座りまするが、こゝにも落着いてはゐられなくなるのでは御座らぬかと……？』  
時員は片膝を突いて通盛を見上げるやうにして、『あちこちから参るしらせが皆な頼もしく御座りませぬ』

『それでは緒方は何うしても言ふことを聞かぬと申すか？』

『新三位どのが誘ひにまゐられましても思ふやうにはなりません、むしろあなづられて戻されましたのはまだ昨日と存するのにもはや緒方の兵どもは國境まで攻寄せたさうで御座りまする』

『緒方の息子の惟村が昨日來居つた筈ぢやが、あれは何うした？』

『まだ、取こめて居りまする——』

『あれは何うにもならぬか。時忠の卿が旨く取入れるやうに話しておはしたが、さうも参らぬか！』

『あまり好ましく参らぬやうに御座りまする』

主従は暫し黙つた。通盛は愁色が顔にあらはれるといふやうにして、じつとそこにゐる北の方を見た。かうした田舎まで伴うて來たことが——それも此處に落着いて留つてゐられるならまだ好いけれども、それも出來ずに、何處までも落ちて行かなければならないといふことが、否、そればかりではな

い、知盛や教經などの思はくに對しても、この際女などにのみ拘泥してゐられないといふことが強くかれの心をかき亂した。——戦場にまで女共を伴うて來るといふ法はない。さればこそ三位中將どのも富士川で臆病神に取りつかれたのぢや。北國の戦争もその通り、これではとても源氏と争ふことなどは出來ぬ。いつそのこと、散々に何處へなりとのがれたら何うぢや——昨日の軍會議にも、さうしたことをあの教經が強う言つた。それは實際、その通りだ。この身にも思ひ當る言葉だ。かう思つて通盛は再び北の方の方を見た。

『それで？ 何うなさるので御座る？』

北の方も心配さうに小聲で訊ねた。

『此處にゐられぬとなつては、何うなることやら——』

通盛は獨言のやうに言つたが、しかもかうしてはゐられぬといふやうに、『そちは此處にゐて呉れ！』

また左の中將が來られても困るによつて『かう時員に言つてそのまゝ出て行つた。』

時員も左中將清經のことを好加減知つてゐた。此頃では心もうつろになられてゐるといふことを。蒼い顔をして終日そこらを彷徨つて居られるといふことを。いつかも一度誰もゐないところをやつて來て北の方をひどくこまらせたといふことを。何でもその時には男泣きに泣いて何うにもならなかつたといふことを。しかも北の方は北の方で、『何でもないので……矢張さびしいからで御座いませう』と言つ



てやさしく同情して居られたけれども、通盛の身にしては、それをそのまま放つて見ては居られないといふことを時員は知つてゐた。

そこに柏がやつて來た。

『見田どの』

『……?』

『此處にもゐられなくなるといふのはまことで御座るか?』

『そのやうな噂で御座る……』

『まア、何うしたら好いでせう。今も、御所の方へまるつたら、皆なが大騒ぎをしてをられましたゆゑ、もしや、此方にも何か事でもなければ好いと存じて、参りましたが——殿は?』

『今、陣の方へ』

『それで、何うなるので御座るか? 見田どの。もはや、緒方とやらの兵は山の向うまで参つてをるといふ話で御座るが、まことで御座るか。』

『そのやうな噂ゆゑ、この身も、今、知らせに参つたところで御座るが——』

『何うしたら、好いことやら——』

別に動じようともしない北の方に比べて、柏はわるく身を戦はせるやうにして心配した。それと言ふ

のも、つい今しがたその假御所あたりの混雑した光景を眼にして來たためであらう。柏は女房達がわくわくしてそこに出たり入つたりしてゐるのを見て來た。敵の兵どもが潮のやうに入り込んで來たら、何のやうな目に逢はされるか知れないと言つて頻りに逃支度をして騒いでゐるのを見て來た。そこらにゐる女房達は一人として落着いてゐるものはなかつた。その時には、京から折角此處まで持つて來たものを何も彼もそのまゝ捨て、命だけでも遁れようと誰も思つてゐるらしかつた。かねて知つてゐるある一人の女房は『何うしてこのやうな目に逢うのであらう』と言つて柏を捉えて泣いてゐるのに、ひとりのものは元氣よく『何アに、何うにかなります、そんなに大騒ぎをしないで、こちらにも男や兵が丸でないので御座らぬほどに……』などと言つて平氣であたりを片付けてゐるものなどもあつた。太宰府にも、もはや二月近くの月日を過して、場合に由つてはそこに内裏を造るかも知れぬなどと言はれたほどであつて、さういふ人達の心もいくらかは落着き、萬乗の君と俱にあることなれば、田舎ではあつても、こゝをこそ都と頼めと思つてゐるのであるのに、此處にもゐられずに、再びところ定めずに出て行かなければならないといふことは、誰に取つても悲しい情けないことであらねばならなかつた。

『それで、何ういふのです。此處ももはやすぐ立たねばならぬといふのですか?』

北の方はキツとした調子で時員に訊いた。

『いや、まだ、さうきまつたわけでも御座らねど——』



『あはてすぎてゐるのではないか？』

『さやうで御座る……』見田は言葉を丁寧な『今、すぐと申すわけでは御座りませうまいが——しかし、このまゝ此處に落着くことは出来るやら、何うやら。何と申しても、あてにして參つた緒方が向うにつきましたこと御座れば——』

『しかし、そのやうにあはてることはあるまい……』

『さやうで御座る』

かう言つたが、見田は、ふとあることを思ひ出したやうに、『柏どの、殿はこの身がこゝにあるやうに申されましたが、心にかゝれば、ちよつと行つて参りまするほどに——』と言つてそのまゝ、慌たゞしけに表へと出て行つた。

柏と北の方とは相對して坐つた。二人とも何も言はなかつた。何か言へば言ふほどつらく悲しくなつて来るやうな氣がした。それに、北の方の胸には左中將のことが思ふまいとしても思ひ出されて來るのであつた。さうかと言つてそれを何うしようと言ふのでもなかつた。北の方は此間もいろいろと言つてなだめてやつたことを思ひ起した。清經が此間も思ひ詰めたやうにして、平家の一族の不運であることや、誰も力になるものがないことや、これではとても故郷に歸ることは夢にも思はれないなどと言つたことなどをそれからそれへと思ひ起した。

『本當に、此處に來てまでかういふ眼に逢はうとは思はなかつた——』北の方は溜息をつくやうにして言つた。柏は唯黙つてゐた。

一三

知盛達は頻りに強い説を吐いた。

『京でも、爲すべきことをせずに来たのが落度で御座つた。それは帝のことも御座るが、あのまゝにして、一戦をだにせず、一本の矢をすら射すに、敵に後を見せたと申すことは、平家一族の終生忘るゝことの出来ないあやまちで御座つた……たしかに、京で一戦して、兎にも角にもなるべきであつた……』

『それは言はでもわかつてをることぢや』時忠の卿は向うに黙つて低頭して坐つてゐる宗盛の方を見ながら、『先のことを思へばこそ、耻を忍んで此處まで落ちても參つたのぢや。帝をはじめ、三種の御寶を保護してゐる身には、大事の上にも大事を取らねばならぬ。たとへ、何のやうな恥目を受けようと、三種の御寶が此方にあり、帝や國母と俱にある以上は、國土の臣たるもの、それに對して弓を彎くことは出来ぬのぢや。一の院が四の宮を位に即け奉つたとて、それは何でもないことぢや。三種の御寶なしに位に即くといふことは出来ぬのぢや。』

それをきいて宗盛が頻りに點頭してゐるのを見て、今度は教經が膝を進めた。



『さういふことも御座らうが、それよりも今の焦眉は何うなさる。緒方が向うに廻つた上は、何うすることも出来ぬと言つて、再びこゝを落ちて行かるゝか。』

『落ちて行きたうはなけれど、菊池は來ず、原田の力は足りず、このまゝ此處に居れば、帝も國母も三種の御寶も皆な馬の蹄に蹂躪されなければならぬが、おぬしはそれを拒ぎとめる力があると申すのか?』

『たとへ、力がないまでも、一戦して見るのが武士たるものつとめでは御座るまいか。源太夫判官や攝津判官に對しても恥かしうは御座らぬか?』それは知盛が言つた。

『さういふ勇ましい武士があらば、一戦して見るも好からう』

時忠の卿はいくらかせゝら笑ふやうにして言つた。

『……………』

知盛は何か言はうとして口をもぐもぐさせたが、口惜しさにそのまゝ押黙つて了つた。

『源太夫判官や攝津判官などの刃に合ふ敵ならば、落ちようとは申さぬが、緒方の軍兵は三萬餘騎もあるといふのでは御座らぬか。それに向つて、一戦を試みたところで勝味は御座るまい。それよりも一時はこゝを立退くとも、兵藤次秀遠が山賀の城に立籠れば、そこまでも攻め落さるゝおそれはあるまい。その上にて何のやうにもならばなれ! さやうでは御座らぬか。なう、大臣殿!』

かう大きく時忠の卿は宗盛を呼びかけた。

『それが好いで御座らう? 今となつては、他に——』

宗盛は靜かに言つた。

『しかし、まださう慌てめさるにも及ぶまじ。攝津の判官の手はまだ破れたりともきこえて來ぬほどに、そこからまた好いたよりが來ぬとも限らぬ……』本三位中將重衡はあてにならぬことをあてにするやうにして言つた。

『それでは、援兵を少しなりともさし出す手筈を致すで御座らう』新三位資盛はそのまゝ立つて向うへ行つた。

そこには有盛と國盛も通盛もすべてゐた。それは大きな一室で、向うには安樂寺の屋根が見え、やゝ黄葉した銀杏樹の碧い空に捺されてゐるのが見え、その右の方に天満宮の本社の破風づくりの屋根が少しばかり微かに覗かれるやうに見えてゐた。竈山の上には鳶が靜かに二三羽舞うてゐた。

一座は騒めいてはゐるけれど、しかも何となく幽鬱に且つさびしげに見えた。折角少し落着いたこの太宰府にすら留ることの出來ない拙ない運命を誰とて心の中に慨かないものとはなかつた。時忠の卿すら、菊池にやつた使者の方に萬一を期待して、そこからもが開けて來はしないかと頻りにその方に心を偏らせてゐるが、しかし何處からもさうした好運は竟に、竟にやつて來さうにも思はれなかつた。



『菊池が来るくらゐなら、何も初めから案することはない——』

『本當ぢや』

『始めに菊池にすべてを任せれば好かつたのぢや……。菊池に任せるやうことを申して、そのすぐあとから、緒方に縋るやうにしたので、それでいけなかつた……。何所に行つても、人間の争ひといふものはあるものぢや。それに、原田も菊池とは仲が好うない——』

『かういふ時には、何ごとも都合わるくなるものぢや——』

こんな話がそこゝにきこえてゐたが、その際限のないのを見て取つた經盛は、一族の長者らしく、静かに座から進み出るやうにして、『方々……今はしかしそのやうなことを申してゐる時では御座るまい。とても、こゝが拒けぬとなれば、止むを得ぬことでは御座らぬか。これも一族がかうなる運命と思ひあきらめて、行かねばならぬところへは何處までも行かうでは御座らぬか。京を落ちる時、既にそのことは定めた筈で、そこを落ちるからには何處までも落ちて行く。太宰府はおろか、海をわたつて新羅、契丹のはてまでも帝を保護し奉つて落ちて行く筈では御座らぬか。……此處で滅亡の憂目を見るならば、何も京を落ちて來は爲ざつた。頼むべからざることを頼むからいけぬ。急いで落ちる支度を致さねばならぬ……』かう言つた聲はあたりに響いて聞えた。一座のものは黙つてそれを聞いてゐた。

一四

軍評議のあつた翌々日の辰の刻であつた。陣の方へ行つてゐた通盛は急いで家の方へと戻つて來た。

かれの顔には物に狼狽したさまが歴々と見えてゐた。

北の方は迎へ入れるやうにして、

『何う?』

『もう詮なうなつた……。落ちるより他には——』

通盛は呼吸をはづませてゐる。

『それで、何處まで落ちて參るので御座りますか?』

『それとはつきりわからぬが、原田があるところまで送つて行く筈ぢや。向うには兵藤次秀遠が待つてゐることになつてはゐるが——』

『遠いので御座るか?』

『七里も八里もあるといふことだ。箱崎、香椎、さういふ歌枕の名所をも通つて行くといふ話だ。……』

……柏、柏!』と呼ぶと、そこに柏が慌て、飛び出して來た。

『殿!』



『もはや落ちる支度をせねば、何ういふ眼に逢はうも知れぬぞ！ 其處でも此處でももはや落ちる支度をしてをらぬものはない。柏、そちひとりで大事ないか。小宰相の世話をひとりで引受けて呉れるか？』

『殿は？ 見田は？』

『この身どもは、帝や國母のまもりをせねばならぬ——。それに、つい、そこでさう申して居つた。此方にも何か持つて行かねばならぬものがあるなら、早う纏めて持つて来いと申して居つた。車がないので、北の方はじめ、女房達も皆な歩かねばならぬので、そのつもりして支度をしなければならぬ。』

『車が御座らぬとな？』

北の方が言つた。

『とても、皆な乗るほどの車も馬も何もない。國母と二位どのと、その他おも立つた人達の乗る綱代が五六臺もあつたが、あとは皆な行膝をはいて徒歩より行かねばならぬ——』

『それはまことで御座るか？』

柏も驚いたやうに言つた。

『それではよいか。柏、しつかり頼んだぞ！ 持つて行くものも、早う持つて行くやうに——』通盛はかう言つたまゝ、急いで向うへと出て行つた。

足元から鳥の飛立つやうな騒ぎ——京を落ちて来る時よりも更に一層の惨めさと慌たゞしさをかれ等は感ぜずにはゐられなかつた。昨夜まではまだこれほどでもなかつたのに、一昨日と昨日の晝とは不安に暮れたが、昨夜は何方かと言へば、いくらか落着いて、ことに由れば、このまゝこゝに留まることが出来ぬかも知れないといふ噂さへ立つたのに、何うしてもいけなかつたのか。何うしても此處をも落ちて行かなければならなくなつたのか。しかし今はそんなことを言つてゐる場合ではなかつた。柏はそこのまゝ走つて出て行つたが、すぐ戻つて来た顔色は更に慌たゞしけに、『もう皆な外に出て居られます……。かうしては居られませぬ——』かう言つて急に奥に入つて行くのであつた。

北の方はそつちの方も氣になつたが、持つて行かなければならぬ物を一まとめにしなければならぬので、そのまゝ、そのあとに續いて奥に入つた。物を取したり包んだりする氣勢が慌たゞしくそこにきこえた。

『夜のものだけは、少しでも持つて行かねばならぬさうです。皆な大きな包を拵へてゐられました。……いゝえ。まだ大丈夫です。さうお慌てにならなくとも好う御座います。有盛どのゝ住居のところには荷を載せる車が五六臺置いてありました。山と積まれてありましたが、あの中の一臺が此處にも參るさうですから、それまでに包を外に出して置けば好いといふことで御座いました』柏は夜のものをおおきな包にして、その中に大事のものを深く藏ひなどしながら、矢張慌たゞしけに、『もうすぐそこまで敵の



兵は參つてをるのださうで御座います。よべ、こつそり近寄つて来た——。それを誰も知らなかつた——何といふ不用意なことで御座いませう。しかし、お案じなさいますな。敵はすぐ近くにまるつてはをりますさうで御座りますが、帝や國母さまがをられますので、したいことも出来ず、落ちるのを待つてゐるのださうで御座います。土地のものどもは、本當のことがわかりませぬので、帝について好いか受領どもについて好いかわからないのださうで御座ります。何といふあさましいことで御座いませう……』かう言つて大きな包を柏は縁の方へ押し出した。

『この文笥は？ この鏡臺は？ この小机は？』かう言つて見たところで、何うすることも出来ないで、かれ等は何も彼も皆なそこに置いて行くことにした。そこに女房附きの侍が人足を二人ほどつれてやつて来た。人足はものをも言はず、そこに出してある大きな包三箇を背負つて、すぐ向うの林の道の角のところまで来てゐる一臺の車の方へと持つて行つた。此方の縁で見ると、既に既に山のやうに積まれた車の上に、更に高くそれを載せて、兩方から繩をかけてゐるさまが、いくらか曇りかけた朝の空にそれとくつきり見えてゐた。北の方も柏も何とも言はれない悲しさを感じた。

一片附けすましたあとで、北の方は効々しく壺装束をして、後の宮のゐます方へと御機嫌を伺ふべく出かけた。かの女の眼には何が映つたらう？ そこには京を落ちた時以上の慌たゞしさと慘めさが展けられてありはしなかつたか。夢中になつてわめき廻つてゐる下司達。積んだが上にも猶ほ積み上げようとして持ち寄つて来る澤山の荷物の堆積。ほらほらと裾もあらはに走つて来る女達。そこに立留つて泣いてゐる上臈達。北の方はそこで聲を懸けられ、かここで袂を引かれ、その間を縫つて通つて行くにすら一方ならぬ困難を感じたが、假りの行在所を入つた時には、帝はすでに國母つきの乳母に抱かれて、はし近く出て来て入らせらるゝのを眼にして、はつとしてそのまゝそこに蹲踞つた。

後の宮はちらと北の方の方に眼をとめられたが、

『お、小宰相！』

『おん上——』

かう言つた北の方の眼からははらと涙が流れた。

後の宮はしかも雄々しく、

『もはや、支度は整うたか？』

『……………』

すぐには答も出来ずにゐると、

『早うせねば、間に合はぬぞ——』

『忝なう——』

『早う行つて、出發の支度をせよ。手が足りなくば、侍でもつかはさうか？』



## 『忝なう——』

その他には何の言葉も後の宮から洩れなかつたが、その洩れなかつたといふことが、更に一層の悲哀を北の方に誘つた。北の方は何も言はずに、そのまゝその傍にあつた柱に顔を押し寄せて、したゝかに泣いた。北の方に取つては、女院の凛とした態度が何よりも堪らなく悲しかつたのである。(誰がかういふ眼に逢はせ奉つたのか。いかに宿運が拙かつたとて、一天萬乗の中宮ともあらせらるゝおん方が、帝と俱にかうして田舎の武士に追出さるゝとは——)思はず北の方は身を震はせて泣いた。

暫くして頭を上げた時には、國母は既に表へ出て、そこに寄せられてある古い網代車へと乗らせるゝところであつた。帝は國母づきの乳母と俱に既にその向うの車へと乗らせられてゐた。京にあるほどならば、何のやうな派手やかさも美しさも見られたであらうに、今は——かう思ふと、北の方はまた悲しくなつて、たまらなく涙がせきあけて來た。否、あたりでそれを見送つてゐた女達は、誰とて顔に袖をあてぬものはなかつた。

二つの古い網代車はそれでも靜かに武士達に護られて——護られたと言ふよりも圍まれて、靜かに天満宮への道を反對へ向うへと動いて行つた。あとからは時忠の卿や宗盛の大臣などの馬上姿がつゝいた。狩衣に太刀を佩いた公達の姿も續いた。

少しの間それを見送つてゐた北の方は、いつまでもさうしてはゐられないと思つて、急いで家の方へと戻つて來たが、ふとそこに左中將清經が一人の侍を供につれて、何か言ひ寄りたけに頻りに此方を見てゐるのを見出した。しかし北の方は眼も呉れないやうにして急いで歩いた。あの夜の出來事以來、北の方は最早その人の傍に寄ることをすらすらとめて避けるべく用意してゐたのであつた。林の角のところには、これも矢張壺装束をして、いつでも出發の出來るやうに身支度をした柏が頻りに此方を見て手招ぎしてゐた。

## 一五

それは風に吹立てられる木の葉と言つて好いか、やどるに家なく食ふに食なき漂浪者の群と言つて好いか、それともまた恐ろしい災厄に身も魂も失ひつゝ、わくわくして落ちて行く敗北者の一團と言つて好いか、街道の白い埃の中を、或ひは網代車、或は屋根のなくなつた糸毛車、さうかと思ふと、馬の列が暫し續いて、空脛の雑卒の刀や長刀を持つたのが續いて、そのあとから行跡をつけた女房達や雑仕達の壺装束をしたものもあればないものもあるといふやうなのが續いた。凡そ太宰府にある車といふ車、馬といふ馬は皆な徵發するやうにしたのではあつたけれども、それでも荷物が多く、老若が多く、とても乗物には乗れないといふやうなものゝ方がその十の六七を占めてゐた。武器や、道具を山のやうに積んでガタガタと動いて行く牛車の連續の間をいろいろな姿をした人達が通つて行つた。奴袴を高く褰けて



刀のつかに手を凭せて歩いてゐる侍、烏帽子の揉くちやになつてゐるをも直しめせずに低頭き勝ちに佗しけに歩いてゐる上達部、かうした不運な権力のない一族にいつまでもついてゐなければならぬ身を嘆くやうにして一步步々足を運んでゐる武士、何處まで行つたらやどるべき家があるかそれすらわからなるといふやうにぐつたりと車の傍を歩いてゐる殿上人、それでも中にはしやんとした白青の狩衣に束帯して威儀を正して馬に乗つてゐる大納言や少納言などもをりをり見かけた。

『まア見ろや、綺麗な京のお姫達が歩いて行くぞい』

『よう歩けるな』

『ほんにな……あんなかよはい細い體をして御座つてな……』

街道に添つた庇の低い家々の前には、それを見るためにあちこちから集つて來た田舎の男や女達がこんなことを言つて立つてゐた。

『それで、かういふ人達は何處へ行くぢやな？』

『何でも山賀の城まで行くといふ話ぢや……』

『山賀！ 宗像よりもつと先きの？ あそこまでは十里も十二里もあるぢや御座らぬか。そこまでの姫達が歩いて行かるゝのかな？』

『えらいことぢやな』

『この、原田の殿も、向うの緒方どのが一緒ぢや思つて、この京の人達を伴れておじやつたのだが、緒方どのが向うに廻られては一人では何うにもならぬので、それで山賀の兵藤次どの、方へ送つてやるといふことぢや』

『お氣の毒ぢやな……。歩いたことなどはないで御座らうに……』

『見よ、見よ、お母——』

だしぬけにその中に雜つてゐた鼻涙を垂らした男の兒が言つた。

網代車が三臺四臺まで騎馬に護られて靜かに輾つて來た。流石にそれは秩序正しく前を追うやうにして進んで來てゐた。網代車の簾が半ば上げてあるので、その中に坐つてゐる帝や國母の姿もそれと見え

た。

『見よ、見よ』

また群集の中で誰か言つた。

網代車の兩側には、狩衣に束帯して、胡篋を負ひ、弓を持ち手綱を取つてゐる公卿と殿上人とが蹄の音を立てゝゐた。その三人目の重籐の弓を持つて濃青の狩衣を着てゐるのは通盛であつた。そのあとに資盛が続いた。一群は靜かに動いた。

『見たか？』



『見た！ 見た！』

『御簾が上げてあつたので、よく見えた。あの抱かれてゐたのが帝ぢやな？』

『さうぢや、さうぢや』

『あの抱いてゐたのが國母さまといふおかた？』

『いや、あれぢやあるまい、國母さまは……』肥つた、揉烏帽子をした、田舎でも開けた方らしい男はかう言つて『そのあとの車に乗つてゐられたのが後の宮ぢや。あの美しさで、すぐわかつたでは御座らぬか？』

『それは見ぢやつた！』

その子供の帝にのみ見取れて、否、それを抱いてゐる乳母をそれのみ信じて、その國母を見なかつたのをいかにも残念であるといふやうにその傍にゐる上さんらしい女が言つた。

『それは惜しいことをした。すぐそのつぎの車にゐられたのに——その美しいのですぐわかつたのに——』

もう一人の瘦せた方の男が言ふと、

『惜しかつた、惜しかつた！』その上さんらしい女はかう聲高に叫ぶやうに言つた。

一行は猶續いた。また馬の行列と荷物の牛車とが來た。女房や上臈達もやつて來た。段々あとになれ

ばなるほど下司や雑仕や下人達が來るやうになつた。最後の列を街道の白い埃が包んだ。

水城の門——昔、嵯峨天皇の頃には太宰府の關門として築き上げられたその大きな門を出て、雜餉隈などいふ小さな驛を通つて、博多の海岸に取り廻した石垣、それに添つては通つて來なかつたけれども、しかも殘んの島のぼつゝりと一つ海中に浮んでゐるさまの遠く見え出して來るあたりまで、北の方は柏と一緒に歩いたり、有盛や資盛の北の方達とあとになつたり先になつたりしてやつて來たが、馴れない徒歩にはやがて勞れて、帝や女院の車のあたりを離れまいと努力しつゝ歩いてゐても、いつとはなしに、あとへあとへと後れ勝ちになつた。後にはかの女は何うしても歩けなくなつたといふやうに、そこに一臺通つて行く時忠の卿の北の方達を乗せた絲毛車の端の方に無理やりに頼んで乗せて貰つた。

柏は氣遣はしさうに寄つて來て、

『お苦しくは御座りませぬか？』

『少しは苦しいけれども、歩いてゐるよりは——？』

『それでは、さうなすつてゐらつしやりませ。柏は成るだけ御一緒に歩くやうに致しますほどに——』柏はかう言つたが、あらためて時忠卿の北の方や教盛の北の方などに少々御窮屈で御迷惑ではあらうけれども、その身の北の方をもそこに雜せて貰ふことを頼んだ。教盛の北の方にしても、經盛の北の方にしても、『さやうで御座らうとも、いくらお若いからと言つたとて、徒歩は御無理で御座らう。さア、



いかやうにも——』かう言つて詰まるだけは詰めて呉れたけれども、元から詰め切つてゐる車のこととて、とても樂に乗つてゐるといふわけには行かなかつた。通盛の北の方はひたと押し潰されるやうにして、そこから纒かにその小さな顔を出してゐた。それにバネのない車はしつきりなしにガタガタと動揺した。途の深く穿たれたところにはまつた時などには、細い柱にしつかりとつかまつてゐても、奈落の底か何ぞにその身が落ちて行くやうな氣がした。

柏はまた寄つて來た。

『却つてお歩きになる方がお樂では御座りませぬか?』

『でも——』

『それなら宜しう御座りますけれど』

北の方は首を少し外に出して、

『帝はもはや餘程先きにお出になりましたか?』

『いゝえ、まだそれほど先へはお出にはなりません』

その押詰められるやうにして辛うじてそこに乗つてゐる北の方の眼には、ひろびろとした海が映つたり、ところどころ壊れてゐる石垣が映つたり、模様のあるくたつた鼠色の空と水との間に帆が一つ白く浮んだのが映つたり、港のやうなところに帆檣が澤山並んで船頭の大勢綱を引いてゐたりしたのが映つ

たりしたが、箱崎近く來ると、松原がそこにも此處にも見え出して、今までの街道の白い埃の中とは違つて、美しい繪卷の中にやがて一行を見出すやうになつた。その八幡の社頭——海と松原とを前に華表の奥深くその茅葺の祠を見た時には、帝も後の宮も車から下りて、徐かにその前に行つて跪いて祈念した。もう一度京へ御戻しあるやうに、と。

佗しい悲しい一行にも、あたりの海の美しい眺めは一時の慰めとならないことはなかつた。或は松原の中の下草を敷物の代りにしたり、または濱邊の石に腰打かけたりして、そこに一團、かしこに一團といふやうにしてかれ等は皆な疲れを休めた。林の中に繋がれた馬の嘶く聲が靜かな海の波に響いてきえた。

『難波にもどつて來たやうな氣がする!』

『まことぢやな。そつくりぢやな。あの打出の濱のあたりの眺めに少しも違はぬ』

『さう申せば、この先にも垂水といふところや、芦屋といふ所があるといふことでは御座らぬか?』

『それはなつかしい!』

こんな話がそこでも此處でも起つた。中には用意して來た行厨を早くもそこにひろけたものなどもあった。しかし太宰府から送つて來た原田の兵どもは、こんなところにもいつまでも猶豫ためらつてゐることを許さなかつた。今ではもう重荷になつたこの一行を一刻も早く向うの兵藤次秀遠に渡さなければならな



つた。それに空模様も次第にわるくなりつゝあつた。道程も近いといふことは出来なかつた。かれ等はすぐ出發の用意にかゝつた。

長い行列はまた始つた。馬。刀。網代車。烏帽子。白青の狩衣。荷物を山と積んだ車。行藤をつけて草鞋を穿いた女房達。笠もなしに白い顔をあらはに歩いてゐる雑仕達。さうした混雑した長い行列に、海に長く突き出してゐる松原だの、片側は海で片側は徒崖になつてゐる路だの、茅葺の茶店の前に呆氣に取られたやうにして出て立つて見てゐる主婦の顔だの、疎らに五六軒散ばつてゐる漁村だの、山陰に一本散り残されてある色濃い紅葉だの、藁屋の垣に咲いてゐる黄菊白菊だのが繪卷の中の景物でもあるかのやうに雜り合つた。香椎の宮は古い由緒のある宮ではあつたけれども、箱崎よりはさびて、そこにある綾杉は上から蓋でもするやうにその小さな祠に蔽ひかぶさつた。そこでも帝と後の宮とは車を下りた。此方で見ると、その小さな祠の前で後の宮が乳母の手から帝を抱き取つて、その小さな手を合はせてゐるさまがはつきりと見えた。否帝を乳母に渡してから後も、後の宮は長い間跪いて祈念することを止めなかつた。神功皇后を祀つてゐる祠であるだけ、それだけ身に染みてその威徳に縋らうとされたのであつた。それを見てゐた北の方達は皆泣いた。通盛の北の方も今は堪らないとばかりに歎けつた。『あゝ後の宮のお心だけでも、もう一度は是非とも帝を京におかへし申しあげなければならぬ！ 命にかけて……さうぢや命にかけて』感激に富んでゐる若い武士達は、誰一人さういふ風に思はないものはなかつた。

そこからは丘が右にも左にもあらはれ出して來た。海は見えなくなつたりまた見え出したりした。丘の裾のやうなところを通つて行つた時には、松が並木か何かのやうに連つて、いくらかのぼりになつたり下りになつたりしてゐる間を騎馬に前後を圍まれた網代車が縫ふやうに辿つて動いて行つた。

通盛の北の方は、車に乗つたり、下りて或る間歩いたり、また勞れたと言つては車に乗つたりして辛うじて一行についてやつて來たが、その長い間にも絶えず清經の眼と心とをその身に感ぜずにはゐられなかつた。その眼は現在そこにはなくとも、その見わたしてゐる視線の中にはなくとも、何處かでかの女を見てゐるに相違ないやうな氣がした。否、かの女はつとめてそれを避けてゐたけれども——あの時以來何うにもならなくなつて了つてゐるたけれども、それでもその後姿を見たり、その騎馬の向うにゐるのがそれだ！ と思つたりすると、一種不思議な衝動をその身に感じた。

《思はれてゐるといふことは、そのやうに此方にもひとり手に傳へられて來るものか。この身は何とも思つてはゐらない。戀などといふ心は少しも起つて來てはゐない。この身には通盛どのより他に世には男はない。それであるのに、何うしてかう氣に懸るのか。矢張、向うが思ふてゐるばかりで、曾てさういふ片戀のために、さういふ風に思はれたために、たうとうその思ひが取りついて、その身を亡した女子のことを聞いたことがあるが、それをきいた時には、さればとて、それは理のないことである。あな



たで思つたのを此方で思はなかつたとて、その恨を受けるわけではない。それは片思ひではなかつたのではないか。否、片思ひであつたにしても此方であなたの心を弄ぶやうにしたのではないか。そのため、恨みは受けなければならなくなつたのではないか——。通盛の北の方は、眼の前に小松がくれに海のひろがつてゐるのを眼にしなから、ガタガタと車の夥しく動くのを體には感じながら、(この身は、この身は、そのやうな心を見せたことはない。戀もないのに、あるやうに見せたことはない。さういふ風に男の心を弄んだことはない)かういふ風に考へて、つとめてその面影から脱しようとしたけれども、しかも何の障礙もないさつぱりした心持になることは出来なかつた。

それでも通盛とは箱崎で話し、香椎では、そこでは窮屈だらうからと言つて空いた車をあちこちと探し廻つて呉れたりした。『騎馬ですら勞れるのだから、其方達は大抵ではない。柏はずつと歩き通しか、それは大變だ……』などと言つて劬つて呉れた。その時にも清経は向うの華表の側のところゐるて、じつと此方を見詰めてゐたのをちやんと北の方は知つてゐた。その向うの方には三位中將と國盛の北の方とがさも睦じさうにして話してゐた。

宗像の祠のあたりに來た時には、空模様益々あやしくなつて、西北の風さへすさまじく添つて來た。壺装束をした女達の笠も吹き飛ばされさうになつたばかりでなく、帝を乗せた網代車の御簾すら吹きざられさうに強く襲つた。誰も皆な心を痛めないものはなかつた。

それに、宗像から向うは、丘が益々複雑に入り込んで來てゐて、目當にして來たところに行くのは、何うしても峠をひとつ越さなければならなかつた。時はいつの間にか移つて、申の上刻はとうに過ぎてゐた。

『困つたな?』

『何うした?』

『雨ぢや』

さう言ひながらその雑卒は空を仰いで見て、『今朝から何うもあやしいものぢやとは思つてゐた……』

しかし、向うに行き着くまで持てば、何んなに救かつたのか知れないのに、これはいよいよ雨ぢや……』

『困つたな?』

『それでもこの身達は男だからまだ好いが、この同勢で雨具など用意して來てゐるものはひとりでもあるのかな?』

『皆なぬれ鼠ぢや』

『もう少しぢやのに……。向うの峠を越してからなら、また降られても好いのぢやが、生憎なことぢやな、あ、降つて來た!』

一日降りさうで持ちこたへてゐた雨は、今はもう何うすることも出来なくなつたといふやうに、鼠色



に曇つた空を地にして、白い糸でも亂したやうに盛んに斜に降りつけて来た。

網代車に乗つてゐられる帝や國母ばかりでなく、騎馬の侍も、公卿達も、徒步立ちになつてゐる武士も、女房や雑仕達も、困つたことに思はないものはなかつたけれども、しかも誰も何うすることも出来なかつた。少しばかり用意して来た雨具は、帝や國母の車に、三種の御寶を入れた唐櫃に使用するにすら足りないくらいで、烏帽子も、狩衣も、指貫も、壺装束も、奴袴も、何も彼も降るに任せ濡るゝに任せるより他に術はなかつた。まして風を伴つた雨は益々強くなるばかりであつた。時の間にあらゆるものは皆なひたぬれに濡れそぼちた。

何といふ慘さであつたらう。ついこの春までは宮殿の奥深く、几帳の下にかくれて、詩歌管絃の遊びにのみ戯れ、すさまじき風雨をも鶉の床を亂す野分とばかり思つてゐたのに、またたまさに途でさういふものに逢つても車もあれば雨具もあつて、それほど苦にもならなかつたのに、今は！ このすさまじい吹降りには！ 黒髪も衣もひたと肌につくばかりの土砂降りには！ 上臈や女房達の頬も痛むばかりに打つけるその礫のやうな雨は！ 否、そればかりではなかつた。さうでなくつてさへ凸凹と歩ゆませ難い路は、その夥しい風雨に時の間に壁土か何かのやうに柔かく粘を持つて、ともすれば滑つて轉ぶものも少くはないばかりか、牛車の轍も次第に深く埋めらるゝやうな光景となつた。

峠はやがてやつて来た。樽見といふ字を難波に近い垂水に通はせて、人々はそれとなくなつかしく思

つてやつて来たのに、それとは似てもつかないほどの峻しい難路が、かの玄牝三藏が苦しんだといふ流砂葱嶺の峻もこれには如かじと思はるゝばかりの難路が、そこに横たはつてゐたのであつた。上臈や女房達の足からは血が流れて砂を染め、白い袴の裾は紅になつた。

通盛の北の方は、女車の隅に小さくなつてゐたからまだ好かつたけれども、それでも面を外に向けてはゐられないほどそれほど強く雨が當つた。柏は何うしようもないので、ずぶ濡になつたまゝで、結局その方が氣安いといふやうにしてすたすと歩いた。

峠を越すと、すさまじい響灘が開けて、悪魔でも棲んでゐるはしなないかと思はれるやうな黒雲が絶えずやつて来ては、鼎の沸き返つたやうな海の上に低くその翼を落して行つた。前には波濤の白く砕けた砂濱が遠く開けた。

艱難は更に加はつた。車はともその砂濱の路を通ることは出来なかつた。帝と國母だけを殘して、あとの人達は皆な車から下りた。荷物を載せた車はそのまゝそこに置くこととなつた。峠の下に兵藤次秀遠の兵どもが二三百人も待ち受けてゐたのを見た時には、その心強さは譬へんにもなかつたほどであつたが、その秀遠とそこまで送り届けて来た原田種直とは、平生仲違ひをしてゐる間柄なので、帝と國母とを秀遠の兵どもに渡して了うと、事を俱にするのは厭だと言つて原田の手の者が皆なそこから引返して行くのを目にした時には、始めに引かへて何とも言へない心細さが一行の上を襲つた。何うし



てかれ等はさういふ風に一致しないのであらうか。かれ等が一致して帝のために力を盡して呉れてこそ京に戻る運も向いて来るであらうのに、さういふ風に互に確執して緒方は原田を拒み、原田は兵藤次を拒むといふのは、何といふ浅ましい悲しいことであらうか。これが思ひのまゝにならないこの世だらうか。東國の源氏は皆なひとつ心になつて頼朝のために力を盡してゐるのに、何うしてこの九州の平氏のものどもは、かういふ風に互に軋轢をのみ事としてゐるのだらうか。源氏が榮えて平氏が憂目を見るといふのはさういふ心の違ひからではなからうか。眼の前にまざまざとそれを見た時には、さうした深い失望が誰の胸にも湧き返つた。

しかし今に際して、さういふことをいくら思つたとて爲方がなかつた。兎に角行くところまでは行かなければならぬ身だ。かれ等は、新羅、百濟、高麗、契丹までも行くつもりで出て来た身である。そんなことに拘泥らつてゐるよりも、一番先にこの風雨から、このぬれ鼠になつた寒さから、この歩きにくい砂道から、既に眼の前に迫つて來てゐる夜から免れる手段をしなければならなかつた。幸ひにも芦屋と山賀との間に流れてゐる大きな濱川には、兵藤次の兵共の造つた舟橋がかゝつてゐて、かれ等は命からがらその橋をわたつて、もはやとところどころに灯の微かに見える集落へと入つて行くことが出来た。帝と國母と、それに重立つた公卿達は、それでも兵藤次の山賀の城に入ることが出来たが、あとの大抵な人達は、半ば漁村で魚の腥い臭の鼻を衝くやうな小さな漁師の家にそのすぶ濡になつた身を入

れなければならなかつた。泣くにも泣かれないやうな惨めさがかれ等の周圍にあつた。

それに、帝を兵藤次に渡した上は、もはや責任はないからと言つて、一度後に戻つた原田の兵どもが再び此方へ押寄せて來るといふ流言がそれからそれへと傳へられたので、終日の強行にひたと勞れ果ててゐる身であるには拘らず、通盛や資盛達の武士は、手の者を引具して、峠の此方を守らなければならぬやうな形になつた。柏達はやつと宿所をふり割られて、まアこれで濡れた着物を乾かすことが出来ると思ひながら、それとなしに表に眼をやると、雨の降りしきる薄暮の空氣の中に、見田を伴れて、騎馬であとに戻つて行く通盛の姿が見えたので、柏は飛んで出て、『殿！ 殿！』と聲高く呼んだ。

『お、こゝに居たか』通盛は馬の手綱をゆるめて振返つたが、家の中から慌て、走り出して來た北の方を見て、『えらいことぢやつたのう。それでも無事か？』

『殿は？』

『この身はまだ行かねばならぬ。……今宵は甲冑を解くことは出来まい……。でも、安心して休め……。』かう言つて向うへと馬を走らせて行つた。風雨は猶ほ止まなかつた。波の音は地を撼がすやうにすさまじく聞えた。



山賀の城に落着いたと言つても、それはほんの名だけで、重立つたものだけは城の中に入ることが出来たが、あとは皆な海岸の漁師の家に雜つて住んだ。めづらしい不思議な光景があたりに満ちた。女袴や、裳や、唐衣が鐵色をした漁師の肌や蓬のやうにぼさぼさした女の髪と雜り合ひ、やさしい上品や京音が田舎訛りのわるく尻上りになつた言葉と一緒になつた。海が暴れて船が何隻となく岸の砂の上に引上げられた傍に色の白い女袴を着けた上臈が立つてゐるかと思ふと、疎らな松原の中の道を烏帽子をした男と髪を結び上げた女とが何か話しながら並んで通つて行つたりした。こんなところと思はれるやうな佗しい苦屋から夜は靜かに箏の琴の音が洩れた。

通盛の北の方は常に後の宮になつかしがられてゐたので、よく呼ばれて城の中へと出かけて行つたが、その眼に映つた帝や、後の宮のお座しどころは、決して立派なものではなかつた。かの女はそこを下りて來てから、涙を流しつゝ、そのさまを柏に話した。『勿體ないことだ……。城の中と申せば體裁はよくきこえるけれども、あのやうなところにも上の宮もゐられると思ふと、もう涙が出て、贅澤なことは申し上げられぬ……。京にゐたならば——』と言つて北の方は歎けした。

何でもそこは言ひやうもないやうなところであるといふことであつた。遠くに海は見えるけれども、家のつくりも何も彼も粗末で、わるく黒く煤けてゐて、をりをりは蛇なども出て來るといふことであつた。『とてもこのやうなところには長うは居られぬ。小宰相のゐるところは、浦の苦屋ぢやと言うが、そ

の方が却つて風雅びてゐるて好いではないかななどと後の宮さまも仰せられた……。それを耳にした時には、この身も涙が出て、涙が出て——』かう言つて通盛の北の方はまた新しく出て來る涙を拭つた。

しかしそこにすら安んじてゐられない時はすぐやつて來た。かれ等は半月とそこに落ち着いてはゐられなかつた。緒方と原田とは一つになつて、時を移さずそこに攻め寄せて來た。かれ等は平家に對しては別に宿意は持つてゐなかつたけれども、その國の同じ夥伴なぐさの一人がそれを保護するといふことに對しては、決して黙つてそれを見遁してはゐなかつた。かれ等はじりじりと押寄せて來た。帝を何處かに落してやればよし、さうでなければ攻め落さずには置かないといふやうな態度で押寄せて來た。

峠の上にはそれでもまだ兵藤次の軍兵が集つてゐたけれども、その向うの麓の下には、緒方と原田の兵が既に犇々と押寄せて來てゐた。矢文が日毎に此方へと射てよこされた。それには嚴重に所決が望まれてゐた。何うするか。帝を落すか。それとも平家を助けるか。元來ならば、そんなことを言入れずに、ひた攻めに攻めるのであるけれど、同國の好みに由つて、この旨を申入れる。午の刻までに返事を寄せ。否、今日の夕刻まで待たう。明日になつても、きばとした返事がなくば、否應なしに攻めつけるが、そのつもりで居れ。かうした矢文が絶えず峠にゐる兵藤次の軍兵の中に射られた。

兵藤次にしても、初めの中は、何んの、これしきのことといはぬばかり、その意にもかけないやうに振舞つてゐるが、次第に緒方の兵の増して來るのを見て、そのまゝに投つて置くことは出来なくなつ



た。さうかと言つて、帝のため、平家のためにその一族を犠牲にしても差支ないといふやうな強い意志を持つてはるなかつた。何方かと言へば、原田が世話が出来なくなつたといふので、意地づくでそれを引受けたので、さう深く心を寄せてゐるといふわけでもなかつた。従つて平家の人達はその兵藤次からすらも次第に邪魔者扱ひにされて行くことを感ずるやうになつた。

峠の上には赤い旗が五旒も六旒も立てられてあつた。半日毎に交替して登つて行く平家の公達の騎馬姿が、此方からそれと指さすやうに見えてゐたが——帝にしても、國母にしても、また大臣や時忠の卿にしても、大勢の北の方達にしても、それをのみたよりにして、その峠の上に赤い旗が翻つてゐる中はまだ心丈夫と言つたやうにしてゐるが、そこに來た十二日目には、たうとうその峠の上まですべて緒方の紋を打つた旗で満されて、今日は嫌でも鼎のやうに沸きかへつた荒海に漂はなければならぬ身の上となつて了つたのである。

『それで何處へ？』

『何處と言ふこともないが、柳ヶ浦へ行くといふことぢや……』

『何といふ情ないことぢやらう？ 向うへ、再び向うへ！』

かうした言葉がそれからそれへと傳へられた。

## 一七

それでも兵藤次が骨折つて呉れた効があつて、重立つた人に乗せるための屋形船は七隻も八隻も用意された。中には龍の首のついた大きな船などもあつた。海は荒れてはるたけれども、それでも此間のやうにわるくし<sup>く</sup>けてはるなかつた。山賀から芦屋の沖にかけては、船が大小何十隻となくなつたふたふと浮んでゐるのが手に取るやうに見えた。

峠の上に集まつてゐる緒方の兵どもの眼には、見たくつても容易に見られないやうなめづらしい光景が歴々と映つて見えたに相違なかつた。長い波打際にも大勢女袴をつけた上臈達が集まつてゐるが、何と言つても一番多く雑踏してゐるのは、川に架けた舟橋から少し海の方へと出たところであつた。そこには舟も一番多く集つてゐた。赤い大旗、小旗。白い唐衣や裳。藤色した打衣。烏帽子かけをして弓を持つた侍。胡籬を後に負つた武士。さうかと思ふと、かうした際にも正装を忘れない束帶姿。さうした人達を、そこからそこへと追はれて落着くところもないやうなあさましい人達を、五人十人と乗せて沖の船へと運んで行く小船が、川にゐる中は平らかに、ゆたのためたに浮んでゐるのが、海に出て行くと——波の急に高く打寄せて來るのに出會ふと、忽ちすさまじく上下するのが誰の眼にも映つた。

『見よ、見よ——』



『そら、今、波に打つかるぞ！ そら、乗つてゐる女共が突伏した——』

『は、ア、面白い、面白い！』

こんなことをその峠の上で見てる緒方の兵共が言つた。

『何うしたツて？』

『そら、見てろ、見てろ。此方の舟が出て行くが、あれがあゝの波にぶつかりと、皆な乗つてゐる女達  
が突伏して了ふから——』

その舟は出て行つた。そして波に高くあがつた。

『は、ア、突伏した！ 突伏した！』

兵共は聲を擧げて笑つた。

これが曾ては天下をわがものにして、驕り且つたかぶつた平家だらうか。法皇をも押籠めて我意を振舞つた平家だらうか。その好きなところに都をすら遷すほどの權威を持つた淨海入道の一族の成れの果てだらうか。それは實際九州の田舎の兵どもにさういふ風に馬鹿にされたばかりではなく、その一族の中にも、それを眼にして、そのあさましい意氣地のないさまを眼にして、慷慨悲憤の念に燃えたものもな  
いではなかつた。知盛などは中でも最も多くその情熱を捨てることの出来ないひとりであつた。かれは曾てはその輩下であつた九州の田舎の兵どもにすら、さういふ風に相手にされないのを憤つて、「こゝろを落

ちるにしても、お情けで落して貰うのは無念ぢや、矢一筋なりとも酬ひたい」と言つて、峠に向つて弓の弦を二度も三度も鳴らしてからやつと舟に乗つた。教盛は教盛で、「このやうに辱かしめられて生きて居るよりも、いつそ颯風でも起つて、一隻残らず海に沈んで了ふ方が何れほど本望か知れない」と言つて泣いた。

それでも幸ひに天氣は好かつた。麗らかな小春日があたりを照して、外洋の波は高いにしても、さほどにも苦しまずに、小舟から大舟へと皆な移ることが出来た。日の暮れる頃には、荷物まであら方沖の船へと運び入れることが出来た。

濱はひつそりとして了つた。もはやそこにはさまざまの色彩も何もなかつた。柔らかな上品な京音も何もなかつた。何處となく匂つて来る好い香も何もなかつた。唯見馴れない櫓やきれ端などが砂の上に落ちてゐるばかりであつた。さつぱりとして好いと言つても、またもとの平凡と労働とに戻つて行かなければならないのを漁師達はさびしく思つた。かれらは呆氣に取られたといふやうにして、皆な沖の船の方へと出て行つて了つた京の人達を眺めた。日はいつかどんよりと暮れて、やがて十六日の月が海上に留つてゐる多くの船や檣を照し始めた。



『それで、長門の方に行つて、何うなるので御座いませう?』

『それは——』

『またそこにもゐられずに、出て行かねばならぬでは御座らぬか?』

『それは何ともわかりませぬ』

かうした言葉が大勢の上臈達のゐるあたりから起つた。

そこには通盛の北の方もその乳母の柏も乗つてゐた。それは帝や國母の御座船に次ぐほどの大きな船で、碇を下してあるのでまだ動かないけれども、これならば波が少しぐらゐるは高くなつても、それほど案ずるには及ぶまいと思はれた。北の方も柏も、あとになつただけそれだけ、小舟で此方へ來るのにもさう樂でなかつたことをくり返した。かれ等は、この船に移つてほつと呼吸をついたことを思ひ起した。柏は北の方を隅の方へと手招きした。

『何うして——?』

『何でも御座いませんけれども……』

『何うしたといふの?』

寄つて來た北の方に柏は小聲でそつと何か一言二言言つた。

『さう——そんなことがあつたの?』

『御存じありませんまい?』

『ちつとも——』

いくらか黯然としたやうな調子で眼を下けたが、深いためいきがそれに續いた。

暫くしてから、『それはいつ?』

『つい、さつき、あなたが上さまのところにお出かけになつた時——』

『さう——』

柏の話では、その時、清經が悲憤慷慨してそこにやつて來たといふことであつた。聞いてゐられないやうなわる口——それは三位中將や本中將ばかりではなく、またかうした際にすら好色者の本性を捨てない北の方達のことばかりではなく、後の宮のことまでもあしざまに言つたのであるが、何うも唯とは見えない有様であつたといふことであつた。一體、何處にいくさ人がゐるのぢや。田舎の兵にまであるかなしかにあなづられて、それでよく生きてゐられる。よくはづかしうない。今日といふ今日は、この身はあまりの辱詬に顔が赤うなつた。平家といふものも頼もしうなうなつた——この通盛などからしてが臆病者ぢや、卑怯者ぢや』と罵つたといふことであつた。

『それは言ふことはわかつてゐるにはありますけれども、あんまりで御座りました。わるく興奮してをられました——』



『……………』

通盛の北の方は黙つて眼を下にしたばかりであつた。暫くしてから、

『それで長うるたか?』

『いゝえ、さう長うはゐらせられませなんだ。いく度も、いく度も、もう平家も世の中もたのもしうないと仰せられて、父君のことなどを思ひ出されてゐられました!』

『誰でもさう思はぬものはあるまい?』

『それはさやうで御座るが、その言はれやうがいかにも強いので、それに、此方のこともあまり好うは言うてをられませぬでした。』

『この身のことどもも——?』

北の方の眼は光つた。

『いゝえ、そのやうなことは何も申しませぬけれど——』

『誰も皆さう思はぬものはあるまい——この身とても——』

北の方は言葉を變へて、『それで、何の船にお乗りやつた?』

『清經どので御座いますか?』

北の方は點頭いて見せた。

『何でも、知盛どのなどと御一緒の船だと存じました——。唯、この身の心配になることは?』

柏の小聲で言ふところに由れば、清經は何故か通盛のことを非常にわるく言つてゐたから、何かひよんなことでも出来ねば好いが、それが案じられるといふのであつた。

『そのやうなことは心配することはあるまい——』

あまりの取越苦勞と言ふやうにして北の方は笑つた。

『でも——』

『そんなことはあるまい。そんなことが起るわけがないから』

『ぢかに御覽になつたのではないので、さういふ風に仰せられますけれども——並では御座りませぬでしたから——』

『まア、そのやうなことを案じてもしようがない』

北の方は何うしてもそれを本當にせぬので、その話はそれでお了ひになつた。

十六日の月は靜かに地平線を離れて、やがてその明るい冴えた光を次第に一面に海波の上に漲らした。波頭は光つて、輝いて、それがキラキラと鏡でもあるかのやうに照りわたつた。徐かに絶えず碇を中心にして廻轉してゐる御座船。それに連つて動いてゐる大きな船。黒くくつきりと月の光の中に隈取つて見える帆柱。その大きな船と船との間を今だに陸から荷物を運んで來てゐる小舟。波に雜つて聞え



て来る櫂の音。何處とも知れず人の腸を断つばかりにきこえて来る船唄。しかも風がわるいので、急にそこから立つて行くわけには行かなかつた。その船の群はいつまでもその輝く月の光の中に残された。

北の方は何遍となく舳の方へと出て見た。船は依然として、碇を中心大きく波につれて廻轉してゐると見えて、時には月が見え、また時には昨日まで見守つてゐた峠が見え、若干の月日をわびしく暮した磯濱が見え、漁師の家に淡くともつてゐる灯が見え、また時にはその背後を圍んでゐる低い丘が獸の肩でもあるやうに黒く夜空をしきつてあらはれて見えた。夜は更けた。もはや子の下刻をとくに過ぎたらしかつた。忽ち遠くで笛の音が起つた。冴えた、巧みな、流石は平家だ、かうした慌たゞしい空氣の中にも、限りなき心を一管に托し、無窮の哀情を海波に漂はせる風雅の餘地があるといふやうな笛の音が。

北の方はじつとそれに聞き入つた。

## 一九

北の方が檣の上のところに夜のものを取出して、嘹唳として絶えないその笛の音に耳を寄せながら、うとうとと眠りについたのは、それから暫く経つてからであつたが、夜深く風が追手になつたらしく、碇をあげる音と、あげた帆に風の當る氣勢と、それにつれて船の逸早く動き出した心持とが、その笛の

音と共に斷續してその夢の中に入つて來てゐるが、船底に當つて碎ける波のザ、ザといふ音もをりをり耳に入つて來てゐるが、心持よく揺れる船の動搖に晝間のつかれが出たと見えて、それに誘はれて、いつとなくぐつすりと深く眠に落ちて了つた。

笛の音は猶ほ止まうともしなかつた。月と共に益々冴えて行くばかりであつた。

船は御座船を始めとして、何隻ともなく續いて行つた。隈とてもない明るい月の光の中に大きな帆が一つ一つバサバサと音を立て、黒く早く動いて行くさまは、丸で怪鳥か何ぞのやうであつた。海はひろくその前にひろがつてゐる。波は到るところに白銀のやうな波頭を跳らしてゐる。その癖、船の中の人達は重立つた水夫を除いて、あとは皆な眠つて了つたらしく、唯、船を動かす大きな櫂の音が夜の空氣を破つてきこえてゐるばかりであつた。ふと御座船の右を走つてゐる大きな船の船尾のところに、ひよつくりひとつあらはれた黒い影があつた。それは帆のかけになつてゐるので、始めはそれとはつきりわからなかつたが、この深夜にこつそりそんなところに立つてゐるのは何ういふ人であるかわからなかつたが、少し此方に來た時には、船の進行がいくらか西に偏つたためか、それとも黒い影そのものがすつと此方に動き出して來たためか、烏帽子をして、狩衣をつけてゐるひとりの公達であるといふことがはつきりとわかつた。突然後から誰かが來てそれを抱き留めようと思ふと、それと殆ど同時に、その公達の姿は急に躍り上つて、逆巻く波の中にざんぶとばかり飛込んで行つた。あとには波と月とがさ



さらのやうに碎けた。怪鳥のやうな船はそんなことには頓着しないといふやうに依然として早く早く動いて行つた。

## 110

『え?』

通盛の北の方はその耳を疑つた。

それはその翌朝の卯の上刻に近い頃だつた。數列に並んで終夜順風に走つて來た船は、いつの間にか外洋を通り越して、潮流の迅い狭い瀬戸へと一つ一つ入つて來てゐた。北の方は深い深い熟睡から覺めて、昨夜聞いた笛の音のすぐれて巧みであつたことなどを思ひ起してゐたが、ふと氣がつくと、向うの帆柱のかけのところで、女房達が二三人寄つて、さもさも驚いたやうに早口で何か話をしてゐるのを見た。否、その話の中に何か異常なことが起つたらしい氣持がそれと歷々感じられたので、急いで身を起して衣を着て、其方の方へと行つた。しかし通盛の北の方は、その女房達の話を聞くのを待たなかつた。そこに慌たゞしげに柏がやつて來た。そして昨夜清經が入水したことを口早に話した。

『それはまこと?』

北の方はわくわくと全身の戰慄を禁めることが出來ないやうにして問返した。

『今、きいて參つたのです。本當ださうで御座います。夜中の寅の上刻あたりであつたさうで御座います……』

『それで何の舟だつた?』

『そら、そこから二つ目に見える船ださうで御座います。何でも昨日一日平家の人達の意氣地のないことをあちこちに行つて饒舌つてをられたといふことです……』

さうしたことを北の方は緩りときいては居られないやうに、

『それで、誰も知らなかつたの?』

『いゝえ、昨夜、夜深くまで笛を吹いてをられました——』

『では、あの笛の音は!』北の方は烈しく何物にか打たれたやうに頭を振つた。涙が胸に一杯に込み上げて來た。

『此の際、笛など弄んでゐる場合でないと、大臣を始め、三位中將どのなども何遍も御とめになつたさうで御座いますが——初めは何の彼のと反抗つてゐられたさうで御座いますが、後にはそんなことは頓着せず、この身はこの身だといふやうにして、其笛を口からお離しにならなかつたさうです』

『誰がその話をした?』

『向うの船から、資盛どのが參られました。その話で御座いました。で、いくら申しても笛をやめ



ず、それに、昨日もお話したやうに、いくら心持も狂うてをられたやうなところがあるので、大臣を始め、三位中將も、まア爲方がない、放つて置けと言つて、そのまゝにして置かれたといふことで御座いました——』

その笛の音は今でも北の方の耳に歴々と残つてゐた。

『それで？ 何うもしなかつたの？』

『丁度その時夜番の資友ぬしが起きてゐて、船のともどころに人のゐる氣勢がする。何うしたのかしらと思つて、ちよつと顔を出して見たさうで御座います。月が明うて、丸で晝のやうだつたといふことで御座います。ふいと見ると、清經どのが今にも海に飛込まうとしてゐる……。アッ！ と聲をかけると、その時まではまだ飛込まうか何うしようかと考へてゐられたやうで御座いましたさうですが、その懸聲をきくと、いきなり躍り上つて沸きかへる波の中にその身を投げられたさうでございます……。』

北の方ははつきりとその時のさまを眼の前に浮べたまゝ、じつと一ところに眼を見据ゑた。涙がほろほろと落ちて來た。

『で、資友ぬしは、大騒をして、水夫どもを呼び起したさうで御座いましたけれども、何と申しても、夜更のことではあり、船は帆をまともに孕んで早く早く走つてをりますので、何うすることも出來

なかつたさうで御座います。せめてその船なりと止めようとせられたさうで御座いますけれども、それさへ出來なかつたさうで御座います。』

『船もとゞめず、そのまゝに——？』北の方は堪らなくなつたといふやうに突伏して了つた。

柏もそれを慰める術を知らなかつた。今に際しては——一族がかうして彷徨つてゐる今に際しては、さうしたことも悲しいには相違なかつたけれども、これも落目になつた平家の一つのあらはれには相違なかつたけれども、しかもひとりの狂つた公達の入水などに拘づらつてはゐられないといふやうにして、船は大きな帆をあたりにひろげつゝ、進んで行つた。通盛の北の方にはそれがたまらなく悲しかつた。その屍すら海の中に投げ放しにして來たといふことが、その燃えるやうな情熱が徒らに深い海底に沈んでこの世から消えて亡くなつたといふことが……。それにその身のつれなかつたことも、その入水に關係してゐないとは何うして言へよう。かの女は身を顛はすばかりにしてした、かに泣いた。霧の深い朝の空氣の中に帆は帆と重つて動いて行つた。

## 二二

侍の見田が入つて來た。何か喜ばしいことのあつたのはその莞爾した顔でもわかつた。

『吉報が御座つた！』

通盛の妻



『何と？』

そこにあるた柏と北の方とは同じやうに顔を其方へ向けた。

『播磨のものどもが皆な資盛どの、手についたさうで御座りまする——』

『まア』

それは此上もない吉報であらねばならなかつた。柏の顔にも喜悅が満ちわたつた。

見田は續けた。

『播磨も印南の郡からすつと丹波路の方まで味方になつたさうで御座りまするで、福原まで入つて行くことが出来るやうになりました。つい、さつき、教盛どの、手のものが、鹽屋、明石の濱の方まで出て参りました』

『神々もまだ平家をお棄てにならないと見える！』

北の方はかねて祈願したさまさまの神を眼の前に浮べるやうにして手を合せた。柏もそれに倣つた。

『京に入れるやうになるのも、はやさう遠くはあるまいとのことで御座ります。今日の評定などでも、大臣を始め皆な喜ばれたといふことで御座ります。木曾の兵どもは、頼朝の兵が東から上つて参るので、それを拒ぐので、皆な京に引上げたさうで御座る。もはや生田の森にも、蘆屋にも、川尻にも留つて残つて居るものはないといふことで御座る。天の興へた時機を用るなければ、それが却つて身の災

害となるといふことが御座ります。さういふ源氏の内間採めに際して、ドシドシ此方は出て行かなければなりません。一刻もぐづぐづしてはをられませぬ』

『本當ぢや……』

北の方はかう言つたが、『それにしても、上さまは、何んなにお喜びで御座りましたらう——のう柏！』と呼びかけて、『何事も定めぢやのう！ 太宰府に居る頃には、こんな運が平家に向いて来ようとはゆめ思はぢやつた！』

『本當で御座います』

『あの山賀とか申す濱邊にゐる頃は、何うなることかと思つた。これでもう平家はお了ひかと思つた——本當に運といふものはわからぬものぢや。あの山賀の濱を出て長門へわたつてから、まだいく月にもならぬのに——』

『矢張、人間と申すものは、噂に由つて何うにでもなるもので御座るな。京の義仲のことが知れて参つてから、土地の豪族どもにも、源氏も頼もしいないと申すことがわかつて、それでまた此方に附くやうになつたので御座るな。土地の豪族共などと申すものも、皆な好加減なもので、少しでも勢の好い方へ附かうと致してをりますでな。さう深く考へた上で味方を致すと申すものなどは、澤山はあるものは御座りませぬ。兵は時の勢と申しますから、この期を失はず一刻も早う京を取戻さねばならぬと知



盛どのも申してをられました御座います。』

『殿は？』

ふと思ひついたといふやうにして北の方は言つた。

『殿も明石の方へ御出發になる筈で御座る！ 何でも、殿は今度は重い役につかれましたので——何でも福原の方の兵を帥られることにきまられたさうで御座る——』

柏や北の方の坐つてゐるところからは、深く入り込んで來てゐる静かな海が丸で磨いだ鏡か何ぞのやうに明るく美しくひろげられてあつた。城壁の形をした左の方の山には、兵どもが澤山に集つて、馬を練つてゐるのが見える。たまには屋形をした船や苦舟などが赤い旗を立て、通つて行くのも見えた。

それにしてもこの屋島の一角は、かれ等にとつて何んなに住み好いところであつたであらうか。そこは師走になつても暖かで、あさ霜の白う置いたためしもなく、氷も厚くは張らず、京ならば今頃は北山の峰々に白く雪が來て、冷たい風が頬を打ち切らるゝばかりに強く吹くのが習ひであるのに、此頃は毎日静かに穩かに晴れて、垣にはところどころに梅の花が白く咲いてゐるなりなどした。ことにかれ等の置かれた家は、帝や國母の御座所になつた六萬寺からは少し離れて、小さな谷を海の方へと下りて行くやうなところにあつた。かれ等はそこで靜かに暮した。

かれ等は柳ヶ浦から長門の長府の方へと渡つて、そこで暫く佗しい生活をしたことを繰返した。矢張

濱風に吹かれたり漁師の嬉達に雜つたりして暮したことを繰返した。ところが、急に京の方の状態がすべて味方に有利になつて來たので、半月と経たない中に、そこから此處にわたつて來たことをくり返した。此頃では後の宮の顔も晴れやかに、時忠の卿も滑稽なことばかり言つて女房達を笑はせたりなどしてゐることをくり返した。それは内部に入つて見れば、いろいろなことがあり、聞くのも汚ららしい戀の争鬭などもあり、本三位中將に關する噂などは、かなりひどいものであつたけれども、北の方主従は成るべくさういふ空氣からは離れて遠ざかつて暮すやうにしてゐた。その頃には北の方の姪は誰の眼にもそれとわかるくらゐになつてゐた。

『さうだつてな。お腹が大きくなつてゐるゝとな……。何うも不思議なものぢやな。京にゐる間は、あの濃い仲で、ついぞさういふ氣勢もなうおじやつたのに、この月で五月と申せば、太宰府のあの月の宴頃に出來たと見えるが、矢張、かうした不如意の旅空では、一層いとさが増ると見える！』こんな噂が至るところで言はれたばかりか、中には、その頃の左の中將のことをそれに付け加へて、あれもない評判をするものなどないではなかつた。

『お前はそれを知らぬのか？ うつけぢやのう！ 左の中將どのはそのために死なれたのぢや……』

『何うして？』

『何うしてもかうしてもあるものか。死ぬほど左の中將は思つてゐた……』



『いくら思うてゐたからと言つて、それは何うにもならぬことぢや。あの北の方のお中のものは、その思ひの種では御座らぬ……。』

『それは何うぢやかわかるものではない？』

『そんなことは御座らぬ。あの越前三位の北の方に限つてはそんなことは御座らぬ』

こんなことがそこでも此處でも言はれた。しかも多くは左の中將と北の方との關係を問題にするものはなかつた。それほど通盛夫妻の仲は濃やかであつた。

通盛は隙さへあるとやつて來た。馬を垣に繋いで置いて、ちよつと話して、そしてまた出かけて行くことなどもあつた。此頃は二人の仲が一層濃かに悲しけになつて行つてゐるのを柏は見落さなかつた。通盛はその愛した妻が時には悲しげに、時には思ひ屈したやうに、また時にはわるく憂鬱に沈み果て、ゐるのを絶えず氣にした。二人は顔を見合せたまゝ長い間黙つて坐つてゐる事もあれば、柏が見てゐないところでは、女の涙を男が口で吸つてやつたりしてゐることなども決してめづらしくなかつた。北の方は何ぞと言つてはよく涙を流した。長い睫毛が泣きぬれてゐることなども決してめづらしくなかつた。今では長門から此處にやつて來た當座のやうに、物を嘔いたり吐いたりすることはなくなつたけれども、それでもそのやつれは後姿にも見えて、それを見ただけでも通盛の心は憐しさと悲しさとに亂れずにはゐられなかつた。『どうしてでせうね。何うしてかう悲しいでせうね。この身にもよくわかりませぬの……。』

大方悲しい心持をした子がこのお中の中にあるのでせう』北の方は微かに笑つてこんなことを言つたりなどした。

ある時は、夥たゞしく泣きぬれてゐるところへと通盛がやつて來た。

『何うしたの？』

『だつて、ひとり手に、こんなに涙が出るんですもの……。自分でもしまひには可笑しくなるくらゐなの。わけもなしに出て來るのですもの……。』

『餘りいろいろのことを考へ過すためだよ』

『でも、かういふ氣がするんです……。人間の世と言ふものは、かういふものか。京にゐる頃にはつゆばかりもそのやうなことを考へたことも思つたこともないのに、丸で夢現で通つて來たのに、不思議にも此頃ではさうでなくなつたのですもの……。かういふのが人間の世の中、生れてそして死ぬのが世の中といふ風に考へられるのですもの……。母者は今頃何うして居らるゝか……。』かう言つて北の方は烈しく歎けした。

通盛は黙つて了つた。

『だつて、さうですもの……。何うせ不如意な世の中ですもの……。逢ひたいと思ふても、母者にも逢へず……。御身は御身で、いつなりとも戰場へ出て行かれねばならず……。』



涙に礙えられてその言葉ははつきりと聞き取れなかつた。

『まア、そのやうなことは考へない方が好いよ』

通盛はいろいろに賺めたりすかしたりした。實際、それはお中の子が泣虫だから、それでこのやうに悲しいのだらう！ と言はなければならぬほどそれほど北の方はよく泣いた。赤い夕焼の雲を見たと言つては泣き、風ぎた静かな海に帆が一つ浮んでゐるのを見たと言つては泣き、青空が果てしなくつゞいてゐるのを見たと言つては泣いた。その癖通盛は今までに経験したことのないほどの女の熱い戀心がその身に溢れかゝつて來るのを感じた。かれはいつも支柱のやうになつてその女の戀心の重さを支えた。ある時は清經のことが氣になつて爲方がないといふやうに見えた。それはこれまでも度々あつた。長門でもその話を持ち出された。『何うして舟をとめなかつたでせうね』とか『あとからつゞいて舟も來たでせうに——』とか、さうした言葉が度々出た。長いこと黙つて物思ひに沈んでゐるから、何うしたのかと思ふと、それを深く深く考へてゐたといふやうなこともあつた。今もそれがまたやつて來たらしかつた。

『でも……私も考へるとお氣の毒で——』かう言つて北の方は頭を擧げた。

『だつて、しようがないぢやないか？ ひとりで死んだのだもの——』

『何故、あのやうに私はつらくしたでせう。いつもあの人は私に話しかけようとしてゐたのです。何

處でも……。あの風雨の中でも、峠の上のところでも、蟹のとま屋でも……。それなのに、私は成るだけそれを避けるやうにした。何故、あのやうなつれないことをしたかと思ふと、それが悲しうて——』

『だつて爲方がないことではないか』

『それは、貴方に對して、さうしなればならないのは、止むを得なかつたことですけれども、それでも——あのやうなことは爲なければ好かつた。何もそのやうにしくとも好いので御座つたのに——』

『まア、そのやうなことは何うでも好いではないか。すぎ去つたことをいくら考へたつて爲方がない……』

『でも、あの方はこの身を恨んで居られたに相違ない』

『そのやうなことはない。あつたら、この通盛がついてゐるぢやで、安心してゐるが好い』

『……』

北の方はじつと空間を見詰めた。入江には帆が一つ静かに動いた。

その入江にはいつもきまつて夕日がさして來た。静かに、穩かに。帝のゐます六萬寺の屋根から此方の波打際のあたりまで。と、その明るい光線の中を派手な扮装をした公達が馬に乗つて並足で通つて行く。網代車がガタガタと白いほこりを捲き上げながら通つて行く。と、その路をつい半月ほど前に後の宮さまのところへ參上しようと思つて通つて行つたことが思ひ出され、その時ぢかに後の宮から身ごも



つたことを問はれて顔を赤くしたことやら、その時かづけものとして御衣を賜つたことやら、次の間で阿波内侍がやさしく言つて呉れたことやら、いろいろなことが思ひ出され、それにつゞいて、平家の一族がかうして落ちて來てゐることが思ひ出され、大宮通りに置いて來た母親のことが思ひ出されて、再び涙がその胸に込みあげて來るのであつた。

## 三三

通盛の北の方は垂籠めてのみ暮した。滅多に外に出るなどといふこともなかつた。それに、今までに比べて非常に夫の傍を戀しがつて來たことはその舉動だけでもわかつた。柏はつとめてその機嫌をそこなはないやうにした。

清經のことに關しては、絶えずそれが氣にかゝるといふやうに何遍もそれを柏の前に持ち出した。

柏はいつもそれをなだめた。そのやうなことはないと言つた。そんなことを考へるのは死んだ清經のためにも決して功德にはならないと言つた。『だつて、それは、さうでは御座りませぬか。あなたには何一つわるいところはないので御座りますもの。それは仰しやるやうに、あなたに悪い心持を持たれて居つたのでは御座りますまいけれども、一體が理不盡なことで御座りますもの……。もしそのやうなことで、あの世から恨むなどと申すなら、それは逆さ恨みと申すもので御座ります。この柏がついてをりま

するかぎり、そのやうなことは御座りませぬ。左中將どののおかくれになつたのは、それよりも氣が變になられてをつたので御座ります。それは山賀に居りました時にもかなり評判で御座りましたもの……。』かう柏は常に言つて慰めたのであるけれども、しかもその憂鬱を、その悲哀を退散せしめることは出来なかつた。何ぞと言つては海を眺めたり帆を眺めたりして涙を流した。そればかりではなかつた。京のことや、昔その身が京で經たことや、その頃には無邪氣であつたことや、内裏の垣に梅の花の白く咲いたのを眺めたことや、出し車をつらねて後の宮の伴をして白河に花見に行つたことや、さうした思ひ出が一つ一つ繪になつてかの女の前にあらはれて見えた。それにしても何うしてかう京がこひしくなつたらう。そこに行かすにはゐられないほど京がこひしくなつたらう。と思ふと、大宮通りを三條に折れ曲つたところに、築土を取廻した小さな家があつて、そこで四十を少し出たばかりの母親が朝に夕にかの女のことを思つてさびしく暮してゐるさまが歴々と眼の前に浮んで見えた。『今、ひよつくりそこにこの姿を出したら、母君は何のやうに吃驚するだらう。暫しは口もきけずにじつと此方を見るだらう』こんなことを考へながら北の方はさびしく暮した。

通盛は通盛で、寄りかゝるやうな女の心の重さをその身に感ずると同時に、今までに覺えないほどのいとほしさを次第に北の方に對して持つやうになつた。それは言つて見れば、二つの心が始めて兩方からびたりと觸れて行つたやうなものだつた。通盛はひまさへあるとそこにやつて來て北の方を見た。



長く垂れた髪、糸のやうに細くなだらかな髪、その中に男は手を入れて、ぐたりとした頂を此方に向け、顔見合せてにつこり互に笑ひ合つたり、お中の子の動くことを話して、二人して顔を合せてじつとその腹のところの裳の模様の動くのを見詰めたりなどした。白河に花見をした頃の美しさは最早何處かに行つて、あの紅かつた唇の色も褪め、豊であつた頬も痩せ、眉のあたりにも限りなき悲哀が常にそのわびしい影をかくしてゐるたけれども、通盛は却つてその衰へた容色に一層深い愛着を感じた。

ある時、北の方は戀のエクスタシイに陥つたといふやうに、『もはやこの身は何うなつても好い。死んでも好い——』かう言つて男の胸にその顔を押當て、歎歎けた。

戦塵の高く颯つてゐる巷にあつても、また弓の弦の空気を切つて高鳴して行く時にあつても、戀のエンジンエルは何處からともなく極く靜かに下りて来て、誰にも知れぬやうに、微かではあるけれどさやかに、小やかではあるけれども張詰めてその持つた堅琴を弾いた。それはこの屋島の戦陣の中でも、戀の歡樂に酔うてゐるものは決して尠くはないだらう。眼と眼とは互ひに燃えるだらう。心と心とは互ひに觸れるだらう。中には不義の戀の片時の快樂を味つてゐるものもないとは言へない。またさうした享樂のためにのみ他國への流浪の艱難を甘んじて受けてゐるものもないとも言へない。しかし戀のエンジンエルはさういふところにその姿をあらはさずに、その海添ひの小さな家屋の中に來てその手にしてゐる堅琴を弾いた。

しかも味方の好運は、決してその武將をその海岸の離れ家に靜かに留めては置かなかつた。見田がその吉報を齎らして來たその翌日あたりから、屋島の本營も次第にその忙しさを加へて、通盛も以前のやうに頻繁にそこにその姿を見せることは出來なくなつた。否、あたりは何處となく騒々しくなつて、いろいろな噂がこのさびしい世離れた海岸の家までも傳はつて來た。やれ教盛の手のものが出て行つたとか、やれ知盛殿もいよいよ出陣なさるとかいふさまさまの噂が。今日は備中の舟が三十隻も福原に向けて出發して行つたといふことなども何處からともなくきこえて來た。

垣の端に出てゐた柏は急にそこから聲をかけた。

『何うしたの？』

北の方が縁まで立つて行くと、

『ちよつと、此處まで』

と言つて柏は手招きした。

北の方はそこにあつた草履をつゝかけてそつちへ行つた。

『御覽なされ！』

『お！ あれが皆な出で行く船！ まア見事ねえ？』

深く入り込んだ海岸からも、沖に無數に連つて出て行く船がそれと一ところはつきり見えた。大きな



赤い旗が美しく午前の日影に照つた。

『見事ねえ!』

『大變に好くなつたんですつて……。福原はもう此方のものなんですつて——。其であの船なんかも出て行くんですつて?』

『誰が言つて?』

『さつき、向うの有盛さまの北の方がさう仰しやつてで御座いました。何でも、その話では、この屋島にももうさう長くゐなくとも好いといふことでした』

『本當?』

『本當ださうで御座います。何でも昨夜とか、またいろいろな新しい吉報が参つたさうで御座います。川尻ももう味方のものださうで御座います』

『まア! 川尻も?』

『何でも木曾は亂暴なことをしてをりますさうで——入道の院も持あましになつてゐるといふことで御座います。そら、あの松殿のおん娘——御存じでいらつしやいますね』

『二番目の?』

『さやうで御座います。一番目のは、さう美しうはありませぬで、無論、あの次ので御座いますが、

木曾はあれをも傍に侍らせてをると申すことで——』

『傷々しいこと! まア!』

『しかし、木曾はもう何うにもならぬのださうで御座います。京でも評判がわるう、今では町の人達も平家を慕うてをるさうで御座ります』

『段々帝の御運がお開けあそばしたので御座います——』

こんなことを言ひながら、二人は沖に並んで動いて行く無数の船を見送つてゐたが、柏はそれとなく、

『これでは殿も、お出陣にならねばなりませんまい?』

『でも、さう急には?』

かう言つて北の方は微笑んで、『出るには出ても、この身の出るのは、まだ中々ぢやと仰せられて御座しましたゆゑ——』

『でも……かう様子が變つて参つては、油断しては居られませぬ。いつ御出陣になるかわかりませぬ』

『それもさうぢやが——』

かう話してゐる中にも、艤装した船隊は、あるものは大幟を翻へし、あるものは小旗を一面にぴらつ



かせ、あるものは楯を船尾までも組ませて、徐かに徐かに通つて行つた。一つ動いて行つたあとからまた一つが續いてやつて來た。帆を張つたのも通つて行つた。やがて一番大きな船——龍の首を舳に見せた船が高く海中に浮んで、澤山に並べられた楫につれて徐かに動いて行くのを見た。

『あれは教盛どのの乗つてゐる舟でがな御座らう?』

かう云つた時、後に軽い蹄の音がしたので振返ると、六萬寺の築土の傍に添つて、急いで此方へやつて來る一疋の馬を柏も北の方も見つけた。それには通盛が乗つてゐた。

『あ、殿!』

北の方は思はず言つた。

馬は田間の路をすつと此方へと走つて來て、ちよつと林にかくれたと思ふと、すぐそこにその鹿毛の姿をあらはした。通盛は雑卒に馬をあづけて莞爾しながら此方へと歩いて來た。

『何うかなすつた?』

『いや——』

『………?』『もはや御出陣なさるのでは? よも?』と言はうとしてよして、じつとその夫の顔を見詰めた。

『何を見をつた?』

通盛は訊ねた。

柏も北の方も向うに動いて行つてゐる船隊を指さした。

『もう、それでは、いろいろなことを存じて居るのぢやな?』

『殿も御出陣?』

北の方の聲は顫えた。

『いや、この身は今すぐと申すではないが……。いづれは出陣致さねばなるまじ。それにしても、平家の運が再び向いて參つた。木曾はもはや兵をすべて京へ引き揚げた……。福原も味方の手に入った……。何といふ喜ばしいことぢやらう。帝も二位どのも、后の宮さまも、誰も眉をひらかぬものはない——』かう言つて通盛も心持好ささうに續いて出發して行く船を眺めた。

二三

『木曾が亡びたさうで御座るな!』

『粟津の泥田の中にはまつて身動きが出来なくなつて、そのまゝ射伏せられたさうで御座る……。』さうした話は一の谷の谷合の到るところで取換はされた。或は疎な林に添つた真直な道、或は谷の縁を縫うやうにうねうねと折れ曲つてゐる路、かと思ふと、こんなところにも人家が新たに建てられたか



と思はれるやうなところがあつて、そこでも下司の女どもが立留つて話した。男は男同士で、『それにしてももう少し何うにかならなかつたものかな。木曾が亡びて了ふまで手をつかねてゐるといふことは手落ちや。山崎、八幡あたりまではこつちのものにして置かねばならぬぢや……。惜しいことをしたなう!』などと噂した。

それから少し此方に来ると、崖の下見たいになつてゐるところに、日が暖かにさして、梅の花が七分通り咲いてゐるが、そこにも腹巻に烏帽子をした侍達が五六人あつまつて頻りにその話をしてゐた。

『ほんたうぢや。もう少し早う何うにかならんものぢやつたかな?』

『でも、さう早う木曾が亡びるとは思ひかけぢやつた——』

『それが手落ちやといふのぢや。東國の兵が續々上落してゐることは誰も知つて居つた筈ぢや。その東國の兵どもがまだ京に入らぬ中に兎も角もせねばならぬ筈ぢやつた……』

『女子に溺れ戯れてゐるものばかりが多いので——とても本當の戦争など出来はせぬわい!』何方かと言へば小柄な、顔のくしやくしやした侍がかう眞面目に慨くやうに言つた。

『本當ぢやのう!』

傍にゐたもう一人の侍が應じた。

『九郎判官は隼のやうな大將ぢや……。木曾を亡ぼした上は、時を待つことは御座らぬまい?』

『しかし平家にも知盛卿や教盛卿のやうなのがある。それに、今では平家も只の平家では御座らぬ……。さうわるうばかり取ることも御座らぬ。西國をはじめ、四國、山陽を後に控へての一の谷ぢや。

いくら源氏でもさう容易うは攻寄せせることは出来まい……』

『それもさうぢや……。何もさうわるうばかり取るには當らぬ』前の侍も點頭いて、

『何でも通盛卿の本隊も、住吉からもつと先きまで出て行つてゐるといふ話ぢやに由つて、さう捨てたものでも御座らぬまいが、平家にももう少しすぐれた大將がおじやるものならば、今頃はとうに京に入つてゐるたで御座らうに——惜しいことをしたぢや——』

『何しろ、本三位中將どのが、あのやうに煮えきらぬ大將ぢやでな……』

『しかし、平家とて、今度は死物狂ぢや。好加減では居られなうなつた。木曾が亡びたといふことは——さういふ風に手もなく亡びたといふことは、平家に取つては餘り好いことでは御座らぬでな』

『もう少し木曾は手強いと思つた』

かうして侍達が集つて話してゐるところからは、すぐ向うに新たにつくられた内裏の建物が見え、細かに襞のやうに入り込んだ谷が見え、そのところどころに建てられてゐる低い家屋が見えた。門があつて、雑卒が一人二人それを守つてゐるのを見かけた。女房達が袴をたくし上げて、炊事や洗濯にいそしんでゐるのも手に取るやうに見えた。



この深く細かに刻まれた谷、たとへて見れば、壁を深く取つた指貫のやうに、または半ば開いてそれを上から覗いて見た扇のやうに、其處にも此處にも影があり日向があり彩があり陰翳があつた。溪流が幾筋ともなく流れ出て、小さやかな音を立てて海近い磯の方へと落ちて行つた。梅の花がところどころを白くした。

ふと見ると、その内裏の門から供の侍を三四人連れた一人の大將らしいものが出て來た。鹿毛の馬。平文の鞍。あたりには日が照つて、長い太刀の鍔から胴巻にかけてキラキラと美しく光つた。供の侍が徒歩なので、強いて馬を走らせようとはせず、徐かにうねうねした道をたどつて、そのまゝ向うの谷の方へと行つた。

『ほう、あれは通盛の卿ぢやな』

かう此方の侍のひとりが言つた。

『あ、さうぢや』

『つい、昨日まで住吉の方に往つておじやつたのに——』

『何か軍議でもあるのでは御座るまいか？』

『それもさうぢやらうが——たまには北の方にも逢ひたうなるで御座らうほどに』かう言つて侍は笑つた。

その時には通盛の姿は既に向うの谷へと入つて、梅の花の白く咲いてゐる、家屋の二三軒點綴されてゐる、溪流の小さやかな音を立てゝゐる方へと行つてゐた。そこからは松原を越して海が美しく展げられて見えてゐた。

そこでは馬の蹄の音を聞きつけて北の方が顔を出した。やつれた顔を。目に立つほどの腹を抱えて、絶えず鬱陶しげに見える顔を。

『殿！』

『殿のおんもどり！』

柏も急いで迎へに出た。

通盛の顔はいつものやうに喜悦にかゝやいてはゐなかつた。かれはこの夜明に打合せることがあつて、住吉の陣から急いで一の谷へと戻つて來た。かれは一番先きに本三位中將のところへと行つた。かれはある獻策をしたのである。今なら、まだ出られるから、成るだけ先へ出て置く方が得策であるといふことを言つたのである。運好く行けば八幡、山崎あたりまでは出て行けぬことはあるまいと言つたのである。しかしその策は容れられなかつた。それよりも——さういふ風に先に出るよりも、こゝで敵を待つ方が好い。その方が萬全である。たとへ源氏が精銳を盡してやつて來ても、今日ではさう脆くはひけを取らぬと本三位の中將は言つたのである。否、そればかりではない、主立つた人達は、皆なそれに



左袒したのである。しかも通盛は猶ほその説を主張して止まなかつた。かれは言つた。それは此處を守るのはわるいとは申さぬ。しかし初めから此處に拘泥してゐることはいかゞで御座るか。出られないまでも出られるところまで出て行つてゐる方が好くは御座らぬか。本當では御座らぬか。山崎までこの際出て行つて置けば、運が好ければ京まで入つて行けないことは御座らぬ。兵は拙速を貴ぶ。本三位中將どのが本隊を引卒されて出陣さへすれば、この身は先陣を承はつて、直ちに川尻に向つて出發しようと思つて、それでわざわざやつて來たので御座る。かうかれは主張した。しかしその策は遂に遂に容れられなかつたのである。通盛はその時聲を勵まして言つた。『本三位中將どの！ それでは、これを破られた時には、再び西國に落ちられるおんつもりか。それは仰せのごとく、此處は容易には破られぬで御座らう。しかも萬一破られた時には、その時には、四國も山陽も九州もすべて一時に敵になることをお考へなされたか。』と、流石の本三位中將もいくらか激して、『その時は、この身は生きてはをらぬ！ この落ちるのを見て生きてはをらぬ！』と言つた。で、通盛も黙つて了つたのである……。

何となく顔色のすぐれないのを見て取つた柏は、

『何うぞなされましたか？』

『いや、別に……』

かう言つて、供につれて來た三人の侍に今日一日は緩りと休むやうに傳へて、そのまゝ、室の方へ……

て坐つた。相變らずすぐれない顔色をしてゐた。

『本當に何うぞなされましたか？』

今度は北の方が訊いた。

『いや……別に……』

皆なは黙つた。いつもに似ぬさびしさとわびしさとがあたりに満ちた。

『今朝、あちらからお出ましになりましたのですか？』

『さうぢや』

『途中で御風邪でも召したのでは？ よも？』

『いや、さうでもないが——』その話を打明けて話さうかと思つたが、女子にはさういふ話をしたところではわからないと思つて、通盛はそのまま黙つた。

暫く話してから、

『今日はあちらにおもどりになるので御座いますか？』

『されば——』

通盛は考へるやうにして、『今日は一夜ゆるりと泊つて參らう……？ これからは忙しく、參るには參つても、ゆるりとしてはをられぬであらうに——』



『さう申せば、専ら噂で御座りまするが、木曾は亡びたさうに御座いますが、まこと御座いまするか？』

傍から柏が訊いた。

『亡びをつた！』

『はかないもので、御座つたのう！ 半年の天下で御座つた！』

『しかし、柏……。さういふてはをられぬのぢや。もう少し木曾が持ちこらへて呉れると好かつた。あまりに早う亡びすぎた——』

『それでは東國の兵は此方まで攻めて參るので御座いますか？』

『それはまだわからぬが、いづれさういふことになるのは火を睹るよりもあきらかぢや』

『しかし平家がこゝを失ふやうなことは容易には御座りませう』

北の方も心配さうに傍から口を挿れた。

『それはさうぢや。本三位中將どのもさう申して居つた——』

『こゝが取られるやうでは、それこそ大變で御座る』

柏も眼を睜るやうにして言つた。

『しかし、今日はつくづくと考へた……。矢張、物といふものは榮える時と衰へる時とがある。榮え

る時には何のやうにしても榮えるが、衰へる時も矢張その通りで、何のやうにしても衰へて了ふものぢや。何うすることも出来ぬものぢや。今日はつくづくさういふことを思つた——』

さもさも深く慨嘆したやうに通盛が言ふので、

『何うしてで御座るか？』柏も北の方も同じやうに問うた。

『でも、さうではないか。入道殿がをらるゝ頃には、何のやうなことをしても榮えた。あれはあまりにひどいと思ふやうなことをしても、その榮えには影響せざつた。それに、すぐれた人達もゐた。小松どののゐらるゝ時分は、すぐれた人達が澤山にをじやつた。ところが、一度落目になると、何も彼もいけなくなると見える。何んなにえらい人があつても、十分に力が出せなくなると見える。そしてその反對に、榮える方になると、好加減にやつたこともずんずん成し遂げられて行くと見える。それを思ふと、今日はつくづく人間の世が悲しうなつた——』

北の方も柏も何と言ひやうもないといふやうに黙つて了つた。

『人間の世といふものは悲しいものぢや。思ふまゝにならぬものぢや。好いと言つてもそれが好いではない。わるいと言つてもそれがわるいでない。この身達が山賀へ落ちた時でも、まだ今よりは好かつたかも知れない！』

そんな風と言つたりすることは、今までついぞなかつたので、北の方も柏もいくらか呆氣に取られた



といふやうにじつと通盛の顔を見詰めた。

『だつて、さうではないか。東國の兵は、あの九郎判官が率ひて上つて来たさうぢやが、宇治などもまた、く間に破つて了つたといふことぢや。あの鞍馬に落ちた遮那王がさういふ力を持つて来るといふこともそれも勢ぢや。源氏が榮えて、平家が衰へなければならぬ運命になつて来たのぢや——』

『何うしてそのやうなことを？』

『何うしてといふわけもない……。事實さうぢや。平家が榮える時であつたら、木曾の亡びるのを、かうして指をくわえて待つてゐるといふことは御座るまい。誰の心も一刻も早く京へと進んで行つてゐるに相違ない……。それなのに、さういふことが出来ない。兵も十分にあり、糧も武器も十分にあつてそれで出来ない。しかしこれも止むを得ない……。』

『何か面白くないことでも御座いましたのですか』

北の方はまだその態度が腑に落ちないといふやうにして訊いた。

『いや別に——』

『話して下され？』

『いや、別に、何もない。唯さう思うただけぢや。力を出さうにも出せないやうなハメに陥つてゐる平家を情なう思つたのぢや』

皆なは黙つて了つた。三人が三人とも或る力の壓迫を感じずにはゐられなかつた。それはあの崖の下に集つてゐた侍達の心を襲つたものと同じ暗いものであつた。急に明るい日影を暗くして行く大きな雲の影のやうなものであつた。

通盛はその暗い影をじつと見詰めるやうにした。

三人が口を利くやうな気分になつたのは、それから暫く経つてからであつた。

『それで気分は何うぢや？ 別に變つたことはなかつたか？』

やつと通盛はその暗い影の中から浮び上つて来たやうに、さういふことをいくら考へたとて爲方がない、出来るやうにしかならない、なるやうにしかならないと言つて思ひ切つたやうに、始めていくらか眉を明るくして話し出した。

北の方のお中はもはや人目に立つほど大きくなつてゐた。別に變つたこともなかつたけれども、その眉目の間に憂鬱な気分がそれと指さ、れるばかりはつきりと漂つてゐた。しかもそのためにその美しさは少しも減じはしなかつた。眉から目にかけて言ふに言はれない惱ましさと美しさが添つて來てゐた。

それは今に限つたことではなかつた。かれ等はさうして相對して、眼と眼を、顔と顔を、心と心とを合はせてゐれば、全く餘念はなくなつて了ふのであつた。いろいろな心配も苦勞も何も彼もなくなつて了ふのであつた。かれ等の坐つてゐるところからは靜かな小さな谷が見わたされた。その向うの赤ちや



けた崖の上には、面白い形をした松が高く欹つてゐた。

かれ等は屋島から師走に近い海をわたつて來たことを思ひ起した。その時にはあとに残つた人達が多かつた。一の谷まで行くのは嬉しいけれども、そのため足手纏ひになりはしないかといふ懸念が誰にもあつた。帝も後の宮も行くのであるから、その用事に携はつてゐるものは止むを得ないが、用のないものは成たけ此土地に残るやうにとのことであつた。通盛の北の方も無論残つた方が好いだらうと言はれたひとりであつた。その體で、段々人目にも立つやうな體で、戰場近くへ出かけて行くといふことはちと無謀にすぎはしないかとさへ言はれた。それにも拘らず、無理やりにその屋島を出て來たことを北の方は思ひ起した。かれ等は片時だつて遠く離れて住んでは居られなかつた。『何うしてかうでせうか。心配で心配で爲方がないことがよくあるので御座いますよ……。あなたがもしものことがあつたら、この身は何うなるでせう。とても生きてはゐられぬで御座りませうね』何うかすると北の方はこんなことを言ひ出した。またある時には『今と昔とでは、丸で反對になつて了ひましたね。昔は殿がこの身を思つて下さいましたけれども——その時はこの身は厭とは思はぬにしても、それほど思つてはをりませぬでしたのに、今は殿よりもこの身の方が離れ難うなりました。丸で反對になつて了ひました』などと言つた。お中に子供が出來てから、一層さういふ風になつたやうに見えた。

これまでも出陣には、きまつて將來のことがかれ等の間に取換して語られたが、今日のやうに突詰

めた素振を通盛はしたことがなかつた。大抵は笑つて話した。『何アに、さうした取越苦勞はするには及ばないよ。一二年の中には、きつともとの京に戻つて、昔のやうにしてやるほどに……』などと軽く慰めた。であるのに、今日はわるく沈んで、そのことについては碌に口も開かぬやうにしてゐた。深く思ひ詰めてゐるやうな顔の表情にも北の方は度々出會つた。

『しかし、東國の兵が此處まで押し寄せるといふやうなことは、さう急にはないので御座りませうね?』

何氣なく北の方が言ふと、

『それはわからぬ——』

『しかし急には——?』

『何ともわからぬ……。九郎判官は半日の中に宇治川をわたつて驀地に京に攻入つたといふから……』

『しかし、味方にも知盛どのなども居ること御座れば——?』

『何うなるかわからぬな』

通盛としてはつとめてその話を避けたかつた。

『御身は?』

『矢張同じぢや』



『本三位中將どと同じ手に——?』

『さうぢや……?』かう言つたが、だしぬけに、『今度は何うなることやらわからぬ……?』

『……?』

『さつきも言つたが、衰へかけたものは、何うにもならぬ。いくら力を注ぐものがあつても、覆へる大夏は何うすることも出来ぬと昔の人も申した——。生きるも死ぬるとは、昔から戦争のならひぢやに由つて……』

『それは申すまでもなければ——』

『しかし、何もこの身が好き好んで死なうと申すのではない。そなたのために、そのそなたの腹の中にある可愛いもののためにも、何うかして生きたいとは思つてゐる……。しかし、それも運ぢや。何うなるかわからぬ。そなたもそのことはもう十分覺悟してゐる筈ではないか。今に始まつたことではない……』

『それはさうで御座れど……』

そこにひよつくり柏が入つて来て、京から使者の來たことを知らせた。勿論それは軍事についての密使ではなかつた。屋島から此方へわたつて來てこの方、京にゐる北の方の母親と北の方との間にをり手紙の交通があるやうになつたが、その結果として、京のこともいくらか本當にわかるやうになつた

が、その使のものが今またそこに來たといふのであつた。揉烏帽子に行膝をつけて、誰が見ても商賈としか見えないやうにこしらへてあつたけれども、しかもそれは曾ては院の侍になつて、保元の時には崇徳上皇の如意嶽に落ちるのを守護奉つたといふ侍であつた。かれは京と一の谷の間を北の方達に頼まれて何遍となく往來した。月に三度も往來した。かれは途中源氏の兵どもにあやまれるのを恐れて、時に由つては、體の内までも搜されるのを恐れて、手紙は草鞋の緒に巻いたり竹の杖の中に入れて持つて來た。やがてその見馴れた顔がそこにあらはれた。かれは通盛がそこにゐるのを見て、慌たゞしけに禮をしてかしくまつた。

『苦しくない、苦しくない——』通盛は手で制した。

『それではおんゆるしをかうむりまして——』

その昔の院の侍はかう言つて托されて來た手紙をそこに出した。それを受取つた北の方は手早くそれに目を通した。

『別の變りはないか?』

『東國の兵が澤山入つて來たことがしるして御座りまする』

『母上にも變りはないか?』

『大宮通りには、もはやをられぬやうになつて、船岡のうしろの方にかくれたといふことで御座りま



す』

『さては噂通り東國の源氏の節度に統一されたと見ゆるな』

通盛は深く考へに沈まずにはゐられなかつた。その使者の話でも、京はそのため丸で空氣が變つたと言つても好いくらゐるであるといふことであつた。それといふのもその武士の中には、畠山とか梶原とか比企とか、すべて東國で弓矢を取つてことに名譽のあるものがのぼつて來てゐるためであるといふことであつた。木曾などは殆ど刃にも合はないといふくらゐに忽ちにして滅されて了つたといふことであつた。その使者の者は九郎判官義經が供のものを伴れて、逸早く入道の宮の御所に參上した時のさまの見事であつたことを眼に見えるやうに話した。

『ふむ』通盛は頭を振つた。

使のものは京の今のさまを話した。急に町が水を打つたやうにしんとしたことを話した。木曾のゐる時のやうな、さうしただらしない空氣は全く跡を絶つたことを話した。何處に行つても鄙訛の兵が立つてゐて、その特色のある胃が縦横に京の通りを歩いてゐることを話した。ことにそこに殘されてある平家の人達についての壓迫は非常に厳しく、今では誰でも町の中にはその身を置くことが出來なくなつてゐることを話した。通盛は急に思ひついたやうに、『ちよいと一緒に来て呉れ』と言つて手軽く衣裳を着換へて、その使者を伴うて、そこから遠くない假内裏の軍議所へと出かけて行かうとした。

北の方は送つて出て、『今日は住吉の方へおかへりになることは御座るまじ……』

通盛は考へたが、すぐ、『都合で何うなるかわからぬが、大抵はもどつて來る——』

此方で見ると、その京からの使者を伴れた通盛の姿は、坂を下りて、また上つて、赤ちやけた崖のところをすつと向うに歩いて行つた。それは好い日であつた。梅の花が白く浮き出すやうにところどころに咲いてゐた。侍が通つて行くあとから雑卒が二三人つれ立つて何か話しながら歩いて行く。かと思ふと、向うの馬場の方では頻りに責め馬をしてゐると見えて、風もないのに、黄い埃がぱつと颯つてゐるのが見えた。急に申の刻を報ずる鼓が高くあたりに響いた。

何とも知れない一種の壓迫がこの狭い一の谷のあたりを襲つた。それは大きな怪鳥の翼のやうな黒雲が次第に此方へ此方へと靡いて來て、いつかは日影を蔽はずには置かないやうなものだつた。北の方もじつとしてそこに立盡した。

## 二四

『足弱、女子はすべて船に召させ給へ』さういふ聲のあちこちにきこえ出したのは、二月の五日の午後の未の刻のことであつた。越前三位の北の方は柏を促し立てて急いで外に出た。

大勢の北の方や女房や雑仕達はそこに一團、かしこに一團といふ風に垣の傍などに集つて、何うして



好いかわらないといふやうに唯わくわくしてゐた。つい今の前、二位尼と時忠卿とは、生中此處等に彷徨してゐては、味方の足手纏ひにこそなれ、武將だちの助けには少しもならぬといふのを言ひ前にして、帝と國母とを伴うて、沖に漂ふ御船へと行かれたといふことであつた。宗盛の大臣も既に心は落附かず、一刻も早くそこを立出でられる支度をしてゐるといふ噂はそれからそれへと傳つた。

『何うしたら好いのぢやらう?』

『ほんにどうしたら?』

女の悲しさには、唯さう言つてゐるより他に手段とてもなかつた。かれ等はそこに通りかゝる侍を捉えては、濱の軍のことなどを訊いた。ある者はまだ大丈夫だ、そのやうに心配するがものはないと言つた。またあるものは、源氏の勢が強いので、とてもこの一の谷は防ぎきるものでない、『あの向うの山のかげは皆な源氏ぢや……』かう言つて慌て、向うに走り去つた。そこに能登守教經の北の方がやつて來た。

柏が傍に寄つて訊いた。

『船に乗りなされ、船に——。その方が大事な。たゞのお身でもないのに、いつまでもここに居るといふことは危い。嫂上、さうなされ!』

『御身は——?』

『この身は、まだ少し用もあるほどに、船には參られぬが、嫂上はいつまで此處にゐられても詮ない。一刻も早う船に召された方が宜しい』

かう言つて能登守の北の方はそのまゝ慌たゞしげに彼方へと行つた。

船に乗れば、もはや夫に逢ふことは出来なくなるとは思つたけれども——出来るならもう一度逢ひたいと思つたけれども、しかし今の際そんなことを言つてはゐられなかつた。越前三位の北の方は、今日の午前に、山の手の能登守の陣の假屋で夫に別れを告げて來たことを繰返した。とても別れられないのを、生木を割かれるやうにして別れて來たことを繰返した。それは能登守の言はれるのは理のないことではなかつた。『兄上はいつまで何をしてをらるゝのぢや。この山の手は大事な場所御座る。誰もよう參らうと申さぬのを、この教經が引受け申した。ぐづぐづしてゐて何うなる! 敵は今にも上から下して參らぬとも限らぬ。さうしたら何うなさる? 取るものも取敢へず、弓はあつても矢を番ふひまもなしに、一筋も敵に射向はずに落ちずばなるまじ……。兄上、別れの辛いのはこの身にもわからぬでは御座らぬが、もう好きほどにした方が好くはないか。兵どもの見る目もある……。』實際その通りであるけれども——それには一言もないけれども、それでも、殿の行くところまでは何處までもついて行つて、死なばもろ共に討死しようと思つたことを繰返した。陣の假屋の板だけを張りつけたところで、向うに夫が行つて了つた後までも顔をそこに押當て、歎息してゐたことを繰返した。それにしても何といふ光



景であつたであらうか。それは颯風のやうではなかつたか。あの住吉の本陣から通盛が戻つて来た時からいくらか経ぬ中に、源氏は既に昆陽野まで押寄せ、丹波道を押し進んだ九郎半官義經の兵は、三草山方面に進出して、一も二もなく資盛の手のものを破つて、全くこの一の谷を包圍して了つたではなかつたか。住吉からの退陣、各方面の武將を集めての大軍議、あたりは全くそはそはとして、誰一人落附いて戦ふものはなかつたではないか。『何うも止むを得ぬ。これも平家の運命でがな御座らう？ 戦ふだけは戦はう？ 今にして十分に戦はずしていつ再び戦ふことがあらう。山賀での惨めさを思へば、今度の戦争はいかやうも戦へよう——』かう言つて知盛卿が唯一人席を蹴立て、立つて行かれたといふことを北の方は思ひ浮べた。

夜の空が連夜真赤になつてゐたこと、それは源氏が農家に火をつけて勢を見せたのであるといふこと、それを最初に見た時のことを北の方は想ひ起した。柏が慌て、入つて出て見よと言ふので、急いで脊を穿いて垣のところへと出て行つた。山から海へかけて空は真赤に見えてゐた。かなりひろい村落に火を放つたらしく、見たところでは、たしかに住吉よりは此方になつてゐることであつた。北の方も柏もわくわくと齒の根を震はせながら、うすら寒い夜風に吹かれつゝ長い間立つてそれを見てゐたことを思ひ起した。否、いろいろな噂はそれからそれへと傳つて、生田の森の本營に置いてゐる平家の軍は全くそれに壓迫されて了つたなど、言はれた。ことに、山から山へと傳つて來てゐるらしい九郎判官

の軍隊はそこにあるものゝ心を一刻も脅威せずには置かなかつたことを思ひ起した。空を劃つてゐる山脈も、それを思ふと、堪らなく恐しい心で眺められたことを思ひ起した。ある夜はことにすさまじく赤く空が見えた。雨催ひか何かで、その火光が大きく幅をなして光つた。あとで聞くと、それは味方が源氏に對抗するために、生田の森の近くの人家に火をつけたのであるといふことがわかつた。

それでも通盛は北の方のことが案じられると見えて、隙を見ては、よくやつて來た。始めは戦争のことなどを話してきかせたが、次第に黙つてふさぐやうになつて行つたことを繰返した。北の方はそこに來て溜息をついた。船に行けば、もはや逢ふことはむづかしい。さうかと言つて、いつまでも此處にゐるわけには行かない。いつ戰場になつて了ふかもわからない此處にゐるわけには行かない。『それでは船に行くかの？』かう言つて北の方は柏に相談した。

ところへ、向ふから、見田が馬を走せてやつて來た。

ひらりと身を反して下りながら、

『や、こゝにゐらせられましたか？』

『殿は？』

『もはやつと右に出られました？』

『では、もはや——？』



『で、お使にまるつたので御座ります。兎に角、こゝに残つてゐても詮ないことであるほどに、船に遁れるやうにといふことで御座りました……。何にもさう案ずるには及ばぬ。一撃に源氏を打つて、遠からぬ中に、また迎へにまるるほどに、よう傳へて呉れとのことで御座りました』

『それで戦争は？』

北の方は訊いた。

『次第に迫つて参りました。最早今日明日で御座りませう。九郎判官の隊はずつと近く迫つて参つたさうで御座ります』

『では、いよいよ』

『しかし、お案じには及びませぬ。いくら源氏が強いと申しても、平家も山陽四國の兵を集めてをりますほどに、容易に破らるゝことは御座りませぬ。山の手には、殿を始め、あの能登守がらせらるゝ。東の手には知盛卿、さう容易くは破られはせぬと存じます……』

『それならば好けれど——』

『それでは船へ？』

『さういふ殿の御言葉ならば、その仰せに従ひまする——よう言つてたもれ』

『然らば——』

見田は忙しい身の、そのまゝ、ひらりと馬に跨つて、急いで元の路の方へと取つて返した。白い塵埃がぱつと颯つた。

\*

\*

\*

\*

\*

\*

しかしその日は、まだ誰も船には乗らなかつた。東の中城戸から須磨にかけては、殿上人や女房や雑仕などが一面に混雑と集つて、帝と國母とは取敢へず濱の宮を一時の假の御座所とすることにした。流石に時忠にしても、宗盛にしても、まだ勝敗のわからぬのに、慌てゝ船に乗るといふわけにも行かなかつた。海岸には、松の繪卷のやうに連つて、波打際近く小船の無數に寄つて來てゐるさまが、沖には淡路の島山を背景にして、大きな御座船を始め、數十隻の船が大旗小旗を立て、碇を下ろして泊してゐるさまが夕日の影の中に浮び出すやうに見えた。

## 二五

柏は假屋に大切なものを取りに行つてゐる中に、北の方を見失ひ、あちこちをさがしたけれども見えず、もしや再び陣屋の方へ行かれたのではないかと思つて、其方へと取つて返して見たけれども、侍や兵共で通るにも通れないほど雑沓してゐるので、とても此方には來はしまいと思ひ返して、そのまま元の殿舎のあたりまで戻つて來た。其處等も非常に混雑してゐた。一度船へと出かけて行つたものが、



あまりに早まりすぎたと言つて引返して来るかと思ふと、さうか言つて此處には居られぬ、兎にも角にも濱邊に行かう、そして船へ行くなり陸にとゞまるなり、そこで成行を見ようとすものなどもあつて、包を負つた女房だの、大切なものを車に積んで来て動くにも動けずに困つてゐる人達だのが、さし違ひでもするやうに往來した。夕日は山の端の松にかゝつて、その最後の光がわるく黄ろくその混雜した光景を照した。

柏は逢ふ人毎に北の方のことを訊ねた。しかし誰もそんなことに取合つてゐるものはなかつた。たまに見知つた人がゐる親切にそれを聞いて呉れても、いつものやうにそれを捜して呉れようとはしなかつた。『さつき能登守どの、北の方と、二三人一緒に濱の方へ行つたものがあつたが、その中に雜つてゐるはしなかつたか?』かう言つて呉れるが關の山であつた。混雜はいよいよ増つた。旗。長刀。弓矢。胡籥。さうかと思ふと、鼓や銅羅の音が人の心を狼狽させずには置かないやうにけたましくあたりに響いた。

東の城門を出て、濱の御座所に来て誰も北の方の行方を知つてゐるものはなかつた。『此方には來ぬやうぢや。誰も見たといふものをきかぬ』かう誰も彼も言つた。能登守の北の方は、濱の御座所に他の二三の北の方と一緒にゐるが、それをきくと、顔を蹙めて、『また陣屋へ行つたのではないか?』と苦々しげに言つた。

『そのやうなことは?』

『ないと言ひやるのか?』しかし、何うだかわからぬ。さつきも、船に行つてはもう逢はれぬと言つて居つたで、思ひきつて行つたのかも知れぬ……』

『でも、よもや——』

かう言つた柏の胸には、不圖心配なことが萌して來た。陣屋に行つたなら行つたで好いが、さうでなしに、自から死を思ひ立たれたのではあるまいか。越前三位の來られて居る時は、さういふことはなかつたけれども、ひとりである時には、わるく憂鬱になつてゐられるのが常であつた。いつも人知れず泣きぬれてゐた。罪のあるその身であることをくり返しくり返し言つてゐた。『何うせ、私のやうな罪の深いものは、その報酬を受けずにはゐられない……』などとも言つた。ある時は昔のことを思ひ出して、この人の世にさうした悲哀も罪もあることを知らなかつた無邪氣な時分がこひしいと言つて泣いた。今だに筑紫の海に沈んだ左中將のことが絶えずその胸に絡み着いてゐることは柏にもわかつた。現に、つい二三日前にもその夢を見たと言つて涙を流してゐた。そのことのために、何處かに行かれたのではないか。さう思ふと、柏は益々心配になつた。何故、あの時北の方をも一緒に假屋に伴れて行かなかつたらうかと後悔した。しかし何うにもならなかつた。夕暮は次第に夜になつて行つた。捜さうにも手段はなくなつた。